明治大正詩史概觀

北原白秋

明治大正漢詩史概觀

井土靈山

明治大正詩史概觀

序言

この文の意圖するところは明治大正詩史の概觀である。で、極めて簡潔であるを要する。考證や批判の微細を盡すには私はあまりに私の頁を吝に與へられた。私はただ大局を觀、眞核のみをつかんで、平易に公平に解說するより外はない。然し、さて之を實行に移すとなると、なかなかの困難をおぼえる。筆者自身がこの期の詩人の一人であるといふことも深く憚られるが、この六十年間に亙る近代日本の詩と詩人の業績とを通覽するにあまりに其處には目まぐるしい變遷があり、あまりにその渦卷が耀かしく激しい、急調を極めてゐる。

何れにせよ、ともかくも私は私の在るべき觀點に正しく立ちたいと思ふ。

1 日本詩歌の特性

言靈の幸ふ國

日本民族の祖先たる神々が高く矜持した思想の一つはその祖國を以て、我自ら言靈の幸ふ國と哲學したことであつた。この言靈の思想は崇敬に値する。以來數千年、事實に於て我が民族はこの言靈の思想をその言語表現の精神とした。

この日本民族は本質的にその獨特な日本の言語を基準し、整齊し、練磨し來つたが、また、時に應じて他を攝取し同化することに頗る聰明であつた。今日に於てもまだその總合なり統一なりの道途にあると見てよい。原始的單純と近代性複雜とを兼ね備へて、しかもまた東西の文化を圓かに渾融しつつあるこの民族の性情と理解力とは、世界に於ける中つ國としての好地位とともに優に恵まれたる未來を翹望せしめる。藝文について、殊にまたその眞髓とする詩歌について考へる時、この感は一入に輝きを增す。

上古は言はず、明治以來大正・和に亙つての新詩界の情勢を觀ても、或は思半ばに過ぎるであらう。

日本詩歌の本質的律格

世界の諸民族の詩歌がさうであるごとく、日本の詩歌も日本固有の傳統に十分恵まれて來た。明治の新體詩と雖も何らの光輝ある母體無しには決して生れ得る筈はなかつたのだ。ここに深く思を潛めねばならない。

片歌・混本歌・短歌・長歌・旋頭歌・神樂歌・催馬樂・和讃・今樣・宴曲・小謠・近世の歌謠等、記紀萬葉以來の歌謠の諸體を年次的に通覽する時に、しかく發生すべき原因があり、進化すべき當然の道程があつたことが思へる。しかも日本語としての本質的韻、語格、律格は斷じて日本のものであり、一貫して之等の基調を爲すものは亦五音七音の綯ひ交ぜであつた。

曲とともに存在した歌謠より獨立して、全く第一義の詩としての發達を遂げた抒情の短歌(五七五七七の三十一音型)、或は同じく和歌の一體として別に象徵の詩風を完成した俳句(五七五の十七音型)について觀ても、根本としての律格は五音七音であることが肯かれる。

徳川期俚謡の整調形式とも見るべき二十六音型（七七七五）について考へてもやはり同断であると言へよう。

細かに味解すれば、之等の五音七音は何れも二音三音の連鎖であり、二音三音の連鎖はまた時によつて四音六音八音の歌謡律を成す。しかも先きの五音七音と之等とが長短錯綜して所謂格に入つて格を出で、格を出でて格の精神を離れぬところにかの近世の小唄、俚謡、童謡の或る自由律があつた。かうした自由律が或は日本の詩歌としての自由律ではなからうかと思へる。詩が散文でない以上は、日本の詩が外國の詩の飜譯調でない以上は、日本の自由詩が日本の詩である以上は。

その流動性について

日本詩歌の重大は語韻の微妙なる連鎖にあり、交響にあり、調律の流動旋回にある。漢詩や西詩のごとき押韻法はあまりに意識して行ふ時に多くはかへつて死調を成す。本質的表現ではないからである。ただ單純なる短詩形にあつておのづからにして流露する時にのみ生きる。しかもかうした例證は歌謡の或物以外には極めて稀であらう。

その形子について

片歌の原始的五五調に始まつて、五七調の荘重に進んだ和歌は、萬葉より古今に移つておのづからな七五調の輕快を樂しみ、遂には新古今の幽玄體をもこの中に芬陀するに到つた。

一方、稍長詩句としての和讃は幾分の雜調より愈々七五の整調に入り、七五調四句のいろは歌（空海作と言はれてゐる）より、それと同形式の、或はその、連作體の清新な今様の歌曲がまた發生した。

のみならず、七五調の連續體は物語（たとへば平家物語の俊基朝臣東下りの條）、近世の稗史（たとへば馬琴物）、諸種の淨瑠璃（たとへば近松物）、俗曲、琵琶歌等にまで及んで哀々綿々たる主調を成した。

提唱のみ潔かつた明治の草創期の新體詩もまた主としてこの七五調を採り、時としては五七の古調を模したに過ぎなかつたことは全くあはれに微笑すべきものであつた。傳統の根强さであつた。

古典と新風

之と連關して考ふべきは、舊套を脱して清新の詞藻を當代の語彙調律、或は更に新様の形式を以て表現しようとする藝術上の精進はいつの時代にも見受けるところであつて、あながち明治詩の新體に於ける提唱にのみ限らない。萬葉、古今、今様、新古今、遙かに降つて近世の俳句、桂園派の歌調に到るまで、今日より見て既にゆゆしき古典となつた諸體も、その時代にあつては何れもがまた潑剌たる新風でないものはなかつた。

思ふに寧ろそれらの先人は夙に古典の美を學び、傳統を伺ひ、藝才高く、香氣若く、虚心の德と革新の英氣とがよく調和してゐた。たしなみが深かつたのである。之に較べると、明治詩の發生は粗雜で、何等の優れた藝術的氣品も雅致もなかつた。その提唱者であり實行家であつた諸家は詩人ならぬ學匠であつた故に、意氣のみ壯んではあつたが詩才が之に伴はなかつた。

ただ彼等は翹望した。

未來を、遙かに、圓熟した輝かしい未來を、未來の大詩才を。

かくして日本詩歌の母體の上に曾つて見ぬ新らしい胚種が芽ぶいて來た。

以來約六十年、幾變轉して、詩は盛んに興隆しつつ、愈々聖代の精華となりつつある。しかし

てまたあまりに放恣なる進出の餘殃は今や滔々として左方に散文化しつつある。

感謝すべきであり、戒心すべきである。

2　新體詩以前

邪宗門と詩

南蠻船の來航と紅毛人の渡來とは近世日本への一つの新らしい脅威であつた。邪宗門切支丹の東漸は驚くべき泰西文化の移植となつたが、ここに甚だ奇異とすべきことは文獻として散見する僅かの俚諺以外殆どさしたる影響も我が詩歌の上に來さなかつたことである。醫學はもとよりであるが、姉妹藝術たる繪畫に於ては江漢・田善の銅版畫を誘致し、北齋廣重等の浮世繪にも彼の骨法は明かに攝取されたに拘らず、當時の歌人・俳人の中に一の洋風詩體をも採つて行つた者がなかつたことは遺憾であつた。それは德川期三百年の禁壓主義に甚しく禍され、漢學の奬勵と國學の復興とに遮られて遂に何の爲すところなくて畢つた。博覽の史家新井白石すらも眞純の詩人ではなかつたし、一代の奇才平賀源内も上田秋ほどの西詩の愛慕者ではなかつたらう。元祿の芭蕉さへが談林の俗俳を正し、座談平語を詩語として正し、東洋の象徴句を完成したとはいへ、蘭人花見の風俗を句にしたくらゐで、詩形についてはただ和歌の一體を整へたに過ぎなかつた。藝文の爛熟期とも見られる文化文政時代にも遂に邪宗門新派體は現れなかつた。南蠻寺建立の當時ならずとも、少くとも桃山の盛時に詩の上の東西の交流が行はれたならば、蓋しその後の日本詩歌の開展は光彩陸離たるものがあつたらうと思はれる。詩に典籍に版畫に、明治四十年代より、最近に至つて盛んに南蠻物の流行を見ることに於て感慨切に深いものがある。

ただ、祈禱の讃偈、伊曾保物語などの飜譯に西詞の新樣と日本の古雅とを融和せしめたものはあつた。

蕪村の新體

天明の俳人蕪村にかの『春風馬堤曲』以外ただ一つの新體の詩らしいものがあつた。和歌にあらず俳句にもあらぬ連體一篇の詩句であつた。

北海老仙をいたむ

君あしたに去ぬ、ゆふべのこころ千々に
何ぞはるかなる。
君をおもうて岡のへに行きつ遊ぶ、をかのへ何ぞかなしき。
蒲公の黄に薺のしろう咲たる、見る人ぞなき。
雉子のあるか、ひたなきに鳴をきけば、友ありき、河をへだてて住にき。
籠のげぶりのはと打ちれば、西吹風のはげしくて、小竹原眞すげ原のかへるべきかたぞなき。
友ありて河をへだてて住にき、けふはほろとともなかぬ。
君あしたに去ぬ、ゆふべのこころ千々に
何ぞはるかなる。
我庵のあみだ佛、ともし火ものせず、花もまゐらせず、すご〳〵と行めゐる、今宵はことにたふとき。

長崎餘響

長崎勤番の武士がありのすさびに物した長崎への道中歌、たとへば逸名氏の筑後柳河出の橋より出發した七五調の連續體なども、やはり在來調であり、別に西詩の趣を移したものではなかつた。

ただ、『後夢路日記』の作者中島廣足が文化六年の夏に長崎に赴いた時、通辭猪股久蔭に囑

されて直譯したといふ阿蘭陀國風詩、『やよひのうた』のみは珍奇とするに足りよう。

後年勝海舟にも Louisian Heer! と傍書した譯詩「思ひやつれし沼?」といふのがあつたさうである。但し之等も調は五七の長歌であつた。然しながら發生期の新體詩の技巧に比すれば遙かにすぐれてゐた。(廣足海舟の件、日夏耿之介君の調査に據る。)

暑樹、曙鶯の新派

徳川の末期に於ける新派和歌の特長は當代の語彙と動律、或は鮮かな感覺とを以て整調し新裝しようとするにあつた。これとても三十一音の定型を固守した上のことであつた。然しながら、確かに彼等は清新派としての精神に立ち、舊套の表現を脱つたもののごとくであつた。ことに桂園派の歌風は寧ろその墮落した追隨者のそれらを飛び超えて、後の明治詩の手法に多大の影響をさへ與へたのである。

黑船來る

ペルリの黑船の來航はまさしく第二の紅毛禍であつた。一世は震駭し、尊王攘夷の志士は四方に起つて、遂には徳川幕府の倒壞となり、急激に局面は轉開して、ここに明治維新の黎明が來た。さうしてまた所謂文明開化の極端な物質的歐風崇拜時代が後を繼いだ。

この間にも何らかの詩的波動が、既に儀禮と戲弄の對照に過ぎなくなつて了つてゐた和歌・俳句・漢詩の舊體を壓してかの煙霞の絲とともにしんしんと滿ち來りつつあつたことは疑ふべくもなかつた。

「世界國盡し」

明治の二年に福澤諭吉の『世界國盡し』が上刊された。然しながら詩といふべくはあまりに無味粗雜であつた。單に七五調の地理歴史の書であつた。ただ、その平俗な現代語による表現手法は後來の新體詩に尠からぬ暗示を與へた點に於て或先驅としての價値は認められる。

その發端

世界はひろし萬國はおほしといへど、大凡五に分けし名目は亞細亞、阿非利加、歐羅巴、北と南の亞米利加に堺かぎりて五大洲、大洋洲は別に又南の島の名物なり。土地の風俗人情も處かはれば品かはる其樣々を知らざるは人のひとたる甲斐もなし、云々。

『小學唱歌集』

『小學唱歌集』は文部省音樂取調掛伊澤修二の編にかかる。明治十四年十一月に第一篇が發行され、十六年の三月に第二篇、十七年の三月に第三篇が出た。主として泰西の樂曲を選んで、之に添ふるに譯詞或は古典の今樣體、若くは新に歌詞をととのへ、專ら兒童の唱歌用たらしめんとした。「螢の光」「春の彌生」「奈良の都」などがさうである。

然しながら、之等はまだ新體詩以前のものであり、以外のものであつた。

3 新體詩生る

新體詩の發生

「泰西之詩。隨世而變。故今之詩。用今之語。周到精緻。使人翫讀不倦。於是乎又曰。古之和歌。不足取也。何不作新體詩乎。」(巽軒居士、井上哲次郎)

「切者同志一二名ト相謀リ、我邦人ノ從來平常ノ語ヲ用ヒテ詩歌ヲ作ルコト少ナキヲ嘆ジ、西洋ノ風ニ模倣シテ一種新體ノ詩ヲ作リ出セリ。但シ今成ル所ハ西洋ノ譯ニ係ル

モノ多シ。」（尙今居士、矢田部良吉）

「人の鳴らんとする時は、しやれた雅言や唐國の、四角四面の字を以て詩文の才を表はすも、我等が組に至りては、新古雅俗の區別なく、和漢西洋ごちやまぜて、人に分るが專一と、人に分ると自分極め、易く書くのが一ツの能。」（、山仙士、外山正一）

右三人の如上の提唱に因つて、その合著『新體詩抄』が世に謂ふ新體詩なるものの發生第一聲を擧げた。明治十五年の七月であつた。

彼等はこの自覺に立つた。さうして新詩に對するよき理解を示した。

「明治ノ歌ハ明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ、是レ新體ノ詩ノ作ル所ナリ。」（巽軒居士）

「方今ノ學者ハ詩ヲ賦スレバ漢語ヲ用ヒ、歌ヲ作レバ古語ヲ援キ、平常ノ言語ハ鄙ト爲シ、俗ト稱シテ之ヲ採ラズ、是レ謬見ト爲サザルヲ得ンヤ。……余以爲ク宜ク平常ノ語ヲ少シク折衷シ、以テ稍新體ノ詩歌ヲ作リ、充分ニ吾人ノ心ニ感ズル所ヲ吐露スベキナリ。」（尙今居士）

その凡例の要點を拔いて見よう。

一、均シク是レ志ヲ言フナリ。而シテ支那ニテハ之ヲ詩ト云ヒ、本邦ニテハ之ヲ歌ト云ヒ、未ダ歌ト詩トヲ總稱スルノ名アルヲ聞カズ、此書ニ載スル所ハ詩ニアラズ、歌ニアラズ、而シテ之ヲ詩ト云フハ、泰西ノ「ポエトリー」ト云フ語卽チ歌ト詩トヲ總稱スルノ名ニ當ツルノミ、古ヨリイハユル詩ニアラザルナリ。

一、和歌ノ長キ者ハ、其體或ハ五七、或ハ七五ナリ、而シテ此書ニ載スル所モ亦七五ナリ、七五ハ七五ト雖モ、古ノ法則ニ拘ハル者ニアラズ、且ツ夫レ此外種々ノ新體ヲ求メント欲ス、故ニ之ヲ新體ト稱スルナリ。

一、此書中ノ詩歌皆句ト節トヲ分チ書キタルハ、西洋ノ詩集ノ例ニ倣ヘルナリ。

＊

彼等はかくして詩の意義を西洋の「ポエトリー」にまで進め、その表現にもかの句と節との連鎖、段格等につき西詩の書式を大いに採らうとした。然しながら、語調はやはり日本舊來の七五であつた。新體であり古の法則に拘はる者にあらずとは爲したが、拘はるべくまたあまりに古典の技法に通じなかつた。創作上の素養も淺く、野性であり、措辭も蕪雜なれば言ふところも平凡であり、事實に於て詩としての藝術的香氣も魅力も有しなかつた。

彼等自身、詩の新らしい自覺には立つたが、その詩的才能に於ける自信は怪しかつた。

「是レ我輩ノ稱心ニ嘉シトスル所ナレドモ、安ゾ知ラン世人ハ之ヲ奇怪千萬野鄙至極ノモノトナシテ唾棄センコトヲ。」

と言つたのはあながち謙讓言のみではなかつた。西詩に驚いてはまた

「其句萬種ニシテ韻ヲ踏ムモノアリ、踏マザルモノアリ、緩漫ナルモノアリ、疾急ナルモノアリ、其語勢ノ變化殆ド捉摸ス可ラズ。」（以上尙今居士）

と讃賞しつつ、遂にはかの律動自在の表現を捉摸し得ずして、唯に一律の七五調を以て冗長に緩漫に飜譯するに過ぎなかつた。以つて知るべしである。

巽軒も亦之と嘆嘆を同じた。

「余蚤ニ新體ノ詩ヲ作ラント欲セシト雖モ、其容易ノ業ナラザルヲ慮リ、先ヅ和漢古今ノ詩歌文章ヲ學ビ、ソレヨリ漸次ニ新體ヲ作ルノ路ヲ爲サントシケルニ」

この顧慮は正しかつた。然しながら革新者の熱意は一に早急である。

「余思フニ古今ヲ問ハズ、東西ヲ論ゼズ、凡ソ新體ノ詩ノ流行スルハ、大抵偶然ニ出ヅル者ニテ、必ズシモ百萬錬磨ノ勞ヲ俟タザルナリ。」

「若シ夫レ押韻ノ法、用語ノ格等ハ次第ニ改良スベキノミ。」

この言もまたあながち自家辯護のみではなかつた。

この巽軒が初めにその詩に命ずるに古來の長歌流新體の名を以てし、その後、新體詩の稱呼に決定さしたことも自ら這個の心理を示してゐる。

尙今はまたその才能の不適をよく自認した。

「安ゾ知ラン……或ハ大家ノ出ルアリテ其レ新流義ナルヲ善トシテ一層ノ工夫ヲ加ヘ、更ニ人心ヲ感ゼシメ、鬼神ヲ泣カシムルノ詩ヲ賦シ出スニ至ラザラ（ザラハ）ンコトヲ。」

この大正以後の盛大なる詩苑に在つて、かの草創期のこの言にひと度思を回らして見よ、洵に今昔の感に堪へないものがあらう。

＊

この『新體詩抄』に收むるもの、譯詩十三、創作六、合せて十九篇、譯詩にはブルウムフキールドの「兵士歸鄕」テニソンの「輕騎隊進擊」（參照）ロングフェルローの「人生の詩」、チャールス・キングスレーの「悲歌」高僧ウルゼーの詩」以上、山、カムプベルの「英國海軍」グレーの「墳上感懷」（參照）テニソンの「船將の詩」ロングフェルローの「兒童の詩」以上尙今等を蒐め、尙、山は沙翁の『ヘンリー第四世』中の一段を、また尙今と同じく『ハムレット』中の一段、かの有名な "To be or not to be" の條を個々に採つて冗譯した。

ハムレット中の一段（Act 冒頭）

死ぬるが增か生くるが增か、
思案をするはここぞかし
つたなき運の情なく
うきめからきめ重なるも
堪へ忍ぶが男兒ぞよ、
又もおもへばさはあらで
一そのことに二つなき
露の玉の緒うちきりて、
死んで眠りてそれぎりと
からきくるしき世の中を
さらりと去つて消えゆくも
卑怯の業にあらぬかや。（一山）

×

ながらふべきか但し又、
ながらふべきに非るか、
爰が思案のしどころぞ、
運命いかにつたなきも
これに堪ふるが大丈夫か、
又さはあらで海よりも
深き遺恨に手向うて
之を晴らすがものゝふか、
どうも心に落ちかぬる。（尙今）

創作には「拔刀隊の歌」「社會學の原理に題す」以上、山、「勸學の歌」、鎌倉大佛に詣でて感あり」「春夏秋冬の詩」以上尙今、「玉の緒の歌」（參照）巽軒がある。

「拔刀隊の歌」は當時の兒童走卒もよく歌つた例の「我は官軍我敵は」といふ西南役の志氣を吟じた軍歌風のものである。

社會學の原理に題す（冒頭）

宇宙の事は彼此の
別を論ぜず諸共に
規律のなきはあらぬかし
天に懸れる日月や
微かに見ゆる星とても
動くは共に引力と
云へる力のある故ぞ
總じて如上の中でグレーの嘉畔吟がすぐれ、

テニソンの「輕騎隊進擊の詩」が喧傳された。一里半なり一里半、ならびて進む一里半。

＊

新體詩の胚胎はその母體にとつては寧ろ遲きに過ぎたが、胚胎するやまた些か早産した。然し、平語を以て清新の詩風を敢行しようとした三人の進出は少くとも讃へられてよい。逍遙の『小說神隨』『書生氣質』よりは三四年の先行である。

『新體詩歌』

いち早くまた雁行して上梓されたのが竹内節の『新體詩歌』第一集第二集である。翌年にその第三第四が出、十六年にその合卷本が出た。この集には『新體詩抄』の諸詩章に加ふるに、小室屈山の「自由の歌」「外交の歌」の新唱があり、平野次郎の琵琶歌「月照の入水を悼む」があるかと思へば、佐久間象山の「轉居」の長歌反歌や藤田東湖の長歌があり、平家物語の「俊基朝臣の東下り」から俗曲の「長恨歌」「西行」「小督」などが交り、冒頭から又、甚しく永く世の傳唱するところとなつた「建武の昔正成は」の「櫻井驛遺訓」の歌、「抑も熊谷直實は」の歌などが混淆して、ここに索然たる草創期の錯綜圖を織り出してゐる。中にも巽軒が押韻自在。可喜。と推稱した坪井正五郎の「西詩和譯」は後人をして驚笑せしめる。

息の出入とからだの血、
しかのみならず宜心地
清きたましひくれ命
時計のめぐり早くたち
遽に變る針の位置
歲はすぐとも業とさち
なきは則ち無能無智
多く考へ氣をたもち
よき働きを爲せる後
長しと言はんこの命

日本語系の特性を知らぬこの押韻の自在とかは過ぎて却つて日本語の詩歌表現をして不自在ならしめてゐる。唯、屈山の「自由の歌」

天には自由の鬼となり
地には自由の人たらん
自由よ自由、やよ自由
なんぢとわれとその仲は
天地自然の約束ぞ（以下略、本文參照）

こそは、自由民權に熱狂した當時の全社會思想を歌つて、血沸き肉躍るの概があつた。成人も兒童も叫んで喬つた。――天には自由の鬼となり、地には自由の人たらん――かうした擬人法の粗笨や蕪雜をも忘れさせる時代の響があつたのである。この主たる新らしい國民歌謠に、副たるかの正成正行熊谷等の回顧の歌がそのまま軍歌としても盛んに行はれたのである。

『明治新體詩歌選』

二十年初刊本の『明治新體詩歌選』も內容は殆ど同斷であつた。吟唱用として編纂されたのである。この本では初めて金泥の繪廓の內に彩色した城の穗や兒童遊戲圖のある石版刷の表紙を用ひた。俗象同きである。插畫には英國軍艦の圖、兒童體操の圖、朝顏に寄せて學童を勵す圖、熊本籠城の圖などがあつて、今でも好事家の興味を牽いてゐる。

4　次いで來るもの

初頭の個人詩集『十二の石塚』

時は進む。十八年十月、初めて純然たる創作としての個人詩集が現れた。湯淺半月の『十二の石塚』が是れである。舊約「士師記」のエホデの故事に據り、猶太はエリコ城の民話を咏じ

た長篇の敍事詩であつた。傳統的な五七調の長歌形式ではあり、動律も緩く、些か張力は弱かつたが、少くともその行文の典麗と品位の都雅とは從前の平俗な譯詩類を超ゆること數等であつた。しかも亦一味の淸響異香を流露したものであつた。すがすがしい新體詩の紫の曙が漸くにこのうら若い基督敎徒からその幽かな風と光とを戰がして來た。

ここに肯かれるのは、作者の半月が、萬葉・古今、或は山家・金槐兩集に關心を持つ一方に於て、景樹の『桂園一枝』の讀者であり、その門末の一人であつたことである。景樹の近世調が直文以後の優婉體にも滲透した淸新性については深く考ふべきである。

半月は同志社英學校を出た後、宗門の讃美歌編纂にも關係したが、その著書には『半月集』（三十五年）『雅歌』（大正十二年）等がある。

『新體詞選』

十九年の四月には山田武太郎（美妙）編輯の『新體詞選』が刊行された。詩と言はず詞とした點は注目すべきである。收むるところ美妙（樵耕・蛙舩）紅葉（綠山逸史）九華（姓は丸岡、延春亭、梅のやかほる）三者の創作詩十篇、一樣に七五調の、時には俗に崩した外形であり、內容にも鮮新を缺いだ、さして價値あるものではなかつた。ただ紅葉の「書生歌」は珍とすべく、美妙の「戰景大和魂」は或は當時の激越調とも見るべきであらうか。後者は爾後普く喧傳唱歌されたあの「敵は幾萬」である。――敵は幾萬ありとても、すべて烏合の勢なるぞ、烏合の勢にあらずとも、味方に正しき道理あり。邪はそれ正に勝ち難く……

『孝女白菊の歌』

その翌年、又もや靑年子女の感傷を煽つた落合直文の『孝女白菊の歌』が吹き明つた。巽軒の漢詩を譯して一躍傳唱の女王となつたあの白菊である。

哀々たるあの曲節、あの長篇敍事詩の七五調、

阿蘇の山里秋ふけて、
眺め淋しき夕まぐれ、
いづこの寺の鐘ならむ、
諸行無常と告げわたる。（以下略、本文參照）

この直文の新聲は淸楚であり、生氣があつた。來るべき時代の文章をも暗示してゐた。素養ある國文學者としての詩技はかくして『新體詩抄』の粗鐵を爐爐の純銀とし響とした。次いで直文は明治の國文を正し、新派和歌の魁となつた。

S・S・Sの角笛

淸爽なるS・S・Sの角笛は吹き鳴らされた。明治の二十二年である。森鷗外、落合直文、井上通泰、市村瓚次郎、小金井君子等のS・S・S（新聲社）同人こそは好學にして氣鋭の新人達であつた。彼等はその二月の『國民之友』に合同の譯詩集「於母影」を發表した。藝術の薫り高く、聲響專へに正しく淸らかにして、曾て見ぬ均整と新樣の巧緻とに人を驚かしたものであつた。日本に於ける初めての好譯詩であつた。ただ惜しむところはよくも手際に洗ひ澄まされた水中の眞砂とは見えながら、是等にはかの春の若葉の土壤より萌えあがる本然の情熱と意慾とに缺ぐるものがあつた。藤村詩との差がここにある。然しながらその君子の譯したミニヨンの歌を讀めば香ひはレモンの花とそよぎ、響はミルテの風のやうに閑かに流れゆらぐものを感じさせた。一夜、ヨセフ・キクトル・フォン・シエヒフェルの詩を讀む傍らより、つぎつぎに直文が譯して行つたといふ「笛の音」のすずしさは。怪しくもまた、マンフレッドの一節の重々しくも

憂はしい油火の瞬きは。
ともしびに油をばいまひとたびそへてむ
されど我いぬるまでたもたむとも思はず（略）
ああ、花薔薇、
わがうへにしもあらなくに
などかくおつるなみだぞも
ふみくだかれしはなさうび
よはなれのみのうきよかは

この「於母影」の中には「マンフッド」その他を漢詩に譯したのもあつた。漢詩を和譯したのもある。

青邱子

青邱が身は、いややせに痩せにたれども
その昔、
五雲閣下にすまひけむ、涛々奏ぞしのばるる。（略）

世説に言ふ、鴎外等はこれによつて得た稿料五十金を以て、雜誌「しがらみ草紙」發行の資に當てた。

一朶の狂雲

ここに詩人としての最初の詩人らしい情熱に身を燬き盡して、現るるや、忽ちに滅び去つた者があつた。三十六歳で狂死した中西梅花道人である。名は幹男、彼は善慎善罵、高聳四壁を動かすかと思へば、飄々とまた蕭々と荒村破驛に漂零したといふ。醉ふと莊子を快誦し、常には寛容にして溫然よく人の愛敬を受けた。『新體梅花詩集』（二十四年三月刊）はその詩集である。稀覯本であつて今日容易に手に入らない。長篇「九十九の嫗」外二十一種、奇にして放恣、自ら匿すところがなかつた。獨創に富み、悲しいほどの純一性が時として稚氣にも見えた。もとより飄々として詩の巧拙に關心しなかつたかも知れぬ。

滴々露（たのP四）

くさ葺の〳〵、軒ににほへる干梅の、昇さを包みあからみて、ほやり〳〵と吹ききたる、ぬるみし夏のほこり風、さすがに驕るひる顔も耳あふられて芽もしほれ、
花ひしげ行く田舍道。
あの溯越な自由調の作者にして、このほやりほやりがあつた。惜しまれた人であつた。

後の差妙

『新體詞選』の美妙はまたその四年後に『新調韻文青年唱歌集』を編んだ。彼は蘆に婦人雜誌『伊良郡女』を刊行したが、その誌上募集した女性の詩も採つてこの中にある。美妙は大稟の藝才家であつた。負けじ魂の、何かは我と探究せずには止まなかつた。言文一致體を散文に創始した彼は、詩にも亦この野心を抱いたが、それは「蒙古襲來」の氣のみ急燥つた俗體か、「春の曙」の口語は用ゐても體系は文語脈以上に出でたいものかに了つた。彼の傷痕は譯詞に創作に、雅といはず俗といはず、雜多の格調や諸傾向の試作にまざまざと殘つたかかる集である。大祭日祝頌風の國民唱歌までも幾篇となく卷頭に掲げたり、影畫詩を畫いたりしたことは怪しむに足りない。大方は未完成品であつたが、譯詩には光つたものがあつた。兎に角この新調の『青年唱歌集』は詞華集として當時の詩界にあつて重要な高い位置を占めたものに違ひない。後の河井酔茗、その茅海散士の「花散里の弱法師」「鐘の音」の二篇がこの中に初めて選錄されたことも、興味深く觀られよう。新體詩運動にはこの時既に無名の青年子女も加つてゐたのだ。

大和田建樹

いつの世にも、藝苑のみと言はず、時流に先んずるが故に苦しみ多き殉情者と、之に乘じ

て後より巧みに泳ぎ抜く世才者との二種がある。梅花が狂死し、美妙が創造苦に焦慮する一方には己れに先見無く藝能無くとも追つて却つて利を贏ち得た人に大和田建樹がある。建樹は新體詩草創の機運に乗じて、いち早く『唱歌學生歌』（十九年）を出し、『明治唱歌』（廿二年）を編み、また自作の詩歌集『いさり火』（同年）を梓に上した。次いでまた詩人小傳を添へた英米獨の譯詩集『歐米名家詩集』三卷（廿七年）を世に送つた。詞藻草燥し、藝術價値は乏しかつたが、譯輯意識に秀で、いくらか秩序も考へてゐた。博く讀まれた所以であらう。この外、彼は續々に通俗の文學書、啓蒙的詩學書等を作り、後年大學派の美文・韻文が流行すればまた同じくその圏内に立ち交り、民衆向きの常習的詩工として普く知らるるに到つた。しかもかの全國を風靡するに至つた「鐵道唱歌」に又その晩年を營んだ。花ならば只細工の耀きであつた。

草創期詩壇の情勢

新詩草創時代は日清役前後に至る、この期間、年と共に詩集、外詩人の評傳、啓蒙書等の出版が相繼ぎ、詩論頻發し、雜誌興り、新進相結んで、各派の分野が自らにその據る所に旗幟を明かにしつつ、ここに第一段の幕を閉ぢた。

＊

宮崎湖處子の『歸省』（廿三年）鷗外の『水沫集』北村透谷の『蓬萊曲』（以上廿四年）半月の『天地初發』（廿六年）『透谷集』（廿七年）が出たのもこの中期である。歸鄕隨筆としての『歸省』は新詩を插んで、實寫の清容を見せ、『水沫集』は『於母影』の譯詩章を加へて、高邁達成の文藻を矜り、『天地初發』は太古にして太新、風格よく整ひ、三齣に成る『蓬萊曲』の長詩劇は痛ましくも讃非交々であつた。

湖處子の『ウォルズウォルス』評傳、高木伊作の『ゲーテ』評傳劇詩、臨井雨江の譯詩スコットの『湖上の美人』もこの期に出た。建樹の『新體詩學』も出た。

＊

池袋清風の『新體詩批評』美妙の『日本韻文に對する放任主義』『日本韻文論』石橋忍月、内田不知庵、路功處士の反駁、大西操山の『詩歌論一斑』と『國詩の形式に就て』鷗外の『日本韻文論』批判、逍遙の脚韻論議は雜誌『國民之友』その他に發表され、山路愛山の透谷詩攻擊は又、植村正久の辯護となり、遂には透谷の自殺に畢つた。

三十年には『早稲田文學』に「新體詩の根本二疑」其他諸家の詩形論が騷がれ、『太陽』の高山樗牛は朦朧派詩人排斥の論議を提げて無理解に嚴詰叱撻した。

紹介には、二十五年の交、『哲學會雜誌』に夏目漱石が「平等主義の代表者ウォルト・ホイットマンの詩に就て」を講説した。ホイットマン紹介の初聲であらう。かの『草の葉』の民衆詩人が逝つたのはこの年であつた。大正詩壇に於ける同系の民衆運動はその後二十餘年にして漸く緒に就いたのである。

殊に目を聳たしめたものは『文學界』同人、禿木、秋骨、孤蝶、柳村等の泰西詩文の飜譯、紹介であつた。學博く、氣品高く、風格正しく、つぎつぎに海の彼方の古響新聲を傳へて時人の詩心をそそつた。

＊

詩と關係深き雜誌は『國民之友』『伊良都女』『しがらみ草紙』『女學雜誌』『哲學雜誌』『日本評論』その他があつた。

創刊された重なる雜誌は二十四年に『早稲田文學』二十六年に『文學界』二十八年に『帝國文學』があつた。この三派の鼎立狀態は文藝史家の興味ある瞰望風景であらねばならぬ。殊にまた民友社に緣由を持つ抒情詩派の近景が如何

に視界に鑾鑾たる紅霞を匂はしたか。

鱉野天來、三木天遊は『早稲田文學』に、北村透谷、星野天知、島崎藤村、馬場孤蝶、戸川殘花、戸川秋骨、平田禿木、後れて田山花袋、上田敏、柳村(柳村は『文學界』に、直文系、美文韻文流の鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月は『帝國文學』に、(建樹も之に屬しよう)國木田獨歩、矢崎嵯峨の家、田山花袋、松岡國男、宮崎湖處子、太田玉茗は『抒情詩』同人に、將來ある新進も亦之等の諸派に認められ、また他に進出し初めた。河井醉茗、岩野泡鳴、蒲原有明、平木白星、杉谷代水、兒玉花外、伊良子清白、横瀬寳湖(後の夜雨)等がその尤なるものである。

青少年詩人の一團、文庫派の擡頭もこの頃である。即ち、醉茗、清白、夜雨の外に小島烏水、瀧澤秋曉、山崎紫紅その他がここに據つた。

萩の家の直文は淺香社を結んで、明治の新短歌を興し、正岡子規立ち、佐佐木信綱動き、直文門の與謝野鐵幹朝鮮より歸來意氣軒昂として虎と劍とを歌ひ、同門、猪之吉、薫園、柴舟、躬治等も大いに爲すあらんとした。

*

中期を過ぎて現れた作には巽軒の「比沼山の歌」集には鐵幹の『東西南北』『天地玄黄』鷗外の『月草』『かげ草』雨江・桂月・羽衣の合著『美文韻文花紅葉』新體詩人會の『この花』『抒情詩』『天遊』『天來』『松蟲鈴蟲』――かくして、その後に愈々藤村の『若菜集』の開展となつて初めて日本新詩の第一の集成期が來た。

*

軍歌の盛んに起つたのもこの頃であつた。日清戰爭の刺戟である。たとへば佐佐木信綱の「勇敢なる水兵」は「煙も見えず雲もなく」であり菊間義清の「喇叭の響」は「渡るにやすき安城の」であることは今日の中年者以上にとつて誰しも懷舊の情に絶えないところであらう。その他「膺てや懲せや清國を」「旭にかがやく日の丸の旗、ひらめくみ國の軍艦どもよ」に思ひ及べ。

透谷再說

曾ては『楚囚の詩』を恥ぢて破り、『蓬萊曲』に荒々しく惱んだ透谷は『文學界』結合の翌年に內省の極遂に自らを殺した。二十七歳の短生涯であつた。彼は詩人であつた。激しく熱し、鋭く光つて、この人生圈から消え去つた一人であつた。悲慘な死を遂げた事は梅花と一轍ではあるけれども、前者は飄逸の骨にして零淒し、後者は嚴肅眞摯にして疑惑した。彼は叫んだ、詩人自ら先づ詩たるべし。(1)

情の素たるや一なり。(2)

情熱は虛思の反對なり。(3)

眞摯の隣に熱意なる者あり。――熱意は不幸の友なり、熱意は悲哀の隣なり。――熱意は風濤を生ず。(4)

詩人は頑物なり。(5)

世を厭ふものは世を厭ふに先ちて己れを厭ふなり。(6)

罵倒すべき者あり、爆發彈を行ふ虛無黨が一寸を倒す時に自らを共に倒れて同じく硝煙の中に露と消ゆるの趣味を能く解せばいざ語らむ、現社界とは曰はず、幾千年の過去より幾千年の未來に亙るべき人間の大不調子是なり。(7)

天地の運流いつを以て極みとはするならむ。(8)

我は天と地の間を這ひめぐる一癡漢なり。(9)

死の刺は我が後に來りて機を覗へり。死は近づけり。然れどもこの時の死は生よりも樂しきなり。我が生ける間の「明」よりも今ま死する際の「薄闇」は我にとりてありが

たし。暗黑！　暗黑！　我が行くところは關り知らず、死も亦た眠りの一種なるかも、「眠り」ならば夢の一つも見ざる眠りにてあれよ。おさらばおさらばなり。（10）

彼の僅かな詩の中で「雙蝶のわかれ」には如何ともすべからざる命運の定まりが沈靜な律調で歌はれてゐる。透谷の影は藤村にしみじみと投げられた。藤村には透谷の記憶の方へどうかすると振り向きがちの姿が見えた。

＊

透谷の文章は眞率激烈の英氣で貫いてはゐたが、この種のものとして陷り易い語調の生硬と漢文調の古臭とを脫するには到らなかつた。（この點は高山樗牛とても同じであつた。）寧ろ『文學界』の眞面貌は異邦淸新の思想聲調を都雅幽婉な和文の語脈に移し植ゑた禿木、柳村（敏）、藤村等に却つてうら若い魂の輝きが見えた。まことにこの『文學界』によつて日本の新藝文の典麗な母國ともなるべき處女地の開墾が香草芬々たる間に行はれた。加へて他の諸同人の業績も讃へられてよい。

『東西南北』と『天地玄黃』

「與謝野鐵幹とは如何なる人ぞ、其の詩集『東西南北』に散見するところの題目、若くは風咏に據りて觀る時は、渠は嚮に朝鮮政府の聘に應じ、學部衙門の教官として日本語の教授を擔當し、其國の權官兪吉濬、趙義淵の人々と結託し、淸風雲の際、自ら奮ひて韓政府のため畫策斡旋したる志士なるが如し。その『東西南北』は其平素題咏の作、朝鮮にありて、故國に歸りて咏ずるもの、從軍諸作、雜什等、短歌新體詩數百を輯めたるもの、名けて『東西南北』といふ所以は、其風咏する所の景物、日韓兩國之天地に亙るの故を以てなるか。」『國民之友』八面樓主人はその評言の冒頭にかう紹介した。この集は三十年一月の版である。義淵の題字を初め、巽軒、直文、鴎外、鯛二、義象、小中村、正臣（坂）、子規、信綱等とりどりの序文序歌を羅列し、寄するに鐵幹調の新體詩見本を以てした辛辣骨を刺す正直正太夫（綠雨）の冷語までが收められた。小册子ではあつたがこれのみにても世を驚かした。鐵幹は自ら序して言つた。「小生の詩は、短歌にせよ、新體詩にせよ、誰を崇拜するにもあらず、誰の糟粕を嘗むるものにもあらず、言はば、小生の詩は、即ち小生の詩に御座候ふ。」「小生は、詩を以て世に立つ者にあらず」云々。之等の言葉が又問題を惹き起した。八面樓は「斯の如きの語は往々にして太だしき謙遜より出でたるにあらずんば、太だしき傲慢より出づ」と疑ひ、「鐵幹既に自我を立つ、後の悔を生ぜずんば禍なり。」と叱した。また或者は「抱負見るべし」「勇氣愛すべし」と贊し、又或者は「氣障らしき豪傑振り」と眉を顰め、極度の反感者は內容より序文の方更に見るべしと爲した。その內容についても毀譽交々であつた。その貶する者は露骨、生硬、蕪雜、亂調、不規律、輕浮、匹夫の勇、無謀、漢文調七の新體詩とし、その善しとする者は慷慨激切なり、斬新奇拔なり、逸宕なり、革命の血なりと爲した。結局その代表的なる二面は次の評言に見られよう。一、「彼は又豪壯雄大を歌ひ、頻に虎、太刀、鷲、血等の詞を用ふれども、その想等の淺薄にして、徒らに外見のみを飾り、七ツ道具を揮廻はす影辦慶たるを免れず」。二には、「其氣概を素し、肚語放言絕えて女子の體なきを喜ぶ」（云々）「纖柔なる今の新體詩壇に、鐵幹の如き稍男らしき作家の現れたるを喜ぶ」「從來の狹隘偏屈なる歌界を打破し所謂眞の國詩界を建設せんには必ず多少の荒療治を要すること猶恰も一國革命の際に當りて多少の騷亂を免れ難きと同じ。」かくの如き騷壇の駭目と亂擾との中に青春客氣の鐵幹はま

た次の集『天地玄黄』(三十年一月)を投じて立つた。當時、單行詩集としてこれほど氣を負つたものは無く、對社會性を帶びたものは曾て無かつたと言つてよい。この意味から之等の詩歌集は重視される。

『抒情詩』の諸星

民友社派の小詞華集『抒情詩』は『天地玄黄』に遅るること四ヶ月、同じ年の四月に刊行された。獨歩(哲夫)、國男、花袋、玉茗、嵯峨の山人(小むろ)、八百吉(湖處子)の詩を輯めてゐる。この詞華集は春の夜の幽かな一つの星座のやうに今なほその稚い感情の朧氣と微光とを投げかけてゐる。その序に於て、獨歩は詩體の自由なるを說き、「七五五七の調も可、漢詩直譯體も可、俗歌體も可。」なりとしてゐる。而して用ゆる漢語の範圍の廣きを主張し、一枕詞も場合に由りては大に可。」とし、其外形は散文らしく見ゆるも、瞑々の中必ず節あり、調あり、詠嘆あり」とし、「此確信によりて『山林に自由存す』を歌ひぬ」と揚言してゐる。この點、後の自由詩說に一脈の繫りがある。花袋は時の新詩壇の荒涼たるを詩徒の素質無く修養無き罪として斷じ、詩作の根據となるべき日本古來の和歌俳句の眞趣につきて研究の弛にすべからざるを說き、自ら「斷乎たる主張を以て七五・五七調を取るものの一人なり」としてゐる。七五・五七調のみに執するは偏狹であるが、その根據說につきては十分の理がありよき自覺を示してゐる。玉茗も同じく五言七言を根本とし、「我國の韻文は調のみにして平仄韻脚の必要なき事」、整調を第一とし、「國語を講究して和歌俳諧の調を味ひ、俚歌俗謠を資とすべき」を力說してゐる。小むろは虛實の妙を、湖處子は解放されたる詩の素朴性につき、自ら「予の詩卷は野なり、予が詩を讀む者は卽ち野に出でたるなり。」とし、美服者を見んと欲せば王宮に往けとの聖語を引き、「予が詩は風に動かさるる葦にだも適はざらんことを恐るるものなり。」と破した。國男はひたすらに謙讓してゐる。中でも獨歩はその所說の如く自由に諸體を試みた。

驚異

ゆめと見る〳〵はかなくも
なほ驚かぬ此こころ
吹けや北風此ゆめを
うてやいかづち此こころ。

をののき立ちてあめつちの
くすしき樣をそのままに
驚きさめて見む時よ
其時あれともがくなり。

山林に自由存す (その第一聯)

山林に自由存す
われ此句を吟じて血のわくを覺ゆ
嗚呼山林に自由存す
いかなればわれ山林をみすてし
沖の小島
沖の小島に雲雀があがる
雲雀すむなら畑がある
畑があるなら人がすむ
人がすむなら戀がある

獨坐

夜ふけて燈前獨り坐す
哀思悠々堪ゆべからず
眼底涙あり落つるにまかす
天外雲ありわれを招く

小むろにはまだ戲作者風の名殘があるが、他の四人には總じて溫柔な、また淸亮な脈々たる哀情が香つてゐる。殊に國男のほのぼのとした少年の純情詩には未だ汚れに染まぬうぶな雛鳥の持つ內に籠つたほの溫みを感ぜしめる。或は藤村の先縱を成したものではないか。い

や、もつと純情であるかも知れぬ。

君が園生の花うばら
ちりて亂れていつとなく
みやこの塵にまじるなり
都の市にたつちりを
何いぶせしと厭ひけん
うれしき君が住むやども
みやこの中にあるものを（「都の塵」の冒頭）

愛慕されたものだといふ。

5　新抒情詩時代の四星

新抒情詩時代

ここに假りに新抒情詩時代と做すのは藤村の『若菜集』擡頭の前後より有明の『春鳥集』敏の『海潮音』による象徴詩の勃興前までの約十年間を指すのである。この期は英俊魚鱗の如く起り、新感情の奔流隨處に熱鬪した。かるが故に草創期に於けるが如く一々の情勢については說くに亘細を盡し難い。簒簡宜しきを得なければならない。

島崎藤村

日本新詩草創期の統一者、新抒情詩時代の標幟、島崎藤村の處女詩集『若菜集』は明治三十年八月、若紫の地に大きな翅をひろげたクリーム色の援翅蝶を描いた不折の裝幀に成る表紙と、同じく寫眞版の插畫數葉とに飾られて若々しく江湖に見えた。芽香は紙の自らまで薫つた。

「遂に、新しき詩歌の時は來りぬ。
そはうつくしき曙のごとくなりき。あるものは古への預言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばはり、いづれも明光と新聲と空想とに醉へるがごとくなりき。
うらわかき想像は長き眠りより覺めて、民俗の言葉を飾れり。
傳說はふたゝびよみがへりぬ。自然はふたたび新しき色を帶びぬ。
明光はまのあたりなる生と死とを照らせり。逝去の壯大と衰頹とを照らせり。
新しきうたびとの群の多くは、たゞ穆實なる青年なりき。その藝術は幼稚なりき、不完全なりき、されどまた僞りも飾りもなかりき。青春のいのちはかれらの口脣にあふれ、感激の涙はかれらの頰をつたひしなり。こころみに思へ、清新橫溢なる思潮は幾多の青年をして殆ど寢食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。
われも拙き身を忘れて、この新しきうたびとの聲に和しぬ。」（以下略）

この處ましやかに水々しい、後の合卷本『藤村詩集』の序の言葉はとりもなほさずその當時の思潮を語るものであつた。彼は思つた。

「生命は力たり。力は聲なり。聲は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり。」

作らず、飾らず、情感とこしへに若く、清新の聲調に、合せて優婉なる近代の姿態をととのへ、平語を我が氣息の香韻に活かして、敢て戲弄することなく、まして奇癖の俳趣にも墮ちず、ただ素直に殉情の信を流露した。抒情詩の主要價値がこの素直なる自然の流露にありとすれば藤村の初期の詩のごときは蓋し上乘のものであらう。些か稚く單純だとは言つても、かかる純なる曙の抒情詩はあらゆる複雜期の詩風の源泉であり、心の故郷でなくて何であらう。如何なる時代にも愛慕され顧望されるところのよき母性がこの集にはあつた。

中に收めた詩は通じて五十一篇、前年度來約

一年間の所作(仙臺在住時の)である。

「おえふ」「おきぬ」「おさよ」「おくめ」「おつた」「おきく」(本文の名によるとりどりの女ごころを描いて、そぞろに情海の煙波に掉さしたこのうら若い詩人はまた、「四つの袖」のお夏清十郎に霰とたばしる愛戀の溜息をそそり、「傘のうち」の梅川と忠兵衛には亂れて匂ふ梅花の油をときめかして、後の有明の江戸繪風の詩「夏祭」の先縱を成した。その濃艷なる紫の燕子花と「鶏」の花」圖はまた清白の「夏日孔雀の賦」にもその精緻の描法を傳へた。「初戀」の稚氣、「哀歌」の傷心、「一人馬」の奔放たる、殊に「秋風の歌」「深林の逍遙」の清興幽韻は未聞の傑品であつた。

*

第二集としての詩文集『一葉舟』はその翌年の六月に刊行された。文を主にしたその中の五篇の詩は前集に比し目だつて感銘の稀薄を思はせる。「鷲の歌」「白磁花瓶賦」等が光つてゐる。

*

『夏草』(三十一年版)の中の新聲は漁夫の生活を歌つた「新潮」や、農人を味じた「農夫」の問答體詩篇であるが、曩の日の情熱は漸くその衰色を、沈潛の正調に現し初めた。寧ろその表現を七五調以外に複雜せしむべきであつたらう。この均整は却つて力を弱めた。この老成は或は早きに過ぎた憾みがあつた。詩の見地よりすれば寂しい思想の轉換期であつた。ただ、「農夫」下の卷の少女の詩、

ゆきてとらへよ、大麥の
畑にかくるゝ子兎を

の八聯一篇のものに生采ある童心の躍動が見られ、卷頭の「晩春の別離」の初めの二三聯に『若菜集』直系の情氣が更に深められて見えた。

*

藤村の四つの詩集の最後の集『落梅集』(三十四年八月版)にも愈々詩より別れ青春より離れて、靜かに人生の中に歩み入る虔ましい後ろ影が眺められる。眼は現實に、心はひたすらうら寂びて、たとひ壯年の歌を歌ひ、胸より胸に愛憐のわななきは傳へても、それは考へふかい觀想と五七の莊重味とから、香り高かるべき藝の魅力は燃え立たなかつた。その中で「常盤樹」の破調が思想的ではあるが雄々しく優れ、「柳子の實」の憂に流離の新しさも痛感された。「響りん〳〵鈴りん〳〵」の清しさ、「烏なき里」の童謠味、ことに「小諸なる古城のほとり」と唱ひ出した「千曲川旅情」の遊子吟はその典型的の佳什として終りを完うした。青春あながち芳ばしからず、老境必ずしも疎ましくはないが、いや、境涯老いて愈々神采の奕々たるべきであるが、藤村の自然主義傾向は自らを却つて他の散文へ向け換へて了つた。それは或は本質としての行き方であつたかも知れぬ。長篇の「寂寥」がその千曲川の初聯、象潟の合歡の條を外にして、淺間佐渡と連想の巧を凝らしたのも詩の上の張りと感興とを次第に喪失しつつあつたのではあるまいか。以來藤村の業績は一倍の重厚さと、精練細緻な描寫とを以てその光輝ある小説の上に增大された。

土井晚翠

藤村と、一時は詩苑の雙璧として稱へられた土井晚翠は、赤門の出身であつた。その處女詩集『天地有情』は『夏草』より遲るること四ヶ月。三十二年四月に上梓された。その詩篇の大多數は既に『帝國文學』『反省雜誌』等に發表されたものである。

晚翠は敢て理想を夢みる人、彼は詩の理想を歌ひ、詩人を歌ひ、萬有を讚へ、天地の靈と道を信じ、星と花とに塵外の清淨性を慕ひ、月に戀を聯想し、墓上の花には人生と神業とを忍び、暮鐘に天地の有情を夢みては時劫の永遠

と小兒の思無邪とに跪いた。轉じては史上の英傑に思慕を寄せ、治亂興亡の果敢なさに萬縷の涙をそそいだ。その中でも長篇の「星落秋風五丈原」は諸葛孔明を咏じて遺恨の曲切々嘈々たるものがあり、好んで青年の吟ずるところとなつた。感傷的にして單純なその初期抒情詩の「星と花」は又詩美を憧憬する可憐な少女をも喜ばせた。

天地有情の夕まぐれ
わが驚鷺の夢さめて

かうした「暮鐘」の一節なども、その幽雅にして縹緲たる內容とは反對に、行軍中の中學生等の軍歌として却つて豪快に合唱された。調に據るのである。その漢語調の表現は又特殊の魅力を以て時流に臨んだ。甚しく意を用ゐた彼の勢調上の表現技巧は往々內律の眞を過り、熱してはまた生硬の韻を爲した。しかもその成功したものにはおのづからに朗々の聲があり、清亮の響があつた。

『曉鐘』（三十四年五月版）の中では「萬里長城の歌」（本文參照）が有名である。他にも「黑龍江上の悲劇」「富嶽之歌」等の長篇詩はあるが、感興汪溢の餘は、彼自ら彼の最上級の美辭と漢音の高調とに蠱惑されて了つて、その缺所とする觀念的誇張と行文の放肆とに氣づかなかつたらしい。寧ろ一の異色の輝きは要約された短詩の「おほいなる手のかげ」（參照）にあらう。

第三集『東海遊子吟』はその美所ならぬ一面を愈々複雜化し混亂せしめたに止まつた。

然しながら、晩翠も藤村に對つて現れていい人であり、時代も求めたものを與へられたのである。

薄田泣菫

藤村、晩翠の併立に次いで、詩壇はまた泣菫と有明とに興味ふかい其後の對照者を見出した。ただ別格の晩翠を除く三詩人には日本詩歌の傳統としての本流の繫りが因緣的にかの秋夜星座の圖に見るがごとき金の直線を感ぜしめた。

泣菫の處女詩集『暮笛集』の上刊は三十一年の十一月、即ち『夏草』の翌年であつて、『天地有情』とは同年の版であつた。

キーツを愛慕したといふこの新詩人の多感にして才思、奔逸の趣ある、『若菜集』の情熱に比して些か度は薄いかと思はせたが、彼にもまさる近代の閃く雜色が朱に紫に入り交つた。その語感にも措辭にも調律にも附き纏つた一種の泣菫癖はその獨自の新彩に於て却つて時人を蠱惑する何かがあつた。その漢語と雅言との意識的交錯については、時には何の吃々かと世の評者をして怪しましめ、聽官の訓練發達未だ足らず、恐らく樂耳を缺く人なるべし。宜しくその訓練を計れとの好意的忠告をも敢てせしめた。しかも衆口はほぼ藤村に雁行するの詩人として一致したやうである。思ふに耳疎き雅言の驅使にも既に來るべき古典的風格の大成は豫感されたのである。なほ中に收めた七五調長篇の「尼が紅」や、「古鏡賦」「村娘」等は佳品として目されたものであつたが、此の集の特徴と見るべきは「山雀」以下十九篇の寧ろ絕句體八六調の創成であつた。

長鬚風ある放れ駒の
牝馬の遺目に狂ふごとく
軀の熱情一つによりて
春の日ひねもす君を思ふ（『軒端の草』の冒頭）

第二詩集『ゆく春』（三十四年十月刊）に移ると、從來の八六調の一體は「遠情」「夏の白晝」等の香りよき景情となり、七四の新調、或はそれらの交錯調にも、豐かな何ならぬ幽雅と哀愁とを匂はして來た。この種のものに「沙彌がうたへる歌」

華籠に盛れる木蓮は
香爐の灰の冷ゆるに、
脆く落ちて行春の
ながき愁を止めぬ（その初勝）

「夕の歌」「夕暮海邊に立ちて」「夕となりぬ」「低唱」等の佳品がある。殊に「破甕の賦」「郭公の賦」は傑れてゐた。前者は藤村の「白磁花瓶賦」の後を承け、後者は啄木あたりにその遺響を傳へた。集中の白眉は七五の「石彫獅子の賦」であらう。藤村の「鷄」と清白の「夏日孔雀の賦」との中繼となるものであつた。「南歐の人」では藤村に見るごとき農夫生活の平和と苦闘と悲哀とを歌はうとして單に小引に止み、英杜戰爭に義憤を發した「ああ杜國」の長詩篇は對社會的感覺に鋭き才人の一面をいち早く明かにして却つてその本性に非らざる理由で非難された。然し、後年の聰明なる新聞記者たり才機縱横の『茶話』の著者たるより推せばあながち怪しむべきでなかつたかも知れぬ。だが、この傾向はその後彼の詩には一切姿を消した。なほ他の「巖頭に立ちて」等については、あまりに取り澄ます詩人意識を街耀なりと見られた事もあつた。何れにしても泣菫の名の示すごとき時代にあつてそぞろに詩魂を磨き、象牙の白塔に籠る情想人の態度は或は日に立つたであらう。彼は鐵斬に酬いて「娶らず嫁かず天蓬の潔きを法と思ふもの。」と歌つてゐる。

＊

『二十五絃』（三十九年五月刊）には三種の傾向が交響してゐる。

一つは『ゆく春』の「夕の歌」と同詩形のもので、「二月の一夜」、五月の一夜」、翡翠の賦」、霜月の一日」、霜月の一夕」、神無月の一夜」、神無月の一日」などである。その内容精神とするところは「夕の歌」などのそれらより次第に進んで自然法爾の禮讃となり、圓かな佛の慈悲光に和魂のいみじき悅びを搖らめかすやうになつた。その巧みに融和された古語の薫りは、柔かでたゆげな調の吐息と相俟つて、雅びやかな心のときめきを感じさせた。ここには青春の情熱が漸く衰へ初めた世の中年の詩人に來るべき沈靜典雅なる宗教的情操の密醸が行はれつつあつた。技巧の圓熟につれて徐々にその生采は失はれつつもあつたと見るがよからう。

二つにはかの藤村の「常盤樹の歌」とよき對照たる「公孫樹下に立ちて」（三十四年作）を機緣として開かれた「雷神の歌」より「金剛山の歌」「天馳使の歌」に至る三十六年代の長篇敍事詩の創成である。

ああ日は彼方伊太利亞の
七つの丘の古跡や
圓き柱に照りはえて、
石床しろき囘廊の
きざはし狹に居ぐらせる
青地襤褸の乞食らが、
月を經て來む降誕祭
市の施物を夢みつゝ
ほくそ笑する顏や射む

を冒頭にする「公孫樹下に立ちて」を記憶する人々は如何にかの當時に愛慕吟唱したか、思うて感懷の新なるを覺えるものがあらう。「雷神の歌」は京都加茂神社の傳說に結び、「金剛山の歌」にはその山の高邁嚴肅なる曉色の大悅を讃仰し、「天馳使の歌」は「伊弉諾伊弉那美の黃泉つ比良坂の傳說と、橋立傳說と、比治山の羽衣の傳說とを結び合せて、永遠の女性の慈悲を歌つた」と自ら言つてゐる、壯大にして縹緲神に入るなる一大篇なる。古語、新造語入り亂れて自在縱横なる彫技の渾成は前代未聞の事であり、一代の古典的詩人としての大をその風格としたものであつた。秋はまさしく泣菫の時代となつた。越えて三年、役の小角の女神結縛の傳說に

アイスヒュロスのプロメシュウス結縛とを聯想綜合して成つた「茘城の神」の構造と規模の壯とは恐らく紡事を散文にゆづつた今後に於ては少くとも詩として現れぬであらう。またこの種の徹したる古雅と卓拔なる藝才とは容易に後を繼がしめないであらう。この詩人はこの「茘城の神」をその詩の最高峰に輝かして、自らは遂に詩壇を去つてしまつた。思ふに別種の長篇を成すには或は七五調以外に變化を求むべきであつたではなからうか。それとも時の象徵詩の影響にその行くところを迷つたか、倦じたかであらう。

三には近世の歌謠體を取り入れた「草にならばや葵のくさに」の「戀ごころ」「さりやな、戀のたはむれ、さりやな」の「戀のわな」「やれ、やれ、やれな、ゆくりな」の「花賣女」或は待心、海女、紅梭等を歌つた新樣の「ことうた」等である。この種のものは『白玉姫』（同年刊）の中にも見え、後の童謠體『子守唄』（四十一年刊）にも餘香を流した。それらは古調と口語の柔みある綯た交ぜを計つたものであつた。何かただ現代には疎く、あまりに洗練し過ぎて、その内なる感動の生々律が稀薄であつた。歌謠はやはり時代精神と時代語とにかけ離れてはただ假初の優なる手すさびに畢るであらう。

泣菫の象徵風の詩については、後に説くことがあらう。

蒲原有明

やさしきこころのうちに愛のひそむは森のみどり葉がくれに鳥のすむに似たりといふなるに、このはかなき草わかばのかげにはいまだ夢さそふにほひもなきがごとく、わが調に慣れぬ胸のおもひは色をも彩をもたしあへぬをいかにせむ（處女詩集「草わかば」の自序）

このいみじき『草わかば』の語感はさながらこの詩人がうら若くして求めた近代の感覺と想念とを暗示する。かの若菜や葦笛の語調に比較して見よ、ここにこそ新趣の五月は香り、官能の觸角が動く。

その初め、二十七八年の交、同人誌『落穗艸紙』に掲げたといふ詩の一つ「山東岬角の燈臺」は知らず、尾崎紅葉の庇護によつて初めてその「日神頌歌」を『讀賣新聞』（三十一年）新年附錄に寄せた蒲原有明も年少にして亦古典のよき嗜みを知る詩徒の一人であつた。殊に學んだ英語を通じて、スキンバアン、ブラウニング、中にもロセッティの感覺的、神秘的、心理的な發想及技巧はその詩を耽讀した若者に影響するところが尠くなかつた。

『草わかば』の主調は主として藤村より流れ來て草にせせらぐ七五の調べであつた。

手にふれたまふことなかれ
うれしき君とおもへども
まだうらわかき野の花は
熱き情の日にたへじ（「をとめごころ」の初聯）

然しながら晝も夢見る浪漫的詩人の熱想が彼には深く祕められてあつた。

彼を一概に情熱の詩人に非ずとする或る評者の言葉は謬つてゐる。彼の情熱は炎と騰ることを自らたしなめつつ、勾として蒸すものの心を心としたかのやうに思はれた。

かなたに消ゆる世のかげの
みだれはここにをさまりて
青野花草日にとくる
白銀の音に似たりけり（「青野花草」の一節）

或は

わがなやみ君がよろこび
わが愁ひ君が琴のね
白銀の獵矢を君は
小男鹿の痛手ぞわれに（「君やわれや」の一節）

この新抒情詩の幽韻はなみなみと思へぬ。

果然その後の象徴詩にその片々の斑紋が、色と響き光と匂つて、豹の背のゆらぎとなり、月夜原頭を走る麒麟の首の林となつた。

牡蠣の殼なる牡蠣の身の
かくもはてなき海にして
獨りあやふく限ある
そのおもひこそ悲しけれ

といふ「牡蠣の殼」、

苦吟あやめもわかぬ時
靈光頭を射るごとく
鷗よはじめ汝を見て
心竊かに驚きぬ

といふ「可怜小汀」に見る靈性の芽生、菱の實とるは誰が子ぞや

くろかみ風にみだれたる（原作の初聯）

その母郷九州の旅にては「菱の實採るは誰が子ぞや」と眺め入つたが、

あやしむなかれわれはたゞ
なさけのかげを慕ふのみ
さながらわれは岩櫨の
枝に來て鳴く小鳥のみ

つつましくかく歌ひとどめた青春の好もしい氣品はまた心ある人の胸を影の匂の水陽炎の輻射光のやうに撲つて燃えた。

＊

『獨絃哀歌』こそは『草わかば』の香韻より出でて、更に細みの金屬性の切々音であつた。その行と行とは亂れ啼く朝明の蜩のごとく啼き連れつつ、また起き伏しつつ、怪しくも幽かな靈性の光と匂とを擦り合せた。

あだならまし
道なき低き林のながきかげに
君さまよひの歌こそなほ響かめ、
歌ふは胸の火高く燃ゆるがため、
迷ふは世の途倦みて行くによるか。

星影夜天の宿にかゞやけども
時刻の激浪刻む柱見えず
ましてや靡へ起き伏す靈の野のべ、
沁し入るさびしさいかで人傳へむ。

（原作、其二聯まで）

ロセッティの示唆に幸されたといふこの清新體のソネット型は泣菫の絶句と對照して、より撓りがありより響が刻み、より藹たく、又、よりつややかであつた。立ち罩むる靄の中の色めく陰影までが何かあえかな愛慕のよすがとなつた。

盡きせぬ「愛」の花草讃めたたへて

聖菜園のつとめに獨りゆかむ。（其句）

と心の糧を日毎に耕す「聖菜園」、

少女はふかき涙に手さへ顫へ
をのこは遠きわかれを惜しみなげく。

あまりに痛きささやき霜に似たり。（第三聯）

と歎く「薔薇のおもへる」

――藹たき人よ、この時かしこを君
極熱豐麗の土しばし抽きて
優曇華匂ふがごとく君は過ぎぬ。

の喧騒の中なる一の花の「君は過ぎぬ」、或は白璧の面に映る柳の枝に無常を觀じた「萬法流轉」。

或る人々の間には泣菫にも優して、豐かに深い想念の密藏を讃へしめたその詩であつた。ただ日夏耿之介も責めたごとく、後の『有明詩集』に於ける之等の、または他の詩章の句々の改作は却つて訝かしいものの多々と失望とを感ぜしめたやうであつた。初の感興の、生色ある語韻の、内律の、新魔力が、隨所に理念の過ぎたる老功の、齒のなき口中音と衰化されて了つた。たとへば前掲の原作と比較して見よう。

つきせぬ慈悲の「めぐみ」を讃めただへて、
苦惱の畑のつとめに、なほも、行かむ。

題までが「苦惱の畑のつとめ」となつた。聖菜

園の語感にこそ近代味も新鮮性も頻吹く。

少女は熱きなみだに、こゑも顫へ、
をのこは遠きわかれを惜しみかこつ、
あまりに痛きささやき、霜のごとも。
手さへ顫へであればこそ餘情もあり、痛きささやきが沁みる。前にこゑと言ひ後にささやきと承くる、却つて痛きひびきを減殺する。どもの溫柔は似たりの清韻に如かない。

此の集にまた見落してならぬ特徵の一つがあつた。それは「落葉林の冬の日」や「靈鳥の歌」「佐太大神」等に見る覆唱の成功であつた。之等の三篇は何れも光つた彫琢品であつた。

落葉林の冬の日に、
落葉林の冬の日に、
さいかし一樹
（さなりさいかし）
その實は、柿いと高く、風にさわげり。
（その初聯、○印覆唱）

靈鳥の歌

鑿の手あらば鑿をとり、力をこめよ。
絃の音知らば絃を彈けかし。
ああ、さは問はじ、
「何處より來し、かの鳥」と。
（その初聯）

佐太大神

こころ愁ひあれば枳佐加比比賣、
しじに涙垂れて、惑ひ、もとほり、
天なる神魂、うつ海の窟に
嘆かへば、聲あり、——
「暗きかも、暗きかも、
ああ、暗きかも、この窟」（その初聯）

この集以後『春鳥集』までの三年の間に有明の詩苑に於ける象徵の風韻は愈々深みと香炎とを帶びて、『二十五絃』詩作時の泣菫と雙璧の妙光を成した。さうして次の時期には日本象徵詩の先覺たり詞宗たる彼自身を輝かした。

6 新抒情詩壇の星座圖

近代星座の發見まで

新抒情詩時代の四大星が二星づつ相對して、輝き去り、輝き來つた間にも、稍傍流とも見らるべき環狀星雲や、本流の銀河をさへも淺宵月夜のごとく煙らした太白星や、重星、連星、變光星、或は白孔雀尾の彗星、燦爛たる流星群に成る詩壇の星座圖は、おのづから相集り、相牽引して、時と共に新星の涌出が現前されつつあつた。しかも未だ發見されざる近代星座の幾らかが所謂父母所生の肉眼の遙かな彼方にあつた。

星學に言ふ。星座は大膽なる象徵藝術であると。かの新抒情詩壇の重なる星座と諸星の運行につき些か展望を樂しまう。

a 新進詩人の搖籃『文庫』

『文庫』派の一團

河井醉茗は『文庫』詩壇の師兄として、時には保母役としてその一團の中心に在つた。『文庫』はその前身『少年文庫』（二十二年）その前身の『少年園』（二十年創刊）を過去の幼稚な星雲として進化し來つたものであつた。藤村出現以前のまだ深い朧氣と微光との中を運行しつつ、單純な少年の感傷と詩魂とにいち早く一群の燭光を點じたが、その燭光の連珠はそれはあまりに幽かであつた。『文庫』としての光芒が認識されたのは改題新刊した二十八年の八月以來のことである。『文庫』は常に主として青年詩人の搖籃として稍保守的な平靜と永遠の詩の純愛とに賴つてゐた。かの新抒情詩統一の前期より、與謝野鐵幹の新詩社の『明星』全盛期、所謂星菫時代にもその後の象徵詩勃興期に交つても、『文庫』はやはり新進詩人の登龍門として光つてゐた。然し、稍その傍流の位置に在つた。

本流とも思へなかつた。

『文庫』派は一の詩の新運動を期して結ばれた詩派といふでもなかつた。ただおのづからにして詩の選者たる醉茗の周圍に集つた同好の少青年達の「環狀星雲」に外ならぬ。この『文庫』より出生した主なる新詩文人を列記すれば、醉茗、横瀬夜雨、伊良子清白、小島烏水、滝澤秋曉、千葉江東(龜雄)、塚原伏龍(久保田山百合、後の島木赤彦)、五十嵐白蓮、鮫島大浪、山崎紫紅、小松原春子(窪田うつぼ)、水野葉舟、一色白浪(醒川)、清水橘村、やや遅れて小牧茗湖、溝口白羊が出で、更にその末期三十六七年の頃には澤村胡夷、北原白秋、原田ゆづる(譲二)、人見東明、長田秀雄(赤髪鬼)等の新進が興つた。有本芳水、三木露風、萩原朔太郎(美棹)等の名も詩歌の投書中に見えた。三十七年の交には三谷蘆華、吉田常夏、中村星湖、秋庭露花(俊彦)、安成二郎、川路柳虹の徒も參加した。この一派の殘餘は四十年二月、『文庫』の改造に際し、獨立して新に醉茗と共に詩草社を興しその雜誌『詩人』に據つた。

文庫調について

ここで所謂「文庫調」の典型なるものについて解説して置く要がある。由來文庫調なるものは誰が定めたのでもない。醉茗を中にしておのづからさうなつたのである。總じて七五の主調である。その調律は幾分固く整齊してゐて、節と節との連關が自然の流露といふよりは何かの思ひつきで轉換する技巧的傾向があり、漢詩の絶句のやうでもある。内容の香氣はやや俳趣を溶かした田園味が多く、時には感傷に稚く、謬れば古臭で常凡となる。近代の熱情と感覺とからは疎く、ハイカラではない。是れを强ひて泰西に求むればウォーヅウオスの田園詩風にでも通ふものかと思はれる。然し當時の泣菫有明の清新體に對し、悠々獨特の詩風を以て、世の質樸な青年の詩魂を生育し開發した點は業績の見るべきものがあつた。そのすぐれた正調は今日の日夏耿之介、西條八十等の意外のところにまで遺響を好愛され、傳承されてゐる。

河井醉茗

さて、河井醉茗は二十四年の夏既に美妙の『青年唱歌集』に「花散る里の弱法師」「鐘の音」の詩二篇を採錄されたといふ。その後『少年文學』の投書家たる機緣によつて後の『文庫』の詩の選者に呼ばれた。その處女詩集『無弦弓』の公刊は『若菜集』に遲るること僅かに四年、乃ち明治三十四年一月であつた。收むるに「ちぬの海」以下詩三十三篇と外に小曲十五篇とを以てしてゐる。その詩風は溫藉にして平明、虔讓にして自然、清閑にして又爽涼である。

世づかぬ吾の子なれども
さすが產毛を撫でし時、
あまりに胸の若ければ
親といふにも憚かりし。(「ことぎらく」の第三册)

失つた吾が子を傷むにこの純性。このうぶな純情。その人その詩であらう。彼は大正末版行の『醉茗詩集』に序して「自然は私の視る神であつた。自然が有つてゐる奇蹟と、驚異と、神祕とを凡て無條件に享受しようとした。山岳の如き嚴肅、平和の如き柔和、大海の如き自由、青日の如き寛容、河川の如き流動、それらを巨細に體驗して我が情感に盛らうと思つた。」と言つてゐる。然しながら此の詩人には眞に自然の神に參入するほどの精緻な直覺的觀照、一念の凝視、主觀の白熱、それらに徹し盡さぬ何かの弛緩があるのでないか。この點より見れば清白の冷嚴、夜雨の人間意力と熱泣とが正しく是れに近い。唯、「私は單純に自己の體驗を自然化しようとさへ試みた。」といふ言葉はその

爲人に最もふさはしい朝の呼吸であるやうに感じられる。淡々として常に若く、昂らず、矜らず、自由に時世と移つてゆく聰明と無停滯とが人をして飽かしめない所以であらう。

＊

墨繩ただす番匠が
掌の上につくられて
朝狹霧の晴れゆけば
寶珠を天に捧げ持ち
岸に聳ゆる五層塔（埴輪の初驚）

この日本的閑靜とよき均整とは恐らく醉茗詩の典型を成すものであらう。その第二集『埴影』（三十八年刊）には、この他、「落葉を焚く歌」、「行く春の海邊に立ちて」（以上本文參照）「靈芝」等の佳什がある。その後の詩集としては『劍影』（三十八年）、『玉蟲』（三十九年）、『霧』（四十三年）がある。以來口語詩の勃興につれてその詩風が一變した。その詩『雪炎』（本文參照）は彼としては劃時的の作品である。

横瀨夜雨

世に筑波根詩人として知られた横瀨夜雨はその詩哀婉悲痛、氣禪惻々として人に迫るものがあつた。その初期の作「神も佛も」（『文庫』第一卷發表）は夙に醉茗の推奬するところとなり爾來續々と慘苦の吟情と野趣ある田園哀歌を絶たなかつた。年少、不治の病身であり、ただ眼前咫尺の自然を坐して樂しむ外に何の慰藉も見出し得なかつた彼が、專に詩に生き詩友の紳愛に生きようとしたことはあまりに凄涼な日常であつたらう。彼の友烏水の所謂單情粗心、或は稚童に似たる感情を洩らすことなしとしなかつたが、恐らく文庫派中彼が詩のごとく眞率なる人間苦を生血を以て詩に織りなした者は一人もなかつたと言つていい。

夜雨は獨學であり、たまたま醉茗、清白等の交友を得て、日夕、四方鬱悶の氣を詩に晴らすのみであつた故、その詩風は必ずしも暢達流麗とは言へなかつた。古調であり、野の聲であり、土俗的でもあつた。何も彼もが筑波を對照として捉ふすべなき香炎の美に詩魂を惱ますのみであつた。それにしても險澁の中に情癡があり、幽暗の裡に艷色の紅を宿した彼の詩品は時に却つて簡朴を亂して彫琢の煩はしい傾きもあつた。然し夜雨としての獨自の個性は嚴として彼以外に無いのである。

その處女詩集『夕月』は三十二年末の刊である。中にも珍らしく樸茂なのは「雉よ」である。

雲こそ飛べれ朝日さす
みなみの岡に巣守して
稀には空に羽うてど
たゞちに草にかへる鳥
雉よ

ゆふべは山のみほとより
光眞青なる天國の
大野に行けとすかせども
地の草をのみ戀ふる鳥
雉よ

きつね色せるつゆはらの
中に巣をくむ鳥なれば
しげみに莊嚴の尾を曳きて
あづまの野には出いるか
雉よ

なほ俚謠風を加味した「お才」（本文參照）は最初『文庫』（第九卷第六號）に掲げられ、「夕月」に入れる際に改刪し、その後更に訂正洗練した。この作は日本新民謠史の初期の例證となるものである。

第二集『花守』（三十八年）第三集『二十八宿』（四十年）何れも夜雨の詩風を代表するものであるが、佳什としては前者に「夕の光」、「殯宮」（本文參照）「人故妻を逐はれて」（上同）「俚謠風「やれだいこ」（上同）

「富士を仰ぐ」(上同)「無弦弓」後者に「野に山ありき」(上同)「雪燈籠」(上同)「夕雲」「吾屑は燦けり」がある。

騰波の淡海も亦彼の空想を縱にせしめた寶湖であつた。

筑波も暮れぬ野も暮れぬ
唄も暮れぬる藻刈船、
搖へる棹を操りて
行くべき方も暮れにけり（『沼にて』の第二節）

伊良子清白

清白はこの派の中での高村である。才藻も豐かに規模も大きく見えた。横瀨利根丸（夜雨）より先に輝造の名を以て『少年文庫』に現れ、後すずしろのやの雅號を以て『文庫』に投じ、四十年に至る發表數凡そ百五十篇、その名ある長篇詩に「海の聲山の聲」「南の家北の家」がある。其著『孔雀船』には是等の一節、或は終篇のみを收めて「海の聲」或は「華燭賦」とした。他の長篇に同派の詩華集『詩美幽韻』に採錄した「巖間の白百合」がある。中に「大蟹小蟹」の童謠がある。この一篇も童謠史の文獻として貴重なるものの一つである。拔いて見よう。

大蟹小蟹、谷の小川におりてきて
甲はぬがれず、ぬがねばならず、
横に這うたが落度でござる
をしへて下され、すぐな道、
どうせうぞいな、
泡もふかれず、めもたてられず
瀧は千丈、壺は藍
岸の柳子の木ねいろとすれば
波が洗うてゆりおこすゆりおこす
おこすのがとんと面白う御座る
柳子ぢやなし
口に善惡ない大蟹小蟹、
發矢とあたる
柳子の實で
大事な甲をわつたげな
われたと思うたらぬげたげな
大きな甲は石になれ
小さな甲は貝になれ

是等の全創作より「漂泊」以下僅かに通計十九篇を嚴選して、梓に上したのが、その唯に一册の詩集『**孔雀船**』（三十九年五月）であつて、既に當代の稀覯書として、店頭に見ること甚だ尠い。

まことに『孔雀船』は明治の名詩集の一つであらう。その「夏日孔雀賦」「安乘の稚子」は藤村泣菫のこの種の物に劣らず、「月光日光」、「五月野」、「不開の門」、「海の聲」（以上、本文參照）は直に象徴と謂の詩人有明に迫り、「秋和の里」（本文參照）の凄涼、「駿馬問名」の自在、共に出色であるが、若し夫れ「漂泊」の一篇に到つては夙くも象徴の原義をたづねて自ら縹緲たる夢幻の神韻に愁ふるところあらむとしたかに見えた。

清白はその後詩壇を遠離して、久しく志摩の漁村に在る。彼の詩の良きものは精緻にして嚴正、斧鉞いやしくも彫まず。名工苦心の跡歴然たるものがあり、虔虚にして一に冷徹してゐる。

二つの詞華集

文庫派の詞華集として些か見るべきは中でも二つの詞華集『詩美幽韻』（三十三年）『青海波（三十八）であらう。前集にはすずしろのやの長篇「巖間の白百合」を卷頭にして夜雨、醉茗等十五名の作を蒐め、後集には時の新進北原白秋の長篇「全都覺醒賦」を開卷に新舊五十八名の詩を收めおのづから『文庫』『詩苑の鳥瞰圖を成すものであつた。

『文庫』末期の新進

『青海波』の前半に名を連ぬるその『文庫』末期

の新進の中にあつて、當時の青春を代表した者に北原白秋があり、系統を保持した者に澤村胡夷があつた。白秋は三十七年、短歌の投稿より詩に轉じて、「春湯雜詩」その他を試み、その四月の上京前、長篇「林下の默想」を寄せて稍自信を得、翌年一月より四月に亙り同じく長篇「全都覺醒の賦」「海春夢路」「繪草紙店」等を矢繼早に發表した。韻文界の鏡花現れたり等の同記者の誇張的讃辭と共に、その第一歩の進出は些か華やかではあつたが、詩そのものは他の評家の所謂美辭麗句の羅列に過ぎなかつた。その處女詩集『邪宗門』に是等の一も採らなかつた所以は自ら深く嫌厭したのである。之に反して胡夷の作は「塊の浦」（參照）を初めその作るところの詩、見地定まり、その律格端正にして既に一家の風格があつた。白秋はただ詩技についてその將來の或物を豫知せしめたといふだけで、間も無く『文庫』を去つて了つた。

當時の新人でその後文名を成した人に長田秀雄、人見東明、原田（ゆづる）、服部嘉香、遲れて川路柳虹等があり、中期の人に窪田うつぼ、水野葉舟、一色白浪（酣川）、清水橘村、小牧暮潮、溝口白羊等があつた。

なほ「ここはお國を何百里」といふ軍歌「戰友」の作者眞下飛泉もこの一群の中の人であつた。

b 星と菫の「明星」派

與謝野鐵幹

詩壇年表に曰く、「明治三十三年、與謝野鐵幹、新詩社を起し、雜誌『明星』を創刊す。」

初めはあのささやかな新聞體の『明星』が明治の三十年代を通じて、日本短歌の未曾有の革命を遂げ、新抒情詩時代の機運に乘じて早くも詩歌藝術の一大勢力を張り、星菫派の王國として四方に君臨するやうにならうとは誰しも思ひ及ばぬことであつたらう。

この新詩社興隆の前年明治新體詩草創の三元老の中、矢田部良吉は四十九で溺死し、この年同じく外山正一が五十三で白玉樓中の人となつた。大西操山も逝き、翌年『世界國盡し』の福澤諭吉も敗血症に罹つて死んだ。越えて三十五年その好敵手正岡子規が逝き、師の落合直文が逝き、論客高山樗牛が逝つた。さうして二年前の三十一年に『文學界』が廢刊し、『國民之友』が廢刊した。

當時、藤村漸く老い、泣菫の擡頭と共に大阪よりは雜誌『小天地』が發行された。東西相呼應するの秋が來たのである。

天はまさしく鐵幹に幸した。

殊に一世の巾幗、鳳晶子の出現は『明星』を銀河系の光耀燦爛たる星座圖たらしめ、近代の芬香馥郁たる新歌苑林風景たらしめた。

詩と戀愛の時代、星と菫の浪漫精神がさながら熱風のごとく、猛紅熱のごとく、季節の空想と情癡とを吹きまくつた。世界の「青春」が亦彼等を祝福した。

ありとある架空の戀愛は天上の星斗を以て照明され、机上の悲哀は街耀の詞華を以て裝飾された。さうして鐵幹の虎と劍とにもいつしか脂粉の香が漂つて來た。

この時に當つて天下の俊髦才媛は翕然として新詩社に集まり、清怨瀟洒の畫風はまた興つて短歌革命の先聲に交響し、潑剌として開展してゆく『明星』の新容は雜誌界にも裝幀界にも驚目の生彩を耀かした。

以來鷗外、敏、孤蝶來り援け、泣菫、有明詩稿を寄せ、呼應して去來する同人その他には栗島狹衣、谷活東、山本露葉、小林天眠、高須梅溪、山川登美子、增田雅子、川上櫻翠、窪田空穗、水野葉舟、高村碎雨（光太郎）、相馬御風、平出露花その他があつた。

全く時を得たのである。

明治の新派は誰が興したか、之に答へて俺だと言ひ得る者は鐵幹の外に一人もあるまいとは鷗外の推輓であるが、之は誰しも否めないであらう。鐵幹の一大業績はこの明治の短歌革新にある。志氣、衒氣、匠氣、錯雜混淆して却つて近代の絢爛たる魅惑性を發揮し、生々奕々たる躍進をも爲し得たのである。之に比して大正歌壇の先人として業績以上に誤信され偶像化された俳人子規のごときは寧ろ短歌界に於ては勢力微弱であり嫉妬焦燥の埒内にあつた。何をして「鐵幹是なれば子規非なり子規非なれば鐵幹是なり。」と叫ばしめたか。容易に這個の情勢は觀取されるであらう。思ふに實質問題以上に影響の社會性と濃度とを檢索し、新運動の精神、業績につき深く廣く考慮すべきは史家の良心に外ならない。大正歌壇人の偏執と誤識と私心の多くは鞏蹙されてよい。

鐵幹を中心にする『明星』の業績は主として短歌に繫つたが詩に於ても新抒情詩時代の後期より象徴詩の勃興期にかけて、常に最高の權威たり、詩の統一的王國を成した新人風景は實に空前の盛觀であつた。

この間に當年の鐵幹も氣を負ふことに於ては後日までも片鱗に光らしたが、その詩風は周圍の情勢と共に詩材にも調律にも敏感に變貌しつつあつた。

『鐵幹子』

然し乍ら、『鐵幹子』(三十四年三月刊)に收錄された詩歌の創作當時は、鐵幹もまた『天地玄黄』の惰勢を持續した。

「天才よ狂熱と
賣藥の名には聞き飽きた
さても先生藥籠の底に
丸くひかるは那個の藥」

これかこれか
譯して實はうぬぼれの
えいと原語は忘れてそろ (今樣詩人)

或は

劍銘

佛きたらんか佛を斬らん
祖師きたらんか祖師を斬らん
わが手わが心二なし
敵はよくのがれんや
朱鞘七尺
ぬけば露たる
銘は誰れぞ
備前兼光
未だ知己の墓に掛けず
ひツさげて遊ぶ六大國
かの蘇秦の徒を嗤ふ
なんぞ爾く多辯たる

この劍銘の稚氣も「人を戀ふる歌」になると殺伐なる單の壯士風の疎狂も餘程哀情に融和されて來たのが見える。この詩はその時代色を歌つて、感激し易い青年の心胸を挾つた。

妻をめとらば才たけて
顏うるはしくなさけある
友をえらばば書を讀んで
六分の俠氣四分の熱 (その冒頭)

その後、彼の覇氣はなかなか去らなかつた。寧ろ性格に因するであらう。「日本を去るの歌」が一例である。覇氣の弱つた時はまた變體として白眼の冷嘲で現れた。短歌にも『鴉の雨』その他の中にも散見する。

敍事詩試作

家門は平氏、地は平安、
時は平治ぞ、天に謝せ

この「源九郎義經」の冒頭に落筆したのは鐵幹

であつた。かくして新詩社同人の連作長篇敘事詩の試みが三十六年の一月より『明星』を賑した。その後は白星の「幻境」が之を承け、三に林外の「初戀」が繼いだ。而して交々に連唱したが、鐵幹の「清水詣」『鳴鏑』が優に他を壓した。

次の「日本武尊」の連作の合同作者山崎紫紅、平野弔影、萬里、前田翠溪、大井蒼梧、晶子、相馬御風、川上櫻翠、茅野蓼雨（蕭々）、鐵幹等であつた。

この敘事詩の提唱は詩壇に影響することが多大であつた。他の機會に再説しよう。

鐵幹、晶子の作は合著『毒草』（三十七年五月）に之等を收めた。歌集『紫』とこの『毒草』によつて鐵幹は颯爽と轉換した。晶子は日露戰役當時人間愛の立脚點から「君死にたまふことなかれ」の詩を軍國主義者たちに投げつけた。

泡鳴、林外、白星については『白百合』の項に述べる。

後期明星派の新人

新詩社の新派和歌は直文の系統より出でて、同門の柴舟、蕁園、躬治を凌ぎ、佐佐木信綱の折衷派、子規の萬葉調を壓して、獨り天下を風靡し、新派和歌即新詩社の短歌時代を現出し、晶子の名聲紫女清女よりも高く、この派の驕盛、「新詩社の歌人ならずば歌人にあらず。」とさへ矜持させた。開花期は窪田空穗、水野葉舟、相馬御風の服退後も高村光太郎、吉井勇、玉野花子、平野萬里、茅野蕭々の新進一夜百首歌の競咏に鎬を削り、後には鷗外之に應じ、北原白秋また詩作の餘に象徴詩風の新短歌を制作し、クロ、ホルム、苦味丁幾、電信等近代の新感覺をも之に移さんとした。

ただ詩に於ては、十三年、泡鳴、林外、御風等の退社後は昵近なる社外の詩家、敏、泣菫、有明、鷗外等の來援を俟つて、輻射的にその光輝を自己に聚め、中央集權の榮譽を獨占したが、三十七八年の交には社内より啄木出で、萬里、蕭々出で、白秋出で、木下杢太郎、長田秀雄出でて、華々しき浪漫精神を高揚し、新抒情詩より象徴詩の新運動に參加したが、三十九年白秋、杢太郎、秀雄の連袂退社以來、散文界の自然主義勃興の機運にまた禍されて遂に四十一年の五月にその百號に至つて廢刊することになつた。

その後に來つたものが『スバル』であつた。

その後期の形勢については次章に再説する。

石川啄木

啄木は極めて早熟の詩人であつた。二十歳すでに一卷の詩集『あこがれ』（三十八年五月）を公刊して世を驚かした。年少もとより詩魂定まらて、その作るところの多くは先進泣菫、有明の模倣であつた。あまりに巧みな模倣、若しこの兩者の詩を讀むことなくして初めて啄木の詩に接したならば誰しもその流麗自在なる天稟の才筆に感嘆するであらう。それほど彼は暢達なる將來ある技巧の持主であつた。後年の『悲しき玩具』に於けるかの意識して破壞し、また放擲した一見無雜な短歌の作者とは殆ど別人の觀があるを以て、彼の短歌のみを知る人は多くは彼の本質に思を致さぬのである。彼は本來の技巧家であつた。かの三行歌の新風も破壞調も實は技巧家としての彼の悲しき玩具遊びであつたのである。あれは彼の技巧である。彼を單に一徹の眞率者、社會革命者、無技巧の歌人とのみ信ずる人には此言は或は奇異とされるであらう。然し乍ら彼が新短歌の如何に明星流であり、大部分は所謂生活歌ではなく、才の歌であり、白秋の新官能派の歌にも近かつたかは、雜誌『明星』『なり』『スバル』なりを檢し、歌集を精細に見れば了解されるであらう。ただ詩に於

ず、白秋が未だ青少年雑誌『文庫』に在つて同じく風雲を望んでゐた當時に、彼が詩の王國『明星』誌上に續々に發表した長篇詩を見て如何に心悸の充ぶりを感じえなかつたかといふことを知ればその詩技の達成といち早い躍進とが、ほぼ推察できることと思ふ。鷗外は彼の稟質に或は泣菫、有明以上の將來を賭けた。然し彼は詩に於ては遂に亞流に留まり、一家の風格を樹つるに至らずして止んだ。若し彼が早世しなかつたならば、短歌も眞の渾成に進み、詩に於ても或は元に還り更に獨自の表現にまで鍛錬しぬいたかも知れぬ。さうしてかの革命的社會歌人の今日の聲名などは皮肉にも彼の頭上に冠せられずじまひになつたかも知れぬ。寧ろ背反者としてプロレタリア歌人の群から或は石を投じられたであらう。白秋が『桐の花』の小完成歌調を自己革命の一端として根本から破壞した歌集『雲母』の當時に若し卒然として死に往つたならば或は異端、無法者、或は技巧拙劣者として、また革命者として或は啄木のごとき名を遺したかそれも知れない。興味ある問題である。それほど啄木は稀な詩技の要處を自得してゐた。ただ眞の底光りの技巧にまでは沈潛しずに表面のみを流れた。年少止むを得なかつたであらう。

c 『白百合』の上の三人

『白百合』同人

『白百合』は『明星』を連袂脱退したる岩野泡鳴、前田林外、相馬御風合同發行の雑誌である。三十六年十一月創刊した。三十八年六月に同志の一人泡鳴が脱退し、この雑誌は四十二年二月に遂に廢刊した。事業の重なるものは寧ろ民謡の蒐集にあつた。之等の民謡はその後林外編として出版せられた。『日本民謡全集』（四十年三月）『日本民謡全集續編』（四十年十一月）二卷である。

岩野泡鳴

泡鳴は特殊人である。縱横無盡にその行爲に、自己主張の眞率と迷妄とに寧ろ滑稽を感ぜしめた。その評論や詩作に於て彼がごとく個性を暴露したものはあるまい。彼は後に自然主義を一の自我主義として、自己の非道德、排感情的態度の代辯となし「自然主義的表象主義」「自然主義的表象主義」を提唱的詩を作つたり、又、「神祕的半獸主義」を提唱し、靈元一元論、感情自然論に達したが、その作るところの詩は、彼が一々に自己推奬をし、口角泡を飛ばして揚言するほどの價値は無かつた。粗にして雜であつた。尤もいい詩も作つてゐる。詩型については常に苦心發明せんとしてゐた。彼の眞の活躍は『白百合』脱退後にある。三十年代の彼の詩集に『露じも』（三十四年七月）『夕潮』（三十七年十月）『悲戀悲歌』（三十八年六月）『海堡技師』（三十八年十月）『泡鳴詩集』（三十九年十一月）がある。彼の書いた『新體詩史』では彼泡鳴はまさしく驢馬に跨つた偉大なドン・キホーテである。

前田林外

林外は星菫派の一人として新詩社の浪漫運動に參加し、常に極彩色の詩圖を染織した。後白百合に移つても同じく豐麗な美空と美の諧語と、夢の熱鬧と、鬱々たる悩氣、幻感とに滿ちた諸作を發表した。果して彼に眞の眞紅の六感の觸角があつたか疑はれる。新感覺の鮮かさもである。言葉のみの熱帶地に靈無き極樂鳥を飼つたのは彼である。（參照）然しまた驕師に過ぎたとは言つても彼がごとき光と香りと熱とを厭はしいほど他に飽滿を強ひた詩はそれまでに無かつたと言つてよい。中にも『夏花少女』は尤なるものである。

彼の詩集に『夏花少女』（三十八年三月）『花妻』（三十九年六月）『曩に言つた民謡集の二卷がある。

相馬御風

彼は主として短歌と評論とを書いてゐたやうである。詩にさしたる作は無かつた。四十一年に『御風詩集』を出した。

d　その他の諸星

高安月郊

月郊は『文學界』にも寄書し、教養あり氣品ある、閑雅清寧の詩人である。夙に抒情詩を書き、敘事詩「胡蝶軍」を書き、樂劇「後の羽衣」を物し、戲曲「嵯峨野の露」を公にし、重盛、遠藤、文覺の三連劇詩、公曉、幸村、中齋等の悲壯劇詩を案じた。集に『夜濤集』（三十三年十二月）『春雪集』（三十六年）『ねざめぐさ』（三十九年）がある。幽人ではあり、泣菫とも友とし善かつたが、博くは顯れなかつた。世とともに押し移るにはあまりに寂しかつた人のやうである。藝術精進の心と力とが伴はなかつたか、日常に餘裕が保て過ぎたかであらう。

大鵬の賦は成りにけり
楊州の花咲きにけり
牡丹の中に太眞の
ゑみより動く春の風

沈香亭に露散りて
赤き氷は池に解け
光とどむる明星の
手折る一枝に酒さめぬ

この「李青蓮」の初節はいかにもめでたいものである。ただ、後に至つて破綻が來る。持久力が弱いか、天稟か、性格によるか。「洛瓦の賦」（本文參照）にもこの弊が見える。なほ、「花賣娘」のやうな近世歌謠風の作もある。

平木白星

白星の詩は背廣の壯士を思はせる。覇氣横溢、衒氣に騷ぎ、詩魂は乾燥して調律粗硬、「日本國歌」を歌ひ、「亞細亞」を、「西伯利亞」を歌ひ、「全地球をのべて」感慨し、「望北の歌」に日露親和を唱へ、「處生の詩」に天職を嘔つて、而も語に香氣無く、句に潤ひ無く、頗る索然たるものである。寧ろ却つて「機おり唄」（本文參照）の野調に如上の詩篇に求められない本質的のものが認められる。或は彼は彼自身の眞の稟性について誤認してゐた。彼には夙く「アメリカ彦造」の詩があり、後には『心中お小夜新七』（三十五年、「片袖第三集」）『日本國歌』（三十六年）『七つ星』（三十七年）『耶蘇の戀』（三十八年）『釋迦』敘事詩（三十九年）『平和』劇詩（四十五年）の著がある。

兒玉花外

花外は『社會主義詩集』を出して發賣禁止をされた日本最初の詩人である。理由は治安妨害、三十六年のことである。彼は三十年に初めて林外等と『獨立雜誌』に詩を發表した。以來風のごとく突として鳴り、火のごとく燃えた。彼の詩風は鐵幣の劍氣にもあらず白星の覇氣とも選ぶ。粗笨であり、雜であり、時に市井の俗、浪花節にもまがふ。が、よき眞率と稚氣がある。邪念が少い。その熱狂の語聲と酒興の豪語調とは人をしてそぞろに微笑せしめる。そこに彼の本來の詩人としてのよい稟性があるのでないか。

『花外詩集』は三十七年二月の版である。後『天風魔帆』を出した、四十年一月。

窪田うつぼ

『まひる野』（三十八年九月刊）のうつぼの詩はその歌と共に當時の優れたるものの一つであつた。主調は五七の音であつて、時流とは離れて靜かに思ひ入るやうな、考ぶかく、實に卽して、よい寫生をした。

青一色、稲田のうへに
ひるがへる白きものあり
夏の日を翅にうけて
陽炎と化すらんけはひ、
描きたる繪ともまがひて
一つところ去らぬを見れば、
こや春の、花さく朝に
生れにしやさし蝶なる。

見て過ぎつ、二時ありて
前のところ歸りも來れば
なほ居るよ、同じき蝶の
えも去らず飄りつつ
日に燃ゆる紅き翅や
われはふと怖いだきぬ。（「夏の蝶」）

その他の詩に「順禮」「枇杷」「うたがひ」「いけにへ」等の佳品がある。

尾上柴舟

柴舟には譯集『ハイネの詩』がある。この詩集は、異國情趣の清新な内容を優婉な日本の七五調に移し和らげたものである。寧ろかの熱き戀慕を雅びに過ぎるくらゐ時として弱めてはゐるが、句々流麗で可憐である。當時の青年子女の愛唱詩集であつた。

春の夜風のぬるければ
さき殘りたる花もなし
心ともなくわが居れば
愛のおもひにまたなりぬ

いづれの花ぞわがむねに
堪へぬ思をおこさする
なくね絶えせぬ鶯は
そは白百合と告げぬべし（「春の夜風」）

小山内薫

彼には詩集『小野のわかれ』（三十八年）散文詩集『夢見草』（三十九年）がある。『小野のわかれ』の詩には後年の彼に見出しえない青年の清純がありに情操がある。當時ひそかにその詩を認めた知識者のサークルがあつた。

野口米次郎

ヨネ・ノグチは寧ろオーキン・ミラアの愛弟子として、獨立するやその未知の東洋味ある故を以て英米にその名を發見された。早くより本國の騒人にも詩を寄せたことがあつた。

その最初の詩集 "Seen and Unseen" は三十年八月の版である。"From the Eastern Sea" の日本版は三十六年である。他によく知られた集に "The Pilgrimage" がある。

三十九年六月、『あやめ會詩集』の第一集『あやめ草』が出た。東西兩洋の詩人の詞華集である。このヨネ・ノグチの斡旋である。日本の同人に泡鳴、薫、有明、月郊、敏、晩翠、醉茗、林外、白星、花外、露葉、泣菫、外國の詩人にイェーツ、シモンズ、ミラー等詩を連ぬること二十名であつた。第二集は三十九年十二月、『夢旗雲』が出た。敏、薫、泡鳴、月郊、露葉、醉茗、シモンズ、ハンスマン等の詩を收めた。その後は中絶し、大正四年に至つて、別に曼陀羅社から『曼陀羅』を出した。有明、露風、白秋、米次郎、胡夷、醉茗、敏の詞華を蒐めたのである。

7 象徴詩勃興と口語詩運動

此期の概觀

新抒情詩時代の後期は卽ち象徴詩移植の初頭である。時恰も日露戰爭の交に當り、彌が上にも白熱した國民感情の激發は遂に新詩壇の上にも及んで、詩流一時に興り、香芬相薫じ、百花相競ふの新鮮相を現出した。例へば三十

八年のごとき詩史年表を檢するも左記の重要詩集が頻出した。

泣菫の『二十五絃』『白玉姫』敏の『海潮音』有明の『春鳥集』啄木の『あこがれ』林外の『夏花少女』醉茗の『塔影』白星の『耶蘇の戀』泡鳴の『海堡技師』『夜雨の』『花守』『薫』の『小野のわかれ』『つぼの』『まひるの野』太田みづほのや、山百合合著『山上湖上』ヨネ・ノグチの『夏雲』『露伴の』『心のあと』出版『逍遙の』『新曲かぐや姫』その他。

詞華集としては新詩社女流の『戀ごろも』文庫派詩人の『青海波』その他。

更に前年に遡ると『藤村詩集』鐵幹、晶子の『春草』『泡鳴の』『夕潮』『白星の』『七つ星』『花外詩集』『逍遙の』『新曲浦島』その他があり、翌年には泣菫の『白羊宮』『清白の』『孔雀船』『晩翠の』『東海遊子吟』『林外の』『花妻』『白星の』『釋迦』あやめ會の『豐旗雲』がある。

以來、新抒情詩作の延長、象徴詩の移植に加へて、自然主義の來潮、オスカア・ワイルドの藝術至上主義の影響、口語自由詩の運動、官能感覺の開放、佛蘭西類唐派の模倣、新東京景物と江戸情調との交響、新享樂詩體の放漫、「パンの會」の狂飆、民謠研究の曙光等々入り亂れて詩壇にはまさに第二の青春期が來た。

從つて詩論沸騰し、各派の詩社相結束し、雜誌の創刊亦相繼いだ。

かくして明治末四十五年に至る、夜雨の『二十八宿』『鷗外の』『うた日記』『胡夷の』『湖畔の悲歌』『雨情の』『朝花夜花』(以上四十年)『有明集』『泡鳴の』『闇の盃盤』等が現れ、遂に白秋の『邪宗門』『露風の』『廢園』が進出した。更にまたその翌年、白秋は抒情小曲集『思ひ出』を、露風は『寂しき噴』を再び世に問うて、局面一轉、明治は大正と改元したのである。

白秋、露風その他新進の擡頭は明治末にあつた。然し乍ら寧ろ大正詩壇の先聲を成すものと見られてゐる。ここに日本詩壇第三のエポックは劃されたのである。

ii 象徴詩の勃興と影響

『海潮音』

上田敏の『海潮音』は三十八年十月の刊行である。茲に佛蘭西象徴派の新聲が邦語の名譯として集成された。尤もその譯事業は一の詩集として整へられる數年前より、『明星』その他に發表せられたが故に、日本詩壇への影響はその『海潮音』以前より鮮かだつたと言はねばならぬ。有明の『春鳥集』中の象徴詩創作の時期も同斷である。

柳村(敏)は『文學界』以來餘香深く雅致高き流麗の文章を以て、夙に泰西の藝文を論じ、新聲を傳へ、紹介之を努めて倦まなかつた。このうち若くして沈靜した詩魂めでたき學匠の存在は新日本の騷壇の爲めにどれだけの潤澤と光芒とを與へたか知れぬ。かのダンテ・アリギエリの神曲、サッフォの斷章、ロセッティの詩篇といはず、早くもポオル・ゼルレエヌの縹緲たる絶唱を見出し、新白耳義詩派はマアテルリンク、ロウデンバッハ、ゼルハアレンの逸出を讃へ、幽趣微韻のあこがれには澆季人の憂を嘆ぎ、マラルメの象徴詩原義を探つては之を東方に移し植ゑた功績は彼の數ある著書の中ただ一卷の『文藝論集』をのみ飜讀しても了解できるであらう。

『海潮音』の名譯であることは衆口の一致するところである。彼の彫心鏤骨の譯述は寧ろ創作の苦業であつた。詞に異邦詩文の美を和語の雅醇に移し、限りなき韻律と色彩の薫りを紙上に燻きこめた偉業は前代にも見ず、大正昭和を通じても絶えて後を繼ぐものは現れぬ。近代詩壇の母はまさしくこの人である。

「卷中收むる所の詩五十七章、詩家二十九人、伊太利亞に三人、英吉利に四人、獨逸に七人、プロヴンスに一人、而して佛蘭西には十四人の多きに達し、曩の高踏派と今の象徴派とに屬する者其大部を占む。」とある『海潮音』のその譯詩の影響は時の大家をはじめ、新進の詩人の間に凄まじい陶醉と魅惑とを誘つた。

*

「詩に象徴を用ゐること、必ずしも近代の創意には非らず、これ或は山嶽と共に舊るきものならむ。然れども之を作詩の中心とし本義として故らに標榜する所あるは、蓋し二十年來の佛蘭西新詩を以て嚆矢とす。近代の佛詩は高踏派の名篇に於て發展の極に達し、彫心鏤骨の技巧實に燦爛の美を恣にす。今茲に一轉機を生ぜずんばあらざるなり。マラルメ、ヱルレエヌの名家之に觀る所ありて、清新の機運を促成し、終に象徴を唱へ、自由詩形を說けり。譯者は今の日本詩壇に對して、專ら之に則れと云ふ者にあらず、素性の然らしむる所か、譯者の同情は寧ろ高踏派の上に在り、はたまたダンヌンチオ、オオバネルの詩に注げり。然れども又徒らに晦澁と奇怪とを以て象徴派を攻むる者に同ぜず。幽婉奇聳の新聲、今人胸奥の絃に觸るるにあらずや。坦々たる古道の盡くるあたり、荆棘路を塞ぎたる原野に對て、之が開拓を勸むる勇猛の徒を貶す者は怯に非らずんば惰なり。」

「日本詩壇に於ける象徴派の傳來、日なほ淺く、作未だ多からざるに當つて、既に早く詩壇の一隅に囁く々の語を爲す者あり。象徴派の詩人を目して徒らに神經の鋭きに傲る者なりと非議する評家よ。卿等の神經こそ寧ろ過敏の徴候を呈したらずや。未だ新聲の美を味ひ功を收めざるに先ちて、早く其弊竇に戰慄するものは誰ぞ。」

この序言には因由するところがあつた。既に彼が移植した佛蘭西象徴詩風の一事に對して、當時には之に對する沒理解の異論が生じ、甲論乙駁の喧騒狀態が醸されてゐたのである。

*

即ち片山孤村の獨逸象徴詩を解說した『神經質の文學』、之に對する伊吹刻人(浩々歌谷)の漢詩六義の比興こそ象徴詩なりとの東洋藝術の眞精神論、長谷川天溪の『表象主義の文學』、中島孤島のトルストイ、ノルダウ說を借りて象徴詩風を非とした『暗黑なる文壇』、伊吹刻人の象徴詩是認の論駁等々々である。

*

彼は更に序言に本文に象徴解義をした。

「象徴の用は、之が助を藉りて詩人の觀想に類似したる一の心狀を讀者に與ふるに在りて、必らずしも同一の概念を傳へむと勉むるにあらず。されば靜かに象徴詩を味ふ者は、自己の感興に應じて、詩人も未だ說き及ぼさざる言語道斷の妙趣を盲賞し得可し。故に一篇の詩に對する解釋は人各、或は見を異にすべく、要は只類似の心狀を喚起するに在りとす。例へば「驚の歌」を誦するに當つて讀者は種々の解釋を試むべき自由を存す。此詩を廣く人生に擬して解せむか、曰く、凡俗の大衆は眼低し。法利賽の徒に虛僞の生を營みて、醜辱汚穢の沼に網うつ、名や財や、はた樂欲を漁らむとすなり。唯、縛縛たる理想の白鷺は羽風徐に羽擊きて、久方の天を飛び、影は落ちて、骨遂の白く清らにも漂ふ水の面に映りぬ。之を捉へむとしてえせず、此世のものならざればなりと。されどこれ只一の解釋たるに過ぎず、或は意を狹くし

て詩に一身の運を寄するも可ならむ。肉體の欲に醫きて、とこしへに精神の愛に飢ゑたる縱生活の悲愁ここに湛へられ、或は空想の泡沫に歸するを哀みて、眞理の捉へ難きに憧がるる哲人の愁思もほのめかさる。云々」

鷺の歌（ヌルハアレン）

ほのぐらき黃金隱沼、
骨蓬の白くさけるに
靜かなる鷺の羽風は
徐に影を落しぬ。

水の面に影は漂ひ、
廣ごりて、ころもに似たり。
天なるや、鳥の通路、
羽ばたきの音もたえだえ。

漁子のいと賢しらに
淸らなる網をうてども、
空翔ける奇しき翼の
おとなひをゆめだにしらず。

また知らず日に夜をつぎて
溝のうち泥土の底
鬱憂の網に待つもの
久方の光に飛ぶを。

＊

彼はまたステファンヌ・マラルメの所說譯をその詩「嗟嘆」の後に揭げて深切に詩壇に敎へた。

「物象を靜觀して、これが喚起したる幻想の裡自ら心象の飛揚する時は、『歌』成る。

さきの『高踏派』の詩人は、物の全般を採りて之を示したり。かるが故に、其詩、幽妙を劃き、人をして宛然自ら創作する如き享樂無からしむ。それ物象を明示するは詩興四分の三を沒却するものなり。讀詩の妙は漸々遲々たる推度の裡に存す。暗示は卽ちこれ幻想に非ずや。這般幽玄の運用を象徵と名づく。一の心狀を示さむが爲、徐に物象を喚起し、或は之を逆まに、一の物象を採りて、闡明數番の後これより、一の心狀を脫離せしむる事これなり。」

＊

『海潮音』に譯出し解說するところのものは、序言にいふごとく象徵詩にのみは限らない。又その影響に於ても如上の外ポウル・ゼルレエヌ、シャルル・ボウドレエル、ジオルジュ・ロウデンバッハ、アンリ・ドゥ・レニエ、アルベエル・サマン、ジャン・モレアス等の新聲のみが詩壇を潤したのではない。不感無覺の莊嚴境を思慕するルコント・ドゥ・リイルの「眞書」「大饑餓」ホセ・マリヤ・デ・エレディヤの「珊瑚礁」等の高踏派、或は英のロバアト・ブラウニング、ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ、その妹クリスティナその他の譯詩も光芒は風を起し、波紋を投げた。その中で小抒情短曲の寶玉とも匂つたものが、却つて又世の人の愛唱措かざるものとなつた。

山のあなた（カアル・ブッセ）

山のあなたの空遠く
「幸」住むと人のいふ。
噫、われひとと求めゆきて、
涙さしぐみかへりきぬ。
山のあなたになほ遠く
「幸」住むと人のいふ。

わすれなぐさ（ヰルヘルム・アレント）

ながれのきしのひともとは
みそらのいろのみづあさぎ、
なみ、ことごとく、くちづけし
はた、ことごとく、わすれゆく。

故國（テオドル・オオバネル）

小鳥でさへも巣は戀し、
まして青空、わが國よ、
うまれの空の渡羅葦脊雲。

『春鳥集』

「隆運は將に雲蒸飛騰せむとす。」と果して期するところ深かつた蒲原有明はその「春鳥集」（三十八年刊、三十六年夏よりの作を蒐む）の自序に何と言つたか。

＊

「視聽等の諸官能は常に鮮かならざるべからず。生意を保たざるべからず。然らずば胸臆沈滯して、補綴の外、踏襲の外、あるは激勵呼號の外、遂に文學なからむとす。『自然』を識るは『我』を識るなり。譬へば『自然』は豹の斑にして、『我』は豹の瞳子の如きか。『自然』は死豹の皮にあらざれば徒に讌席に敷き難く、『我』はまた冷然たる他が眼にあらざれば決して空漠の思を容れず。『われ』に生き、『自然』に輝きて、一箇の靈豹は詩天の苑に入らむとするなり。視聽等はまた相交錯して、近代人の情念に雜り、ここに銀光の音あり、ここに嚠喨の色あり。心胝といひ心耳といふと雖も、われ等は靈の香味をも嗅味の諸官に感ずることあり。嗅味を稱して卑官といふは官能の痛切を知らざるものの言ならむか。

時としては諸官能倦じ眠りて、ひとり千歳を廢墟に埋もれし古銅の花瓶の青綠紺碧に匂ふが如きを覺ゆることあり。或は『朱を看て碧と成し』て美を識ることあり。一花を辨ぜずして詩を作るは謬れり。情熱に執して愛の靜光を愛せざるも亦謬れり。」

まさしく象徵の提唱ではないか。

＊

上田敏は象徵詩を移植したが、蒲原有明は之を唱道すると共に直に自ら創作實行した。この點から有明は日本象徵詩の祖である。

その初期の代表作「朝なり」（本文參照）を見るに、夜明の河岸の風景、その濁り川に映る、流るる、匂ふ、光る、息づく、音たつる樣々の雜色と交錯する感覺の香韻のそれらを描いて、さながらの心象の動きを象徵した。この作は貴重され、又は嗚澁とされたが、缺點は結句に「白壁――これやわが胸か。」といふ註解を添へたことであつた。さう云ひ盡して了つては種を明かして、折角の象徵が消える。その頃象徵詩が世に理解されなかつた故に或は作者も些か晦澁の譏を懼つて、この說明句を成したかも知れない。

この初めを成した「朝なり」がその後二回に亙つて甚しく改惡された。改作が如何に象徵の本義とする香韻を失ひ、感覺の色合を失つたか。惜しみきれない寂しさである。

原作の一節

流るるよ、ああ、瓜の皮
核子、塵わら、――さかみづき、
いきふきむすか、靄はまた
をりをりふかき香をとざし、
消えては青く朽ちゆけり。

第一改作

流るるよ、ああ、瓜の皮、
核子、塵わら、――さかみづき、
いきふき蒸すか、靄はまた、
をりをり、あをき香をくゆし、
滅えなづみつつ朽ちゆきぬ。

第二改作

見よ、流るるは瓜の皮、
核子、塵蔡、柿屑、
滅えもなづめる鷗鳥

何を求るか飛び奏ふ。

感興の生采は消え、餘韻も滅び、ただ露はに乾いて、索然たるものになつた。何が故に「消えては青く朽ちゆけり」の新感覺を消さねばならないであらうか。その他かゝる例は二三に留らない。

*

『春鳥集』は『獨絃哀歌』の延長と見るべき「海の幸」その他と「姫ケ曲」「鏘斧」の敍事詩と象徴味の深い「五月靄」その他がある。「五月靄」は當時晦澁の譏があつたが、この詩の改作は、贅物を除き去つて、すつきりと純粋になつた。

ともあれ、『春鳥集』は傑れた詩集であつた。而して一層に有明の地位を確たる耀かな星座の高處に据ゑた。

『白羊宮』

「薄田泣菫氏作『白羊宮』出づ。日は春の白羊宮に位する時、天地開闢せりと傳ふるに據りしものか。秀でたる近什數篇のほか、諸雜誌に散見して、余が未だ精讀せざる佳作多し。『わがゆく海』『笛の音』は、今の佛蘭西詩壇の象徴詩人中、令名嘖々たるHenri de Régnierの詩を讀む心地あらしめ、『冬の月』『零餘子』等、各節の第四行をはたと六音に止めて、情熱更に烈しきを感ぜしめたるは、古希臘サッフォの餘韻なる可し。余がさきに激賞したる『望郷の歌』は素よりなれど、新に見たる『くちづけ』『白すみれ』『寂寥』『海のほとり』等は、余が趣味にとりて頗ぶる而白き作なり。」

この文章はその年(三十九年)主として雜誌『藝文』(敏、孤蝶等によつて一月創刊)の鏡影錄(五)に上田敏の書いた推稱の一節である。

『白羊宮』(三十九年五月)の中にはまた、同じ鏡影錄(一)に同じ筆者藝苑子の言葉を極めて褒め讃へた。(本文參照)

わが故郷は、日の光蟬の小河にうはぬるみ、
在木の枝に色鳥の咏め聲する日ながさを
に初まり、
かなたへ、君といざかへらまし

と結んだ九行一聯と、同型の他の三聯、通じて一篇四聯の「望郷の歌」も收めてあつた。

「今日、評壇の一奇とす可きは、新詩の著るしき發達に對して、所謂批評家の多數が、何等の品隲を試み得ず可き趣味と學殖とを有せざる事實なり。(中略)不思議なる世なり、詩人反て學殖に富めり。薄田泣菫氏は此の學殖ある詩人の一例なるか。語彙の豐富にして、殊に中古軍記類に散見したる語を驅使することの巧なるは、詩壇第一人なるのみか、西歐詩文の造詣も頗ぶる深きが如し。其處女作にはキイツ愛讀の跡あり。『其笛集』中の一篇がエルギリウスの第一牧歌に類する如く、近時の作、『大和にしあらましかば』はブラウニングの同じ體に相似し、新年の『太陽』に寄せたる佳什『望郷の歌』は『ミニヨンの歌』に通ひて、而も大に日本の趣味を發揮したる所面白し。

櫂の音ゆるに漕ぎかへる山機會の若人
が、
瑞木のかげの戀がたり(第一節)
葉びろ柏は手だゆげに風にゆらゆる初
夏を
葉洩りの日かげ散斑なる紅の杜の下道
に(第二節)

も心ゆくかぎりなれど、第三節第四節の沈靜なるこそ、新らしき日本に生ひいでし舊るき花なれ。

まさしく "Oh, to be in England"

このブラウニングの絶唱を想ひ浮べながら

ああ、大和にしあらましかば、
今、神無月、
と歌ひ出た、典雅にして醇和、古風にして新趣、その渾成の香りただならぬ奈良思慕の詩もその集には載つた。

聖ごころを忍び、齋精進を思ひ、天つ阿摩の慈悲に心を寄するこの詩人はまたやはり『二十五絃』のすぐれた樂手ではあつたが、この人もまた象徵の幽玄體に參じずには、海潮の響に伴奏されなかつた。

この傾向はかの「鷺の歌」と通ずる「鳥の淨め」一篇の匂を聽いても、或は肯づけるであらう。ただ、ともすると觀念的、比喩的象徵に、直感の乏しく理義のみ詩技のみ圓かな作爲の興が見え初めた。「わがゆく海」(參照)「笛の音」などもさうであつた。この抗し難い情熱の「衰へ」と、近代への「迷ひ」とに發した「妖魔自我」のごときは遂に彼自身の癌腫となつた。

『白羊宮』のいみじさは又、却つて「白すみれ」「夕とどろき」などの小曲にあつた。

夕とどろき(泣菫)

新月さしぬ、物の香の
ほのかに薫る五月野に
夢かのわたり、都邊の
夕とどろきに聞きとれぬ。
嘗ては、吾もなよびかの
あえかの人と相知りて、
世にうつくしき事榮の
あまた夜にこそ醉ひにしか。
日は往き消えつ。今もはた
かすかに殘るおもひでの、
何とは知らず、夕ごゑを
吾かのさまにさしぐみぬ。

ただ之を藤村の「おえふ」(本文)と比べて見よ、ここにはあまりに刷毛の跡をとどめぬ油繪のごとく、その萌たさは天平の牧童のごときに於て、明治の情思とも思へぬ語感の古さがあらう。この傾向はその歌謠體の、さつさ、いよこの「小雀女」(本文)(參照)にも「三の百合」にも見えよう。

ともあれ、『白羊宮』に泣菫は完成した。さうして、當時第一位の詩星の座に大きく光つた。

『有明集』の出づるまでは。

この比較

日ざかり(泣菫)

季は夏なか、
日ぞ眞晝、
日ざしは麥の
穂にしらみ、
野なかの路に
またたきて、
濁酒の如、
湧きたちぬ。
牧の小野には、
並木立、
腕だるげに
葉を垂れつ。
青ぶくれなる
水錆沼は、
めまぐるしさに。
息だえぬ。
雲のひとひら、
たよたよと
喰喰ひゆきて、
ありなしに、
やがては消えつ。
濃青なる
空や虛なる
墓ならし。

水の面の水澁
氣をぬるみ、
蝉は涅に
くぐり入り、
爐土の香に
息むせて、
蛇はひそみぬ、
葉がくれに。

なべての上に、
高く照らす
つよき苛責や
あな寂し、
怖なき魂の
けだかさは、
げに水無月の
日ならまし。

夏の歌（有明）

薄ぐもる夏の日なかは
愛慾の念にうるみ
底もゆるをみたの眼ざし、
むかひゐてこころぞ惱む。

何事の起るともなく、
何ものかひそめるけはひ、
執ふかきちからは、やをら、
重き世をまろがし移す。

窓の外につづく草土手、
きりぎりす氣まぐれに鳴き、
それも今、はたと聲絶え、
薄ぐもる日は蒸し淀む。

ややありて茅が根を疾く
青蜥蜴走りすがへば、
ほろほろに乾ける土は
ひとしきり崖をすべりぬ。

なまぐさきにほひは、池の
上ぬるむ面よりわたり、
山梔の花は墜ちたり、——
朽ちてゆく「時」のなきがら。

何事の起るともなく、
何ものかひそめるけはひ、
眼のあたり融けてこそゆけ
夏の雲、——空は汗ばむ

同じく『海潮音』の影響を受け、孟夏白日の歌であり、象徴風であり、秀作であつて、而もこの感銘の上の相違は何から來る。有明のこの感覺こそは彼をして初めて近代詩の父たらしめた楔點ではなかつたか。

年少新進の徒が、そろつて轉換した方向のハンドルは果して泣菫より有明へであつたではないか。

b　新詩社後期再説

五月の運轉手

少年詩人啄木は才藻早熟の人ではあつたが、近代の感覺人ではなかつた。彼は稟性の反抗心と社會主義思想の洗禮とで後には實價以上の革新的歌人として傳喧された。然し眞の詩人として近代星座圏内の人であつたかどうか。詩に於ける彼を見よ、彼は形態の上にのみ、いち早くハンドルを廻した。泣菫より有明へ有明へ。

異母胎の兄弟

一念の眞實にしてまた多情多恨の煩惱兒平野萬里は、五七の、稍鈍重冗漫なる詩調を以て、切に吾妹子のみを歌つたが、理智に秀でてまた名のごとく蕭々たる茅野は詩興度を超えず、平

衡よく保つてゐた。温湯と清泉と、一は圓、一は角、血脈同じくして、しかも異母昆弟であつたか。

三人の火星人

三人の新來者、本來彼等は火星人であつたか。それは知らぬ。然しながら彼等北原白秋、長田秀雄、木下杢太郎は星菫派の延長であつた『明星』にとつては異樣新裝の外來人であつた。

白秋は『文庫』の曲型と聲調とに倦厭たると共に自己の美辭麗句詩をも一蹴した。而して詩についての知見が初めて表に現れた三十九年春の作品『おもひで』の數篇を以て『明星』誌上へ飛躍した。この幼時の追憶を歌つた『おもひで』の詩は後の抒情小曲集『おもひで』の根本を成すものである。南方地熱の氣稟に芽ばえた新感覺の萌芽には他日の童謡作家たる本質の色彩も或はひそんでゐたであらう。彼はまた先進の光耀と樂調とに多々惠まれた者の一人であつた。彼れ、朱の阿蘭陀帆船の艤機は日まぐるしく動いた。彼は海潮音の新航路に於て危ふく有明の黑船に衝突しようとした。彼はさながら熱病菌圖のごとき水脈の銀線を行くところに彫描した。佛蘭西印象派の手法も采つた。彩作したものだから目には立つたであらう。然し、弱冠もとよりより深き思想の體驗ある者でもなかつたらう。然し彼れの肉體奉樂の感覺に思想無しと見るのも早斷であらう。翅音羅く蜜蜂の巢箱が單に感覺の巢箱でないかぎりは。

長田秀雄（赤髮鬼と稱した）は若きに似ず、グロテスクな一種の構成派であつた。深沈と狙ひ、工みて構成した。後に近代歳を書き、劇團の指導者ともなつた素地は既に黑く光つてゐた。

醫科大學生であり、洋畫のアマチュアであり、美、殊に近代趣味の探究者であつた太田正雄（木下杢太郎）はその初め、新橋ステーション改札口とプラットホーム女性風景を詩に描いて、無殘なる犧牲と最勝の精の凱歌を檢鏡し、又、蛙の膀胱に悲しむダッグルタップルの微妙煩雜音を聽かせようとした。

霙と旗の風景

若く、手の大なる彫塑家にして、秀拔なる短歌作者、高村碎雨（光太郎）は、その頃、巴里に在り、雲煙の彼方に在つた。

『酒ほがひ』と戀の幻覺的密獵者、吉井勇はかの雲と旗との海港を豪放に大跨に歩き去るマドロスに縱いて、時をりその故しらぬ感傷にその身を燬いた。

水彩畫家

淡々として明らかなのは水彩畫家、石井柏亭であつた。

大かぶらたわゝに積みて
水門をくぐるはし舟
北齋が好みの小笠
白衣曳きぞわづらふ
巡禮の足のほとりに
鳴く蟲の聲もかれがれ。

藝苑子は之を評して「白耳義新詩人の作に接する思あらしむ。」と讃へた。

新市井風物詩

この群星環の恒星、自らひそかに文珠たり、又、然あるかに見えた鷗外は、智識廣大の學匠ではあつたが、情思奔放の性ではなかつた。この明治の文珠は淡々と、又は敏の言ふ「軟新に」「單語に印象强く」「節奏には大膽なる跨を用ゐ」または口語を用ゐて、路上日賭の新市井風物を寫生した。かの電車の窓側子にふりかゝつては消える雨の「雫」、「臭くつて食はれませ

んや」の大川景清「都鳥」、竿頭に弄りては落つる輕業の子の「鴫の速贄」、

にび色の川淀水の
渦卷に、雌雄か、白鳥
並ぶ。こやさすらひ人の
ふりし日の風流の記念。

舟人よ。あの鳥を見よ。
「はあ。ありやあかごめでがさあ。」
氣ぢかきにおぢぬさま見よ。
「臭くつて食はれませんや。」（「都鳥」の後驛）

この影響は紹に與謝野寛にも及び、新人にも響いた。彼等は新奇でさへあれば爭つて取りついた。

邪宗門詩風の曙

四十年の夏、新詩社同人の寛、萬里、勇、正雄、白秋は九州旅行の途次長崎に一泊し、天草に渡り、大江村のカトリックの寺院に日の青い教父と語つた。この旅行から何を彼等は齎らしたか。浪漫的のほしいままな夢想者であつた新人、彼等は我ならぬ現實ならぬ空を空とし、旅を旅として陶醉した。中にも北原白秋は「天草雅歌」（本邪宗）を、邪宗の「鵠」を、正雄は「黒船」を、また、長崎ぶり」を、その阿蘭陀船の朱の幻想の帆と載せて、ほほういほほういと歸つて來た。

鵠（白秋）

わかうどたゆめ近よりそ、
かのゆくは邪宗の鵠、
日のうちに七度八度
潮あび化粧すといふ
伴天連の祕の少女ぞ。
地になびく髪には蘆蒼、
嘴にまたあかき實を塗る
淫らなる鳥にしあれば、
絶えず、その眞白羽ひろげ
乳香の水したたらす。
されば、子なゆめ近よりそ。
視よ、持つは炎か、華か、
さならずば實の無花果か、
兎にもあれ、かれこそ邪法。
わかうどなゆめ近よりそ。

黒船（正雄）

人もこよ、異船くる、
いとくろく鳥に似たる。
あら笑止、船なる人も
皆黒し・帽も袴も。

このあまき葡萄の島に
無花果のゑらげる丘に
何見ると千里鏡見る
懐疑の北國人は。

8 制約破壞と口語自由詩

明治の定型律

明治詩壇に於て傳統より繼承し、また清新體として創成し來つた種々の定型は年とともに愈々均整完美しつつ、寧ろその重壓に堪へざらむとする、または薫染、早くも倦厭たらむとする傾向が見え出して來た。今、それらの定型律の種々相を檢べて見よう。

藤村（七五）

こひしきままに家を出で
ここの岸よりかの岸へ
越えましものと來て見れば
千鳥鳴くなり夕まぐれ。

藤村（五七）

吾戀は河邊に生ひて
根を浸す柳の樹なり
枝延びて綠なすまで
生命をぞ君に吸ふなる。

藤村（八七）

しづかにてらせる月のひかりの
などか絶間なくものおもはする
さやけきそのかげこゑはなくとも
みるひとの胸に忍び入るなり

泣菫（八六、泣菫絶句調）

纖雲縹に長くながれ、
落つる日黄ばめるこの夕暮、
おもむきある哉、筏浮けて
舟人河瀬に輕くさせり。

泣菫（七四）

霜月ずゑのさびしさ、
日も夕ばえぬ浦まや、
かなた洲崎のはづれに、
夕づつ低うかかりぬ。

泣菫（六五）

圓き珠は失せがちに
懸想の猟疾かりや。
左、胸の上におき、
右、やはらかに抱きよる。

有明（五三）

よろこびぬ、倦みぬ、
爭ひぬ、厭きぬ。
生命の根白く
死の實こそにほへ。

有明（三三、四三）

肉は、靈は
二つのちから。

有明（三三、三四）

生は、死はよ、
眞砥の堅石。

有明（三三、三四）

研きいづれ
摩尼の金剛。

泡鳴（三三、四、彼の所謂十音詩）

みやこ　遠く　立ちいで
歸り來てし　ふるさと、
ふるき　ことの　思ひで
爰に　忍ぶ　橋あと。

有明（五四）

人の世はいつしか
たそがれぬ、花さき
香に滿ちし世も、今、
たそがれぬ靜かに。

有明（四、四五、四、四五）

よろこび、
あふるる、それか、君、
彼方を
虛空を夏の雲。

有明（五、五四、五、五四）

紺瑠璃の
海滿ちに、渚の
緣さへも
ひびわれむばかりや。

有明（四五）

光のとばりぎぬ
ゆらゆらに風わたる
まひろく、はた青き
皐月の空のもと。

上田敏（五五七）

あたあはれ、きのふゆゑ、夕暮悲し、
あたあはれ、あすゆゑに、夕暮苦し、
あたあはれ、身のゆゑに、夕暮重し。

白秋（五五五）

わが佳耦よ、いざともに野にいでて
歌はまし、水牛の角を吹け、
祝よ、すでに、美果實あからみて
田にはまた足穗垂れ、風のまに
山鳩のこゑきこゆ、角を吹け。

有明（四七六、獨絃哀歌調）

わが、この胸の池水、一日にほひ、
「おもひ」は凝りて蓮華と生ひたち咲く

しぬびに君よ、この岸、かの水際に、
幻ふかき「いのち」の香をば尋めよ。

佛蘭西象徴派の詩を譯したる『海潮音』の魂、
厲體はまた泣菫、有明、その他新進の好んで取
るところであつた。莊嚴にして均整、典雅にし
て又清新であつた。

上田敏（五七五七、一行）

蔓草の嫋びし姿、麈なす情のまざし、
照る月の飽かざるおもわ、孔雀にも似た
る濡髮、
戯れて攣める眉は、音無しの漣なせど、
あな悲し、君は宿らず、美しき物の一つ
に。

上田敏（七五七五、一行）

無邊の天や無量海、底ひも知らぬ深淵は
憂愁の國、寂光土、また譬ふべし、炆
羅鄉、
墳塋にして、はた伽藍、赫灼として幽遠
の
大荒原の縱横を、あら、萬眼の魚鱗や。

上田敏（五七五、七五七交錯體）

ヂバンゴに在りと傳ふる鐵山の
紫陌黃金やわが物と遠く、求むる
船の帆も撓りにけりな、時津風、
西の世界の不思議なる遠荒磯に。

有明（七五七、五七一交錯體）

智慧の相者は我を見て今日し語らく、
汝が眉目ぞ、こは兆惡しく日曇る、
心弱くも人を戀ふおもひの空の
雲、疾風、襲はぬさきに近れよと。

歌謠としての口語發想

歌謠の本質上、歌謠としての口語發想は當然のことであつて、上代より近代に至る古謠、俚謠、童謠、小唄等は總てがさうであつた。明治の詩人にこの歌謠體の若干を作した者に梅花、美妙、綠雨がある、鷗外、子規、鏡花、月郊、鐵幹、泡鳴がある。醉茗、夜雨、清白、白星、林外がある。また有明にも稀に一二はあつた。『二十五絃』以來の泣菫はまた新に寧ろ古雅な近世の歌謠體を幾つか發表した。然し、何れも主として歌謠としての口語發想であつた。ただ僅かに獨歩がその詩に進んで口語を采り入れようとした。「沖の小島に雲雀があがる」（掲）であるが、それもつまりは民謠として見るべきであつた。「白玉姫」の泣菫はその純粹な歌謠體以外に詩にも亦之を試みようとして無理な矛盾を敢てした。

鹿の子の若えさながら、
木下路、足なみ輕に
おりて來た草刈むすめ、
日盛りの濕ひ得たさに。（その第三聯）

口語の一二は用ゐた。然しこの詩は全然雅語脈の整調表現であつた。殊に「若え」「濕ひ」のごとき耳遠い雅語を以て口語詩を成さうとする意圖は本來に於て謬つてゐた。

鷗外の「都鳥」も口語は採用した。然し船頭には思ひきり日常語で答へさせたが、船中の客には文語を以て問はした。珍問答である。時代混淆である。重複するが拔く。

舟人よ、あの鳥を見よ。
「はあ、あれは鷗でがさあ。」
氣ぢかきにおぢぬさま見よ。
「臭くつて食はれませんや。」

鐵幹等の新詩社同人も之に倣つて、寫生卽興の「大佛さま」「驢賣」等に盛んに俗語を彈かせた。然し而白がりに插入したのみで、池の文章は文語體であつた。それならば、先例は近世の稗史、淨瑠璃にいくらもあるであらう。

「大佛さまを拜ませて
下さんせや。」と、田舍もの
老人づれの一列は、

竹矢來して「御普請」と
高札たてた札の口、
羊のやうに肩を擦る。（その一聯）

札を貫ひて續き入る
高き二重の不思議なる
御堂の中は眞暗黑、
「拜まれません」「見えねえや」
「あれがお鼻か」「いやお肩」
「暗いことかな、たあまいだあ。」
林外に「きき耳たてて」がある。
「コン畜生、畜生奴、
よくもよく――ちやんなんかの妾、
親の恥、又親類の恥
第一はこの姉の恥ぞよ、
思ひ知れ」たたく音
ぶつ音、わめく音
ドタバタ〳〵と二階より
「姉だつて妾、妹に
意見はあるまい――さあ殺せ」
「てまいまだほざくか、ちやん妾」
たたく音、わめく聲、
「わしはお髯さん、てまへのは
なんだ ちやんではたいか、
かひしよなし」

「言文一致詩」先聲

四十年七月、河井酔茗の主宰し創刊した詩草社の同人誌『詩人』第二號に於て森川葵村は「言文一致詩」につき第一聲をあげた。

「江戸ぶりの俗謠詩を今更作るのは、近松時代の淨瑠璃を今更作り出すと同じ。」「明治の人なら明治を歌つてこそ明治の詩人である。」(1)

「他の調を以て明治の香ある俗謠詩を作らむとするに今のやうた作では困る。昔から固くるしい和歌が田植唄に歌はれたことはきかず、さるに依つて玆に言文一致の詩を要求するのである。自分の言ふ言文一致體とは…今日の散文家が書いてゐる言文一致（明治の香ある文體）を以て詩とするのである。吾人はこれを言文一致詩といふ。」(2)

「吾が言ふ言文一致詩では、散文と同じくたりはせぬか」否「其處が詩人の技倆で、我々が持つてゐる感情に調子があることの知れてゐる。」疑念無用(3)

而して彼は泣菫、雨情、夜雨の俗謠體を難じ、寛の「大佛」林外の「きき耳たてて」を擧げてゐる。この程度の先聲であつた。

口語體譯詩

鐘は却つて譯詩家から撞かれた。

リヒヤルト・デーメルの詩（片山孤村譯）

鐘が鳴るゴーン、ゴーン、何處だらう、
やあ大變私は仆れるよ、
あの沈默した、灰色の着物を着た坊主た
ちは皆んな何處へ行くんだらう、
この格子戸の周りに幽靈が飛んで歩くの
がきこえる。

リリエンクローンの詩

銀行家パラッツオ。主人は旅行に行つた。
よし、召使は外に出た。殘るは小猫一匹。
「今晩。お出で。八時によ。淋しいわ。」
我は往つた。主人の室へ、戀
ソファの上。嵐の如く、又やさしく、又
恥も無く、
キスはキスを呼ぶ。「アー放して。」「放せつて。」
柔音と硬音。
朝。別離。夜の客は出でゆく。
歸り路は長い。オー、はでなソテよ。

第一烽火

口語詩に於ける第一の新聲は醉茗の主宰する詩草社の同人、弱冠川路柳虹によつて發せられた。『詩人』の四十年九月號に載つた「塵溜」の外三篇であつた。ここに初めて詩歌解放運動の烽火が揚つたのである。

塵溜

隣の家の穀倉の裏手に
臭い塵溜が蒸された匂ひ、
塵溜のうちのわな〳〵
いろ〳〵の芥のくさみ、
梅雨晴れの夕をながれ
漂つて、室はかつかと爛れてる。

塵溜のうちには動く稻の蟻、
浮蛾の卵、また土を食む蚯蚓らが
頭を擡げ、德利罎の虧片や
紙のきれはしが腐れ蒸されて、
小さい蚊は喚きながらに飛んでゆく。(下略)

彼は續々とその試作を發表した。

その反響

果然、反響は詩界に起つた。世詩香(服部嘉香)の「言文一致の詩」(四十年十月「詩人」第五號)島村抱月の「現代の詩」(同誌十一月號)が是である。拔抄して見よう。

嘉香說

「吾人は言文一致詩を可能とするものである。而して其の可能には或る範圍と程度とを要求する。」(1)

「感情をビビットリーに表はさんには、勿論修飾を脫するを要するも、それが爲めに散文を直ちに用ひ、語法語調をも之に入るるには、只情緒を拘束するか若くは下落せしめるか、又は印象を卑俗ならしめて滑稽に墜つるを免れぬ結果を生ずる。純朴はあり質實はあり、幽玄、偉大、熱烈、高渾の思想は之を歌ひ盡すに不可能である」(2)

「上田敏氏の『ちやるめら』與謝野鐵幹氏の『小さき唄』及び横瀨夜雨氏の『お才』『やれだいこ』の如きは吾人が言文一致詩として諸氏の努力せらるべき方面と信ずる。」「言文一致詩を以ては田園詩、市井詩、自然詩、即ち俚歌童謠的のものか、又は端唄、俗曲的のものを範圍とする」(3)

抱月說

「僕などが日本の新體詩を讀んで先づ感ずるのは、其の直接でない事、即ち「ディレクトネス、スレイトネスが缺けてる點」である。之は眞直に實際生活に接してゐない。」(1)

「キップリングの如きは形式に於ても思想に於ても現實の生活に指を染めかけた。」

「アメリカのホイットマンが矢張形式內容共に切實に現生活に觸れんとする傾向を有した。」(2)

「直接たり得んが爲めに、何等かの手段によつて言葉と語法のクラシシズムを破ることが根本の問題である。」「即ち民謠に歸る事。」「現今二三人の人の試むる民謠體の詩は矢張一種のクラシシズムで、古民謠の模倣とか、一部分を離して現今の言葉で綴るとかいふの類で、決して僕の意味する方面の努力はない。」(3)

「形式上のクラシシズムを破るの一法は、いかなる形に於てか言文一致となる必要がある。」(4)

瞭然として抱月は先にあつた。

御風の提案と彼等の作品

御風は詩界に於ける自然主義を主張し、而して「詩界の根本的革新」(「早稻田文學」四十一年三月號)

について左の三つの具體案を提出した。

「詩の用語は口語たるべし。」「雅言を以て自己の抱懷を歌ふと言ふ習慣は絶對的に破壞すべき事だ。」雅言は形式的制約を破壞せよといふのである。(1)

「第二の要求は詩調である。」「絶對的に自由なる情緒主觀さながらのリズムである。」用語のみ口語に變つても舊來の詩調の制約ある限り不可である。破壞せよといふのである。(2)

第三は「行と聯との制約破壞である。」用語のみ口語たり、調の自由を得ても行數の制約ある以上不可である。故に行及聯の絶對的自由を要求する。(3)

この提案を果して彼の試作が實書したか。したとは云へよう。然し價値に於ては否であつた。

彼と露風とはその作品を五月號に發表した。

「痩犬」及び「暗い扉」である。

痩犬

燒きつくやうに日が照る
黄色い埃が立つて空氣は咽せるやうに乾いて居る、
むきみ屋の前に毛の抜けた痩犬が居る、
赤い舌をペロ〳〵出して何か頻りと舐めずつて居る。
あゝ厭だ。

ジロリと俺の顔を見た
ヤ！　歩き出した
ヤ！　蹤いて來る、蹤いてくる。
右へ曲ると右へ
左へ折れると左へ
急げば急ぎやがる
あゝ厭な奴だ、氣味の惡い奴だ。(以下略)

暗い扉　(露風)

暗い扉が閉ぢられてゐる
その前で盲目どもがわい〳〵噪ぐ
まつくらな室だ。

どんどんと一人が叩く
するとまた二人が叩く
今度はみんな寄つてどんどんと
割れるほど叩きだす。
「をかしな扉だ」
「まつくらな扉だ」
「開けてくれ」
と喚く。(以下略)

粗雜極まつてゐた。柳虹の作より劣惡であつた。「詩歌を侮蔑せんが爲に作られた」と罵つた當時の評言は道理であつた。之を觀て思ふに、かの意氣のみ壯にして內容に表現に品格無く喧騒であつた新體詩草創期と酷似してゐよう。

玆に思ふことは、この急進的新人が、大正期に於ては良寛禮讚の隨一人であり、その萬葉調の歌風に傾倒し、彼自身も、境涯の良寛を模しつつ、圓熟しつつある事である。その歌風に於ても書に於ても學びつつある。曾て絶對破壞した如上の三制約を尊重しつつ、而もこの時、時代は詩歌の制約破壞に向つて、急速に轉回しつつあつた。亂と暴とは隨處に雜音響をあげた。

その翌年

感覺の瞬時(柳虹)

……
……

キチ、キチ、キチ、キチ、キチ、キチ、
キチリ、キチリ、
リ、リ、リリリ、リリリ、
リリリ、

リ、
リ、
リリリ、
……
……
露が瓦に沁みる
星は涼しく笑つてた――
風――
置時計の刻む音……（以下略）
暴風のあとの海岸
白――
明るい海のにほひ、
濁つた雲の靜かさ、
白――灰――重苦しい痙攣……
腹立たしいやうな
搔き搖つたやうな空。
藻――流木――
磯草のにほひ。

白――
岸と波とのしづかさ。
――忘却――夢――
苦悶の影――
白――（以下略）

9　頽唐思想と異國情調

泡鳴を批判す

好漢、岩野泡鳴は言ふ。彼は彼自身を語つて暴男にして無邪、冥々にして滑稽、深刻に見えて案外單純であつた。

「二十六年に、岩野泡鳴の『十字架の影』が雜誌世界に出た。當時は一般に厭世と懷疑の思想が弘まつてゐたから、それを脫しようとした作だ。」(1)

「渠の『石切り』は當時の獨創なき哲學者、宗教家、並に紳士淑女を罵倒したものだ。その一節――

宇宙の　森羅萬象　天籟地籟、
萬竅に　怒號す、風はしも
あまつ大神の　ひりかける
おなら　なるかも　とこしへに
かげなく、香なく、恥ぢなく。

はばかりもなし　と　自由自在。

作者は之が爲めに耶蘇教徒から不敬神といふ、教育家達から野蠻、冷酷、無禮だといふ反對を受けた。」(2)

「同年(二十九年)五月、泡鳴の神話的長詩『綰釋迦の渡し』(三百二十行)が早稻田文學に載つた。之はベクリンの畫風の樣に、凄慘なうちに多少の滑稽趣味があつた作だ。」(3)

「泡鳴は雜誌天地人に於て隨分書いた。そのうち『秋の蜻蛉』の構想はシェレーの『雲雀』に似るところもあるが、後者は高い憧憬を歌はうとしたに反して、前者は深い疑惑を反映しようとした。これは泡鳴當時の冥想的特色を發揮してゐるだらう。」(4)

「同年(二十)、泡鳴の宮古島物語詩『嘉播の親』(九百行)が雜誌學藝餘談に連載された。平坦な敍事の間に、熱帶風景と老盲人の愛情並に忿怒とを歌つた物だ。」(5)

「泡鳴は三十二年天地人に『亡兒の寫眞』を出してから、散文的に世のにがい經驗を語る樣になり……」(6)

「岩野泡鳴は敍事的冥想派から走つて、知らず識らず全くのロマンチク主義に落ち入つ

た。」(7)

「林外、泡鳴、並に御風が協同經營のもとに發刊された雜誌『白百合』は、その當時、わが國詩壇の實際的新情熱派を代表した物だ。」(8)

「泡鳴は同三十六年から大に復活して來たので……かの注意を引いた『女護海島』(百七十行)に至つては、初めて詩界に整頓した八七調を供したのである。渠はこの詩からして冥想的思念が情熱的に燃えて來たのだ。この詩は古來の傳說をもとにして、多少テニスンの『ロータスイーター』に得たところがあるらしく、熱帶の一孤島に『生々の理孤獨となりて……單調子の安逸、安臥、無理想、無何有に勞れも果てて』た女性ばかりの島民の運命を描寫した物だ。」(9)

「三十七年になつてから、泡鳴は白百合に於て『ああ世の歡樂』といふ短曲を出した。渠が世紀末的、デカダン傾向を最も早く示した作だ。」(10)

「渠は淺薄な文藝中心主義の流行を脫して、孤獨無變化の永劫を歎く『嫦娥の恨』に八八、八七の交互調を用ゐた。」(11)

「海妖」「磯姫」に於ては、微妙な新調七六調を詩界に供し、ゼルレエヌ的心理詩に適切なことを知らしめた。

その一節——(筆者いふ、この一節は秀でてゐる)

胸も　どよめく　海の音の
凝りし　いはほの　上に　すわり、
沈む　ゆふ日の　光　見れば
ひとり　わが身の　かげぞ薄き。

その『無性斗神』に至つては、殆ど病的產物だと云はれたが、また幻怪奇異の想、未だ諸詩人が夢にだも入らざりしところと云はれた。泡鳴は之によつて美學從來の規範を脫し、獨得の神祕境を拓いて、醜の醜なる物をも歌ふ勇氣を示したのだ。」(12)

「泡鳴は、また、同年の初めに、白百合に於て『高地の靈語』を出し、二百〇三高地を靈化して世の文明を呪はした。」(13)

「渠は……その第三詩集の卷頭に『三界獨白』(二百八十行)の深刻な戀愛詩を完うした。永貞なるべき天主教徒の比丘尼が、神父と禁ぜられた戀を爲し、その結果たる『分神を神にも見せずて闇に遣り』、苦惱懊惱の末、現世から地獄に迷ひ、また天上界に登るのが骨子となつてゐる。餘りロマンチクな行き方ではあるが、太い悲痛の動脈が貫徹してゐて、渠は之を以て詩界に獨步の權威を認められたのだ。渠はそれまで理趣はあつても、情熱に乏しいと云はれてゐたが、之が爲めに激したか、この長篇……を以て、全くロマンチク派、乃ち、情熱派の俘となつてしまつた。之は渠には意外なこと。で、渠は天上の戀を歌つても、『なほ且つ寂しみ涌きぞ來る』人慾の根柢を忘れなかつた程で、痛苦喘瀧たる神祕を擔ふ『現實卽理想』の妙諦に入り、」(14)

「『人肉狂賣』は……、地の文がない劇詩的對話篇で、戰爭に關する痛切な諷刺詩だ。」(15)

「泡鳴のは豐富な想像と思想とになやまされて、却つて自意識を失ひ、詩語直截、單線陣的なる缺點ありと云はれたが、詩界に於て理想の詩人として最も深刻活躍の才を示した。」(16)

「且つ、其長篇並に多くの短曲に於て無言、罪惡、殺人、姦通、難產、墮胎、地獄、苦悶等、すべて世の顧みなかつた暗黑方面に筆を染めて、純粹の苦悶詩なるものを初めたのは、渠の記憶すべき功績だ。」(17)

「渠は當時流行の形式的表象主義を離れ

て、刹那的苦悶と生命とを抱いて、つひに之が爲めに『自然主義的表象詩』を唱道するに至つたのだ。」(18)

「同年(三十九年)舊宗教、舊哲學、舊美學を打破する爲めに作つて、單行本として出した『神祕的半獸主義』(19)

惡戛　つひに
却つて　なつかしく、
こころは溶けて
をみな　の　身に添ひぬ(うらこの貝)
兄は　その頸　振り向けて
若き　血しほ　ぞ　亂れける——
口づけ　したる者
父の　ひとみに　燃えて　見ゆ(朱のにじみ)
白む　伏し所　に　夢の　かをり、
ゆるむ　節々　花を　開く。(春鶯囀)
青葉　顫ひて　息を凝らし
小徑　をののく　露は繁し。(行く春)
くゆらす　煙の
中より　見え來なる、
くちびる　燃えて
ひとみ　を　凝らす人。(葉卷のくゆり香)
死はも　わが身　を　獄に　つなぎ、
肉は　魂とも　燃えて　のぼる。(闇の盃盤)

から思ひ切つた肉感的デカダン思想を綴密な音律に彫刻して歌つてゐるのは、現代の詩人中には泡鳴一人であるのだ。」(20)

冗漫を許せ、この拔萃はそのまま泡鳴評になるからだ。

彼の「自然主義表象論」の信條は左の八である。

一、宗教的形式の脫却
二、懷疑と煩悶
三、神經と自然との燃燒流化
四、刹那的性慾の發現
五、心熱
六、新法語と新用語
七、思想と技巧との純化
八、新リズム

この所論は又片上天弦(伸)の「詩歌の根本疑」(四十六年「早稻田文學」)をも呼び起した。

「複雜にして、變化無限なる所謂主觀の反應感が如何にして一定の形式の中に收められ、而して其の感味の表現に遺憾無きを得るか。……吾等の疑ひは實にこの相扞格せんとするこの二者の調和抱擁が幾何の度まで遺憾無く行はれ得るかといふに在る。……詩歌はその根本の制約に於て、終に相逢はざるべき二者の相抱擁せんとする甲斐なき力を豫想するものではないか。」

御風の「詩歌の根本的改革」が出たのもこの後である。詩壇は多事となつた。

『スバル』の一群

象徵詩の移植と共に佛蘭西頹唐派の思想が官能交錯の幻法を以て、若き日本の詩壇を迷眩魅了した事はかの紅毛船の段々帆の羽ばたきよりも甚しかつた。自然主義の潮流も前後して、因襲打破、舊慣破壞の叫びをあげ、悲哀は近代の幻滅によつて愈々白日の下に暴露された。

この二つの思想は、奇異にも日本詩壇に於ては合流して、オスカア・ワイルド等の驕奢にして輕薄の美をも耀かす藝術至上の香芽となり、また惡の趣味の旋風となつた。

四十一年早春、與謝野寛の宣言した反自然主義の標榜より、引いてはまた種々の意見の相違より同人杢太郎、白秋、秀雄、勇の連袂退社が誘致された。

同年十一月、『明星』は遂に榮譽の百號を祝して、自ら廢刊した。

翌年一月、東天鮮綠の連星をとつて名とした雜誌『スバル』が創刊された。鷗外を中心とし

て、敏、寛し、晶子後援の下に、平出露花が經營し、同人として萬里、啄木、蕭々、勇等舊新詩社直系あり、外部よりは杢太郎、白秋、秀雄等また、之に應じて相交歡した。

『スバル』は惡魔的耽美の英才谷崎潤一郎を小說に發見し、詩に於ては竹友藻風、出野青煙等を綿々たる星雲の中から呼んだ。

二月、黑に金の『有明集』が上刊され、四月には表紙の紅に南蠻寺鐘の金箔の銘をうち、柏亭の描いた熱帶の更紗圖を作いだ白秋の處女詩集『邪宗門』が出版された。

『有明集』攻擊

近代詩の祖にして、當時の第一流たる蒲原有明は、年齒三十を越ゆる事僅かに、而も詩技渾熟して既に達意老成の風があつた。『若菜集』の藤村は永遠に青春にして純に、『白羊宮』及び敍事詩『葛城の神』の詩人泣菫は幽雅にして自在の大才ではあつたが、明治の全期を通じて最も近代類唐の薫習深く、萬法に照應し、常に象徵詩林の首座に在つた詩宗はおそらくこの人であらう。泣菫の詩漸く觀念化し、新星の未だ雲幕に拙んでざる間に、獨り高く宿る彼であつた。

その『有明集』は彼をまた象徵する彼の最高の集成藝術であつた。いささか理智と思念に工み、惡の祕毒を趣味し、或は靈飢の陰影を濃く彫塑し過ぎたかも知れぬ。然し乍ら、この詩人のごとく、日本語葉の音韻を聽き、微妙の響と色とを黑髮のごとく生かして綰ね綯うた名匠は新體詩草創以來曾て無かつたと言つてよい。

その有明詩の完美と定型の均齊とに、第一の石を投じたのは制約破壞の急先鋒相馬御風であつた。

御風は一言にして破した。

「我國の所謂新體詩を完成してその極致を示したものは有明氏である。而して……吾人が『有明集』を讀んで感じた所は、有明氏が所謂新體詩の最後の勝利者である事と、更に全く新らしい詩の起るべき時期に至つたといふことである。」（『早稻田文學』四十一年三月）

「交錯複雜なる現代人の感傷が歷史によつて定められたる形式の制約に對して苦しき矛盾の惱みを二重にする、强く鋭き自意識の責め木がある。……詩歌に形式はある、しかし形式に制約はない人間の情緒さながらの形式、主觀さながらの形式、これが卽ち詩歌の形式である。……現代人は、詩歌に於ても亦一切の邪念を排して『我れ』そのものの聲を聽き且つ歌ふべきである、そこに何の制約が要らう、何等の障碍があらう。直截に自由に自己中心の聲さながらの形式こそ、まことの詩歌の形成ではないか。……今日のわが詩界の眞相で、或は自然主義と云ひ或は象徵主義と言ふと雖も、多くは根本的に囚へられたる形式の基礎に立つて二重に囚へられつつあるのでないか。……わが國現代の殆ど凡ては根本的に自己を僞り欺いて苦しきながら、もの足らぬながらに作詩をつづけてゐるのではあるまいか……」

而してかの「詩界の根本的革新」論となり、亂拙蕪雜な口語自由詩の擲彈となつたのである。

思ふに、形式の美德はその中に切に參入圓悟した人にして初めて知る。苦驗に徹せず急燥にして半解の者には遂に緣なき完成であらう。萬法一理あり、人間形骸あり、詩魂夢に飛ぶと雖も還つて人身に宿る。たとひ詩の制約を破壞したればとて跡に絕對の自由は得られるものではない。破壞したその事がまた新らしき制約を我から作る事ではないか。結局は不自由の中に入る。不自由に大自在を知る人にして初めて格外にも遊べるのである。方丈の維摩である。

その氣魂である。ただ舊形に固定して僞すなきは考ふべく、新に我が形式を樹つるはよい。詩の美も清新相も要するに形式の美にあり新にあることは知らねばならない。言はずとも當今の境涯人御風には微かに苦笑されるであらう。若氣の早まりであつた。

續いて、第二の石を亂擲した一群は松原至文、藪白明、福田夕咲、加藤介春、人見東明であつた。その『有明集』の合評は『文庫』（四十一年二月一日號）に載つた。

美しい夢だ、夢幻だ。花の香を嗅ぐやうな非現實感だ、創作動機も空想的憧憬にあつて、强ひて象徵の香氣を絞つたものだ、技巧の爲めの技巧だ、近代的でない、痛切でない。かうした暴評の喧騷であつた。

この年少の痛擊が可なり不快ならしめた事と思ふ。またさしたる心境の動搖にも價せなかつたとも思ふ。然し、この一事は少くとも詩人の詩品の世に出づる機緣をはばんだ。

有明は大正十一年版『有明詩集』の跋、「自畫像」の項にかう書いてゐる。

「ここに集めた諸作は『有明集』刊行直後より大正四年三月『マンダラ』發行を經て、その五月に至るまで、凡八年間に亙つてゐる。その期間は新詩壇に於て少からぬ動搖を生じ、一面詩論の盛んであつた時代である。新主張の旗幟は詩歌の解放といふことであつた。恰もこの時『有明集』が出た。自然『有明集』は新主張に對する牲に上げられた觀を呈した。今思ふと『有明集』は不思議にも時代の思想の轉機の上に立たされたものである。わたくしはそれを悔むものでは決してない。わたくしは今日その打擊の恩を寧ろ感謝せねばならぬと思つてゐるのであるが、その當時わたくしは生死の大患に罹り、その後五六年に亙つて、肉體の衰弱と共に精神上には自暴自棄的の苦惱を經驗したのである。兎にも角にも詩歌解放運動は次第に勢を增した。それは最初相馬御風氏の議論や川路柳虹氏の創作に依つて端を發したので、殊に川路氏の口語詩は河井醉茗氏が出してゐられた『詩人』誌上で發表されたのであるが、强烈な外光の下で種々雜多な色と音とを交錯反映する港の印象的の描寫などを見て、わたくしは確かに新藝術が生れたと思つた。調律の拘束のある（日本語に於て果して拘束といはるべきほどのものがあらうか。）詩歌に對して、その缺點を（缺點は寧ろ詩人の方にあるのであらう。）補捉するものだと思つた。併しその當時も今日も、自由詩の第一の强味は口語を用ゐるといふ點にあるのであらう。さうした影響はわたくしにも漸く現はれて來た。今ここに『自畫像』の標題の下に集めた八年間の所作は わたくしの肉體の衰弱と心の動搖と懊惱とを示すもののみである。」

「パンの會」時代

『邪宗門』新派體を創つた北原白秋はその當時、木下杢太郎と長崎は史上に見、鄕土に遺つた異端邪宗の文化に憧憬し狂奔した。その思慕はまた遂に佛蘭西和唐派、或は印象派の色彩に眩惑し、肉體の碯熱に喘ぎ、幻法の痲醉風景に陶醉し、靈魂の惑亂を美しみ、詩に歌にまた官能の解放を求め、彼はまたその同好の友、李太郎秀雄等と雜誌『屋上庭園』を發行した。その異國情調の氾濫はまた彼等に後の文獻の一つたる「パンの會」の狂飆時代をまで捲き起さした。

「パンの會」は四十二年、畫家石井柏亭、山本鼎、森田恒友、倉田白羊等の『方寸』同人と往來交歡の餘に成つたものであつた。當時の東京

は古い江戸と新東京との二重合奏によつて、少くとも變體的清新を感じさせた。「畢竟パンの會は江戸情調的異國情調的憧憬の産物であつた。」

その頃、白秋は詩の邪宗門徒であると共に、幼時の長崎餘響の追憶に、新感覺の小抒情に沈湎し、また『桐の花』とカステラの新歌風に緣色のエメロウドの光觸を愛し、また東京の金と青との景物の中に我が感官の管絃樂團を指揮し、亢奮し、或は近代の芥子の花色の小唄を連彈した。

かうして骨牌の女王を表紙にした小型の抒情小曲集『思ひ出』(四十四年)が成り、詩集『東京景物詩』其他歌集『桐の花』の草稿をまとめあげた。

杢太郎は未刊詩集『綠金春春調』或は『食後の唄』(遲れて大正八年初版)戲曲「南蠻寺門前」を書き、秀雄は同じく戲曲「歡樂の鬼」を草した。これらの二つの劇は小山内薫の自由劇場に於てまた上演された。

*

木下杢太郎について、その友白秋が、彼の詩集『食後の唄』の序にかう書いてゐる。

彼は……其の官感の幻法から、不思議にも自ら惑亂せられない聰明と理義との保持者であつた。彼はこれら鴆毒の耽美者發見者ではあつたが、彼自らを決してその鴆毒の爲めに殺す癡愚と溺沒とを敢て爲なかつた。おお、此の七彩陸離たる不可思議國の風光の中に在つて、常に默々として手に太き洋杖を握りつつ徘徊する長身黑服の異相者、彼木下杢太郎の澁面を見よ。

彼は種々の舶來品——それは珍奇なる多種多樣のエチケツテ、南蠻の異聞、ギヤマン、香料、異酒、奇鳥、更紗の類——を吾徒の間に齎らした。のみならず、彼はまた絕えず、その特殊な紅毛舶來の感覺を以て、新樣の日本、油繪の江戸、銅版の長崎、メツサの小土佐、薄荷酒中の槍さび、西班牙外套の花の昇菊を發見し諦聽した。あまつさへ彼は、清親の錦繪の中に所謂文明開化のモンマルトルの酒舖を漁り、紅提灯と紙の櫻のかげに、かの阿蘭陀のラベイカ彈きの如く、椅子の上にロチの女を乘せ、而してしみじみと夜の三味線を爪ぐらせた。

彼は比類稀な詩境の發見者であつた。だが惜しい事にはあまりにその效果を整理爲ようとしなかつた。彼の逐次の新發見は殆ど目まぐるしいばかりであつた。だが彼はただ前へ前へと前進するばかりであつた。だから彼の背後には、常に勿體ない程複雜は複雜の儘に、美は美の儘にただ燦々爛々と取り散らされてあつた。

たとへて云へば、彼は驕奢と眩耀とに燃え狂つた珍草奇木の間を、金弧を描く一羽の斑猫光の如く、それからそれへと花粉にまみれてまた未見の新世界へと飛び去つて了ふのであつた。だが、彼が佛蘭西近代詩苑に於ける鬼才ラムボオの如く驚くべき官感的發見者であり、同じくその收集家で無かつたとしても、それは却て彼の詩人としての獨自性優越性を證左するものに外ならぬ。

再び云ふ。世にも奇異なるはわが友木下杢太郎の若き日の行跡であつた。彼はまことに極祕境の憧憬者であり、最も進んだ美の探檢者ではあつたが、遂に彼自身は邪宗の法皇に六年の長日月を奉仕して遂に清淨な個の童貞として老いて了つた支倉六右衞門の如く、結局謹嚴な淨身の童貞として、彼は彼自らの青春の初期を空にして了つた。

麗明にして柑子實る異國趣味の海港に生れ、西域文明の教養と官感とを修練し來つた彼が如き青年と、もともと長崎の近海に生れ、かの阿蘭陀藝術の餘香に直接薫染して育つた邪宗系のトンカジョン予が如きとが、その當時一見して共鳴し感激し歡喜し合つた事は當然であつた。予等は無論互に刺戟し合ひ影響し合ひ、熱狂し合つた。予等が狂飆時代はかくして豪華であつた。Panの盛宴はかくしてその驕奢の絶頂に達した。

＊

その頃、永井荷風は佛蘭西から歸朝し、その好譯『珊瑚集』（出版は大正二年）の詩章を詩界に贈つた。

『三田文學』が創刊された。『スバル』と『屋上庭園』と、かくして同色の三派一團が、「パンの會」を中にして、時の騒壇の最も藝術的なる清新なる歡會を、その青春と共に乾杯した。

荷風と同じく前後して歸朝した高村光太郎も、之等類唐の「心」の放蕩者の中に大きな手と高い春と、氣品ある微笑とを以て入つて來た。彼も亦人道的趣味的藝術放蕩の中に爆發した。彼は後で追憶して書いてゐる。

「青春の爆發といふものは見さかひの無いものだ。若さといふものの一致だけでどんな違つた人達をも融合せしめる。パンの會當時の思出はなつかしい。いつでも微笑を以て思ひ出す。本質のまるで別な人間達が集まつて、よくも語りよくも飲んだものだ。自己の青春で何もかも自分のものにしてしまつてゐたのだ。銘々が自己の内から迸る強烈な光で互に照らし合つてゐたのだ。いつ思ひ出しても滑稽なほど無邪氣な、燃えさかる性善物語ばかりだ。あの頃、萬事遲蒔な私は外國から歸つて來て、はじめて本當の青春の無鐵砲が内に目ざめた。其が時代的に或る契合點を持つてゐた。前からあつたパンの會に引きずり込まれたのは自然の事であつた。細かい事は大抵忘れた。又忘れてもいいのだ。通り抜けて來た事は私にとつて一つの本能の陶冶になつた。其が貴い。

爆發は爆發だ。爆發してしまふと、あとはもつと眞摯な問題が目をさます。人生のもつと奥の大事なものが幾層倍の強さで、活動し始める。パンの會は自然と退屈なものになつてしまつてお仕舞になつた。私を其の情緒から救つて、私の本然に立返らせたのは智惠子との戀愛であつた。私が私になつたのは其からの事である。」

光太郎も盛んに詩を作つた。口語の殊によき自由詩も。

無論その頃は白秋も圭太郎も以前の定型の象徴詩のみを守つてゐなかつた。大膽と思はれるほどの口語の自由詩を書いた。

「朱欒」

四十四年末、藝術の香氣を香氣とし、交響の清新を清新とする雜誌『朱欒』が白秋編輯の下に創刊された。

その翌年の六月、『朱欒』は白秋、露風の合著詩集『忽忘草』を出した。露風はその前年から白秋と知つた。

彼の詩集『廢園』は『邪宗門』に雁行して世に現れた。『廢園』は紅色の表紙で、いかにも若き時代の露風を思はせるものがあつた。次いで彼は象徴の氣韻漸く閑かにして、青き雪のごとく澄みつつある詩集『寂しき曙』を編んだ。

露風の名は『忽忘草』に定まつた。

その『忽忘草』に載せた彼の詩、「現身」その他は早くも東洋的象徴詩人としての完成に近い

彼の風格を示すものであつた。彼の詩境の最高の清澄は大正の中期にあつて遂に「美神」を生ける宮」の傑品を成した。

＊

四十五年初夏、白秋は相州の三崎に移つた。海光と麥の香とは彼を近代邪宗門の不可思議國から、飜して、生々潑剌とした自然の呼吸を彼に吹き込んだ。

水天を隔てて、小笠原の燦爛たる日光風景が、彼の方へ、彼の方へ輝く漣を照り送つた。彼は遂にまた海波六百浬をはるばると越えて小笠原へ渡つた。

10 大正時代

筆者言ふ、此の明治大正詩史概觀は漸く明治篇を書き了へたのみで、遂に約束の紙數を超過し、更に締切時間急迫し、今は如何ともすべからざる狀態に立ち至つた。就いてはこの大正篇は改めて十分に執筆解說するよき機會を得たいと思ふ。右御諒恕を乞ひたい。幸に前に少々書いたものから、詩、民謠、童謠、兒童自由詩に關するものをひと通り收錄することにした。

前期

新抒情詩時代に開花し、明治末期に寧ろ頽唐の香氣を病的にまで氾濫さした浪漫精神はいつとなくそれ自身にも疲勞と倦怠とを感じ初めた。青春は老い易い。歡樂極つては哀情が生ずる。尤もあの爆發的なパンの狂飆もつまりは眞實への道程に起つた若い時代の擾亂であつた。人間の眞實を求め自然の光明を讃ずる心が、誰の胸にも今は一味の涼風でも慕はずにはゐられなかつた。大正初頭の詩界は少くともさうであつた。

恰も『白樺』が代表するトルストイ系の人道主義が、時の藝苑にその初心の清淨性と粗放な血氣とを以て入り交つて來たことも、一の救ひでもあり禍でもあつた。

夢より現實に醒めて深切に自己をふり返るべき時が來た。そこにはパンの會の自然消滅があつた。

「小生は今疲勞してあり、餘りに過勞せる小生の心は、微妙なる音調に對して鈍麻してあり、凡ての高尚なる美、餘裕ある藝術、ファインなる味に對しては、嘗ては之を得んとあがき、今や到頭得難き境遇にありと思ふや、癡嫉の極むしろ敵意を生ずるに到るものあり。（中略）小生の如き思想並に身體の勞働者には君の藝術はすでに不相應のものと相成候か。小生の今の狀態より脫却してこの微妙なる世界に走らずんば、そは見世の玻璃窓内の金剛石なり。」

その初め、新綠の毒素に鬱狂をすら感じ、我を廢頽者として淸亮なる心性の友を思ひ、時としては投げやりの情癡をも歌つた高村光太郎も遂にきつぱりと「冬が來た」と胸を張つてはその硬骨な冬に相對した。

冬よ
僕に來い、僕に來い
僕は冬の力、冬は僕の餌食だ。
しみ透れ、つきぬけ
火事を出せ、雪で埋めろ、
刃物のやうな冬が來た。

而して「無慘なる廢頽者の血は遂にかの全能の光の爲に淸められた。」と同じ友リーチに消息するに至つた。その後にいよいよ彼は飛躍した。全く彼の『道程』は大正期の最も傑出した詩集の中の一つであらう。

白秋とても若き日の癡夢から既に痛烈に戰き醒めた時期にあつた。彼は大正の前期に於て、主として短歌に執心し、また散文に赴いたが、先の『朱欒』（二年六月廢刊）から『アルス』（四年三月創刊）を通じて、室生犀星、萩原朔太郎、山村暮鳥、大手拓次等の新進が簇出し、擡頭したので

ある。中にも犀星の野性にして眞率なる、熱鬱してまた烈々たる、朔太郎の極めて獨自なる神經性鋭感と最も近代的なる青白き心靈の美は、その『感情』一派の類ひ稀なる雙璧であつた。暮鳥は『聖三稜玻璃』と光り、拓次はまた日本に無き妖氣と幻術とを『綠の蟇』に息吹かした。他の詩境には、柳虹の聰明にして進取的なる、一貫して自由詩の開發と主張の徹底に努め、加藤介春は暗く獨自に、『太陽の子』福士幸次郎は寡作にして樸茂に、民衆精神に人生の堅實性を求むる者に白鳥省吾、百田宗治があり、福田正夫はまた『農民の言葉』によつて一躍新人の聲名を獲得した。『黑衣聖母』の日夏耿之介また高く驕立して、そのゴチック建築と稱する、矜驕にしてまた深沈たる宗教的文字の詩塔に一世を睥睨し、西條八十『砂金』のごとく鍊り、堀口大學輕快暢達にして常に泰西の最新聲を傳へ、「秋刀魚の歌」の春夫は哀婉に、藻風は典雅にしてなほ若き感情を保ち、碎花は或は逸宕に、健（柳澤）はまた佛蘭西式の好紳士詩を作つた。『白樺』の人道派の系統よりは天眞にして感覺鮮新なる千家元麿が出で、林間香草の間を佐藤惣之助は驚くべく自在に跳躍した。いつもかはらぬ傷恨の人に春月があり、新進の愛護者としては内藤鋹策があり、正富汪洋があつた。

『有明集』後、この時期に於ける有明の詩術も決して膠着したものではなかつた。何と云つても一流の重壓は堂々たるものであつた。ただ後期に入つてしばらく作が絶えた。他の大家には與謝野寛の『柵の葉』夫人晶子の小詩品共に稍過ぎる程才機奔逸の若さを見せ、米次郎初めて日本詩の散文詩風の詩篇に活躍し、醉茗また淡々としてその自由詩體に向つた。

若し夫れ、三木露風に至つては、まさしく彼はこの期に彼の信條とする象徴詩人としての一人の完成を示した。その業績については正しく讃へらるべきであらう。彼は『白き手の獵人』に於て澄心の域に入り『幻の田園』に於ては更に沈潛の度を增し、東洋の新らしい簡素と藝術精神とを深切に象徴した。ただ官能交錯の大事を外にして象徴を說くことは偏執であらう。彼の『象徴詩集』中の觀想の精確に於ては池袋在住當時の詩品が最も高く、その後の二三の傑品に至つては遂にその絶頂に達したと言へる。

總じてこの前期より次第に濃厚の度を增して來たのは民衆的精神に立つ詩派と詩人の勃興である。ホイットマン、カアペンタアの詩書その他の飜譯講演等が盛んに詩の季節と光との中で野聲をあげた。

後期

大正六年に日本詩人の渾合的團體である詩話會が創立された。翌々八年にその會より年刊の詞華集『日本詩集』の第一卷が出版された。十年にはこの會から連袂脱會した露風、耿之介、八十、藻風、蕭々、允、大學及白秋等に依つて、新たに新詩會が興された。新詩會はまた直にその詞華集『現代詩集』の第一輯を出版した。この時から日本詩壇の混亂期が始まつたと云つていい。

詩と散文との甚しい混淆を來したのもこの前後からであつた。形式としての自由詩も、つまる所、詩の洗練されたリズムの美德に俟たるべきに係らず、單に行を分けた散文としての放漫を一向に恥としなくなつた。デモクラシーの思想が詩話會に滿ち擴がつたための混亂は詩の上のみでなく、正しい詩に對する尊敬と理解とは失はれ、ただ破壞の爲めの破壞がほとんど當然の如くに行はれ初めた。詩人としての心性の

デリカシイの如きは甚しく侮蔑され、詩の技法も表現上の鍛錬も經ず、散文以下の惡文を以て詩と稱する者が續々と年少輩の徒に現れるに至つて、いよいよ一般の詩壇が惡化し、混亂したのである。

純正敍情派、印象派、象徴派、神祕派、影象派、民衆派、新民衆派、未來派、表現派、ダダ派入り亂れて、遂に收拾すべくもなかつた。然しながら反詩話會の氣勢が四方に起つて、實力ある新人も漸く擡頭しかけて來たのも事實であつた。かくして何らかの正しい詩への還元、破壞後の新らしい建設の氣運が底深く動き初めたとも思はれた。この詩壇の激しい渦卷はいつになつたらば沈潛した、しかも照光の燦爛たる一つの水面に歸るべきであらうか。

*

だが、詩話會も十五年十一月に遂に解散した。

兎もあれ、大正末期乃至現在に於て、活躍した、またしつつある詩家の名を擧ぐれば、如上の外、佐藤春夫、山宮允、藤森秀夫、佐藤清、福原清、尾崎喜八、大木篤夫、井上康文、中西悟道、多田不二、陶山篤太郎、金子光晴、吉田一穗、前田春聲、霜田史光、森爛三郎、府川惠造、岡崎清一郎、萩原恭次郎、深尾須磨子等がある。

11 民謡略史

民謡の傳統と意義

本來、民謡は民族の歌謡である。云ふまでもなくその時代々々に於ける民俗固有の、しかもなほ普遍的な生活感情を表現することに民謡の眞率性と素朴性とがある。民謡の歌語と型體とは常に時代に順應し、その眞髓に於ては古今を通じて一貫した民族の精神を精神としてゐる。この不易性と流行相との渾融、この最も顯著な渾融にこそ一に民謡の特徴は光る。しかも民謡の表現は簡潔である。

*

民謡は民族共通の聲である。この故に個の叫びも民衆に浸潤する。民衆全體のものとなり、山野の聲となり、海洋の響となる。無論一々の歌謡に一々の作者はあつた。然しながら、遂には民衆全體の中にその影を沒して了つた。その個の聲は民衆の聲として揚つた。また民衆全體によつて磨かれ、時とともにまた洗練を加へて來た。民謡の民謡たる所以はこゝにある。

*

民族の興るところ必ず民謡は興つた。日本民謡の淵源も遙かに神代にある。古くは記紀以來の文獻に徴し、近くは室町以降の傳唱に聞く時に、如何に我が日本民族が歌ふところの太古にして民族的であつたか、また如何に太新にして鄕土的土俗的であつたか。思半ばに過ぎるものがあらう。

嚴密に云へば民謡はその生れるところに、俗謡、三絃樂に伴ふ各種の唄ひもの、或は小唄、琴曲等とはその相を異にしてゐる。極めて純正なる土俗の野調であるからである。この民衆と鄕土との聲であつた日本の民謡も明治維新以來多くはその地方色と野調とを失つて行つた。俗謡化があまりにその處女性を穢して來た。あまりにめまぐるしい文化、あまりに繁瑣にして深刻な近代の物質生活、あまりにまた矯激な渡來思想の餘殃から、また交通機關の四通八達から、民謡そのものの精神も傳統もいつとなく攪亂され、俗化され、墮落させられつつ衰へて來た。今にして本來の面目を保つ民謡の正調は極めて稀なる狀態にある。

明治の創作民謡

明治の二十四年に中西梅花の「浦のとまや」等が『國民之友』に發表された。新體詩人の民謡風の創作はこれらが最も早いものであらう。然し「浦のとまや」は純然たる民謡ではなかつた。小唄に近いものであつた。山田美妙の「蒙古襲來」も當時に成つた。之は少くとも民謡體である。だが軍歌との混淆である。而も他にはまだ民謡作を見ない樣である。齋藤綠雨は小唄或は端唄のにほひが強い。正岡子規にもその後に二三の俚謡作があつた。俚謡の傳統を知つて之に擬したものであつた。但し、その「内地雜居の歌」は品質ともに俗謡の俗調に過ぎなかつた。面白がりの氣まぐれの餘技と見ていい。森鷗外には日露戰役の時初めて「箱入娘」の作があつた。これこそ英傑のありのすさびであらう。

明治の三十年代、凡そその十年に亙つて、日本の詩壇には文庫派の詩が盛んに行はれた。その間に夜雨の「お才」が著しく鄕土的な民謡調を流露せしめた。この「お才」は新民謡發達史の上に極めて注目さるべきものである。以來文庫派には民俗に材を取り、また田園の敍景に俳味を强調したものが一異色となつた。平井晩村等が之を後に承けた。然し晩村等の民謡或は子守唄と稱するものの多くは囚へられた俳諧風の新體詩であつて、自覺された民謡とも童謡とも見えなかつた。彼が大正の六年に筒井葦坡等と出版した民謡集『茶摘唄』所載の民謡は殆んど前記のものである。ただ中には純然たる民謡或は童謡と見るべき僅少な作品があつた。但しその内容に於ては格別清新な感覺も思想も韻調も見えなかつた。

その他、かの明治の三十年代に、詩作の傍ら、時として民謡の創作に漸次熱意を示して來た人に高安月郊、平木白星、前田林外、薄田泣菫、岩野泡鳴等があつた。蕚集、研究、評論等も目に立つて來た。中にも泣菫の民謡體は「詩」の香氣深く品格高く、寧ろ近世風の小唄に通ふところがあつた。洗練を極めた古風の鄙びではあつたが、新時代の野調ではなかつた。當時の雙璧として詩に於て泣菫と並び稱せられた蒲原有明は一篇の「木曾少女」を殘した。その一篇は今日に至るまで作者にも忘れられてゐた珍品である。民謡體の中に彼としての新感覺は既に潛んで光つてゐた。なほ彼は後に「赤い鳥」を公にした。韻調こそは民謡であつた。だが、その内容は象徵味の深い詩そのものであつた。

個の民謡集に至つては明治三十八年三月に出版された野口雨情の『枯草』を以て嚆矢とする由である。だが、彼の民謡はただにその片鱗を示して未だ世に顯れなかつた。

北原白秋には、三十七八年の頃『文庫』に發表した幾多の詩篇の中に田園の俳味に、傳說土俗等を交へたその一派の韻調を遺つたものを發見する。それらの詩には今日に於ける童謡、民謡の作家としての芽生はあつても、然し純然たる民謡とは云へなかつた。「空に眞赤な」の一篇は、後にパンの會の會歌となつたもので、どうにか形を成した彼の最も古い初めての作の一つであつた。明治四十一年の初夏の頃であつた。後『思ひ出』及び『東京景物詩』等に收められた小唄民謡等の作がある。四十二年の九月に小唄「片戀」、また大正の二年、相州三崎居住中に「城ケ島の雨」、その他小唄に緣由した「短唱」をも提唱發表した。三十一音の短歌型より何らかの蟬脫を意圖したものである。その後葛飾の紫烟草舍時代に「秋の鄙唄」等を作つた。

それと同時期、或は稍遲れて、小唄民謡の創作を時に公にした人々に、雨情の外、木下杢太郎、三木露風、川路柳虹、福田夕咲、先に云つた平井晩村等があつた。

詩人の作に成る新民謡（むしろ新俗謡）の流行を來したのは大正の三年頃に飜譯劇トルストイの『復活』中に松井須磨子によつて歌はれた島村抱月、相馬御風合作の「カチューシャ」の唄に因を發した。次で同じ藝術座の「坐ける屍」の劇中の唄として大正六年の北原白秋の作「さすらひの歌」その他『カルメン』劇中の色々の俗謡小唄の類が引續いた。低調のものではあつたが、詩人の歌謡が民衆の中に傳播し流行すること著しかつたために、童謡民謡の爾後の勃興に或は幸したかも知れぬ。或はまた禍したかも知れぬ。後に雨情の船頭唄「枯れ薄」が震災前の世を盛んに騒がせたことは周知の事實である。

大正期

まさしく時は大正に入つて新民謡の氣勢が昂つて來た。一つには七年七月童話童謡雜誌『赤い鳥』の創刊によつて以來自覺の上に立つた新童謡の作家の簇出雲のごとく、その童謡の普及日に隆んにして、新時代の民謡も愈々確實性を帶びて來つつ、蒐集、研究、論戰もまた愈々に詩壇的となつた。この期に於て白秋の作も最も多かつた。雨情も民謡童謡に復活した。彼はその郷土茨城の方言を用ゐて固有の野調を成した。

最近に至り、各郷土地方に創作新民謡大に興り、その歌詞歌曲を詩人音樂家に委囑して、眞によき「彼等の民謡」を得て、土地の發展、民心の高揚を期しつつある。ただ畏るべきは之に處する詩人音樂家の良心問題である。

12 新童謡の興隆

童謡と境涯

童謡は童心童語の歌謡である。而もまた純粹たる藝術價値をその價値とするところに、初めて眞の童謡の香氣と生彩が保たれるであらう。

童謡も詩の中の一つの道である。この道を正しく自覺し正しく稚く行ふ者にこそ眞の童謡詩人としての境涯が定まるであらう。

この境涯の童心に常住するといふことは容易ではない。詩人としての寧ろ最奥處の生活であるとさへ思はれる。

童謡の傳統

由來、日本童謡の淵源は極めて古い。上古に於けるかの「わざうた」がさうであつた。然し乍ら、かの「わざうた」は本質に觀ても、乃至は流行相の上に察しても、眞の童謡としては認め難いものである。主として支那童謡の亞流であつて、時事の諷刺、批判、或は豫言的歌謡であつた。所謂神の謡はしめるものとしての暗示性を多量に含んでゐた。神意と童子語とは相通ずるものがある。この故に成人が或る諷意を成すに當つて、おのづからにその聲を童子の口唱に託したものと見られる。兎にも角にも流行唄にはちがひなかつた。かうして愈々に童男童女の間にも喧傳されたものであらう。眞純なる童子の歌謡は爾後に起つた。而もこれは民謡の與起に連れて發生した自然現象でないことはない。從つて成人の作るところも尠からず兒童に與へられた。而も何れもが一二の例外を除いては作者未詳のものであつた。童謡或は民謡の本質から考へてもさうしたものかと思はれる。

童謡が童謡として歌はれた初期のそれらに就ては、記錄の上にもかなりの湮滅があることは肯はれる。ただ室町以降に於て散見し、徳川期に於て蒐集され、また盛んに流行もした自然童謡、歳時唄、遊戯唄、子守唄の如き、引き續いて明治の兒童にまでは田園に於ても市井に於て

も多々益々傳唱されたものである。さうして大正の整理時代に入つたのである。

本來童兒そのものの歌謠は極めて率直であり、端的であり、暗示性を潛めてゐる。成人の成すところのものは、傑れて慈愛に滿ち調律にも洗練はされてゐるものの、過ぎては猥雜な民謠の卑俗と淫風とに混淆するに到つて、遂には士人をして顰蹙させる、その種の多くが兒童の遊戯唄にも浸潤して來た。時には何等の藝術的香氣のない道歌、教訓歌の如きを強ひても琴曲などに合はせずには與へられなかつたのも當然の成行であつたらう。

明治の小學唱歌

明治の小學教育は墮落した童謠の一面のみを見て、傳統ある正しいよい童謠をも排斥し去つた。さうして之に換ふるに風土習慣の全然異つた泰西の歌調と兒童の生活感情に對してあまりに無識な小學唱歌或は軍歌の歌調を以てした。かうして兒童の生活はまさしく學校と家庭とに於て二分されて了つた。何等の流通をも其處には見られなかつた。この教育方針はたしかに過つてゐた。何故かなら日本の兒童は日本の兒童以外の何者でもないからである。祖國の山川を搖籃として育つべき我が民族の子弟が、ほしいままに祖國の傳統から隔離され、その常に直面してゐる鄕土から遮斷されて、眞に自由に生き得る途としてある筈はないからである。ここに於て大正の童謠復興は確かに意義ある開展を示した。從つてまた一般の藝術教育運動が世の兒童の爲めの光輝となり救ひとなつた。

尤も、小學唱歌以前に、兒童の讀物としての唱歌用のものは、これまでにないことはなかつた。然し、藝術作品としての香氣を缺き、低劣であつたことについて、それらは今日の童謠と同一に見るべきでない。若し童謠流行の機運に乘じて、それらも童謠と自稱し混入して却つて對俗關係に於て宣傳これ努むる者があるならば、由々しき僭越でないことはない。却つて、それらは小學唱歌よりも往々に下俗だからである。で、右は問題とすべきでない。

新童謠提唱の意義

傳統としてこの在來の童謠を承けて、その詩人としての本質の上から、明治末期にも一二の作家にその種の作が自然に流露した事はあつた。またかうした傳統の上に更に泰西の子守唄の詩風をも加味した作も試みた向はあつた。然し、一の重大なる運動として眞に詩人たちの自覺の上から發生した今日の童謠なるものは、大正の七年、雜誌『赤い鳥』の創刊を機として、たちまち北原白秋、西條八十、三木露風等によつて澎湃たる波濤をあげたそれであることは既に周知の事實である。この運動に暗示され刺戟されて以來、復活すべき氣運者は復活し、新に立つ者は新にたつた。河井酥茗、野口雨情、濱田廣介、白鳥省吾等である。而もまた之に副して起つた兒童自由詩の開發こそは童謠初發の眞精神に兒童の感情の表現を引き戻した近來の大きな眞實顯證であると信ずる。

その運動相

この藝術童謠の運動は數年の間に豫想外の隆盛を成した。寧ろ眞實者には困惑と苦笑とをさへも催さしめるほどの俗惡な流行とまでに墮ちんとしつつある。藝術兒童雜誌の濫行・童謠童曲集の頻々たる出版、和洋童謠踊の試演、レコードの吹込、ラヂオの放送。遂には無理解と亂擾と僭童謠との混雜と喧騷とが、眞の正しい藝術童謠をも猥りに冒瀆し、眞の兒童自由詩の向上をも却つて徒らに阻止しつつある。追從者と雷同者の過つた模倣と利用とは實に童

心の思無邪境をして、刻々に俗情の地獄たらしめむとしつつあるのである。物極れば凡て亂れる。大正の童謡運動にも早くも衰頽の芽ざしが現れ初めた。衰頽すべきは衰頽さしたがいい。眞の傑れた童謡は而もなほ本質の光輝を光輝とするであらう。正しい差別も批判もなされるであらう。隆盛必ずしも隆盛でなく危險は必ずしも危險ではないが、而も官憲の無理解に依る一大鐵槌が今はまさしく新童謡乃至は兒童自由詩の上に下らむとしてゐる。僻童謡と感傷的少女詩の跳梁と一知半解の矯激者の過誤とに半は因してゐるとも觀られるが、童謡作家自身にも何かの責任はあらう。深く心を潛むべき秋となつた。

童謡の道

この童謡の道こそはまた極めて至難事であると覺悟される。それは少くとも詩人がその年齢相當の詩を自身に成すよりも以上の心靈並びに感覺の洗練を要する。表現の素朴と無邪と單純化とを要する。而もまた考ふるに詩の凡てに流通するものは一である。其處にはまたおのづからな本質の開顯が成されるであらう。

ただ現代の童謡運動も漸く緒についたばかりであつて、在來の日本童謡を復興し整理する以上に、十分に矜るべき異常の進出は未だなされてゐないかも知れない。然し乍ら、幾許かの革新を整理の上に敢てしたといふ歡びだけでも各人の努力はかなりに酬いられたといへよう。今後こそはこの日本童謡の傳統を傳統とし、精神を精神とした上での、而も時代の新風體をも自在に創造すべきであらう。

新童謡運動の今日まで

童謡は學校に家庭に、または音樂會に、ラヂオにレコードに、今や滔々として浸潤しつつある。この運動に從つて既に左記の件々が興隆した。

一、詩壇の諸家、有名なると無名なるとを問はず、倏ちこの新運動に共應して競ひ加はつた。
一、新進童謡作家が頻々として輩出した。
一、兒童自由詩の勃興。
一、『赤い鳥』以外に模倣雜誌の頻々とした刊行。
一、舊來の少年少女雜誌も亦、これに刮目されて、漸く、在來の唱歌風の歌謡を棄てて、いよいよ新らしい童謡を歡迎し初めた。
一、各詩人の童謡集、各音樂家の童謡曲集の出版に加へて、遂には專門の童謡雜誌の刊行さへ相續いて起つた。
一、各新聞雜誌に於ける童謡或は兒童自作の自由詩流行。
一、日本各地の小學校に於ける兒童自由詩奬勵とその開發。
一、國定唱歌に對する童謡の代唱。これは漸次にその勝利を確實にした。
一、兒童自身の自由詩集發行。
等である。

13 兒童自由詩運動

新童謡勃興と共に、また目ざましく、それは豫期以外に目ざましく開花したものに兒童自由詩がある。この誘發指導は主として『赤い鳥』に於て行はれ、北原白秋が當初より常に之に當つた。嚴選、採錄、批評、十年に亘り、一年は一年と向上した。かくして日本の兒童は初めてその本質を發揮し、詩の何たるを自覺し、詩創作の喜びを知つた。彼等兒童の世界はかくして詩の創作、觀照を通じて、彼等自身の生活を愈々

豊かに照り輝かして來た。この新運動は祝福されてよい。

兒童達は、もとよりその當初に於ては、歌謠としての童謠體を模倣したに過ぎなかつた。が、彼等の本性と感動の生々律とから、次第に、それは必然に、自由詩形の發想法を創造するに到つたのである。眞の童心をそのままの言葉にうち出し、句に行に、自由詩形に、眞の實相を帶びるに到つたその經過は、全く驚くべきものであつた。この『赤い鳥』に於ける新運動に共應して、其の誌以外の模倣雜誌が、頻々として刊行され、競ひ加り、全國小學校に於ても啓發され、實際教育の上にも實施されて來た。かうして日本の兒童はその素質に於て、その觀照に於て、ともすると成人の世界をさへ凌がうとする優秀さを發揮して來た。のみならず未來の詩の萌芽をさへすでに胚胎して來た。自由詩人、或は口語歌人、新らしい俳句の作者達もこれらに依つて必ず何等かの貴い暗示を受けないでは居られないであらう。

詩は立派に兒童のものとなつた。否、兒童それ自身が詩人であることを、兒童は確實に證明した。日本の兒童達はかうして立派に詩の作品を輝かして來た。この全國的にわたる兒童自由詩の運動は、まさしく一つの新らしい波濤を世界に騰げつつある。

註、その作品は「赤い鳥」誌上に毎月掲載された。選集としては日本兒童文庫の「日本兒童自由詩集」がある。

14 明治詩書及史詩略年表

二年

「世界國盡し」福澤諭吉。

六年

「暗誦十詞」福澤諭吉。

十四年

十一月　「小學唱歌集」文部省音樂取調掛、伊澤修二編。

十五年

八月　「新體詩抄」外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎。
「新體詩歌」(第一集)竹内節編。

十六年

「新體詩歌」(第三集)竹内節編。
三月　「小學唱歌集」(第二編)文部省音樂取調掛、伊澤修二編。

十七年

三月　「小學唱歌集」文部省編。

十八年

十月　「十二の石塚」半月。

十九年

「纂評新體詩選」竹内隆信編。
「唱歌」(學生歌)建樹。

二十年

四月　「新體詩選」美妙、紅葉、九華。
雜誌「國民之友」二月、蘇峰によりて發刊。
婦人雜誌「伊良都女」四月、美妙齋により發刊され、女性の詩を募集す。

二十一年

「孝女白菊の歌」直文。
五月、雜誌「我樂多文庫」直文により發刊、後に「文庫」と改題さる。

二十二年

一月　「いさり火」建樹。
「明治唱歌」建樹。
雜誌「しがらみ草紙」鷗外により十月創刊、ロマンティシズムの勃興に努む。

二十三年

「歸省」宮崎湖處子。

二十四年

三月　「新體梅花詩集」梅花。
五月　「蓬萊曲」透谷。

七月　「水沫集」鷗外。
八月　「新調韻文青年唱歌集」（第二編）美妙。
梅花狂死す。
雑誌「早稲田文學」逍遙により創刊さる。

二十五年

落合直文、淺香社を結び、その門下、鐵幹、柴舟、躬治、薫園等を集めて新派和歌運動を初む。

二十六年

十一月　「湖處子詩集」湖處子。
雑誌「文學界」透谷、天知、藤村、孤蝶、敏等により一月創刊。

二十七年

一月　「歐米名家詩集」建樹譯。
十月　「透谷集」透谷。
「征清歌集」（詞華集）信綱。
十二月　「魂迷月中刄」（詩劇）泡鳴。
この年、泡鳴の詩「女學雜誌」に現る。
醉茗、玉茗等の作品「少年文庫」に發表さる。

二十八年

萬年、樗牛等帝國文學會を起し、雑誌「帝國文學」を發刊す。
九月、有明の處女作「落穂雙紙」に現る。

二十九年

三月　「詞藻」（詞華集）醉茗編。
七月　「東西南北」鐵幹。
十二月　「月草」鷗外。
「美文花紅葉」雨江、桂月、羽衣。
巽軒の敍事詩「比沼山の歌」「帝國文學」及び「太陽」に發表さる。
雑誌「新小說」及び「大和琴」創刊。

三十年

一月　「天地玄黃」鐵幹。
三月　「この花」新詩會編。
四月　「抒情詩」嵯峨の家、獨歩、花袋、國男、玉茗、湖處子。
五月　「かげ草」（詩）鷗外。
「松蟲鈴蟲」天遊、天來。
八月　「若菜集」藤村。
野口米次郎最初の英詩集"Seen and Unseen"發行さる。

三十一年

六月　「一葉舟」藤村。
十二月　「夏草」藤村。
「美文黃菊白菊」桂月。
五月、雑誌「文學界」五十八號にて廢刊。
六月、雑誌「新著月刊」廢刊す。
八月、雑誌「國民之友」廢刊す。
十月、「早稲田文學」に「新體詩振興案」出づ。

三十二年

四月　「天地有情」晩翠。
六月　「風月萬象」花外、露葉、枯柳。
十一月　「散文深山櫻」建樹。
「暮笛集」泣菫。
十二月　「夕月」夜雨。
蒲原有明の「日神頌歌」「讀賣新聞」新年附錄に尾崎紅葉によつて紹介さる。
八月、矢田部良吉溺死す、年四十九。

三十三年

五月　「わか草」醉茗、露葉、花外。
七月　「詩美幽韻」（詞華集）醉茗。
八月　「有明月」秋嘲。
十二月　「夜濤集」月郊。
二月、薄田泣菫等によつて大阪より雑誌「小天地」發刊さる。
三月、外山正一逝く、年五十三。
十一月、大西操山逝く、年三十七。
與謝野鐵幹、新詩社を起し、雑誌「明星」を出す。
九月、蒲原有明、與謝野鐵幹等によつて月刊詩集「片袖」發刊さる。この「片袖」は袖の

形に右の裾に圓みをつけてあつた。

三十四年

一月「無弦弓」醉茗。
三月「鐵幹子」鐵幹。
四月「むらさき」鐵幹。
五月「曉鐘」晩翠。
六月「美文韻文唔香疎影」雨江。
七月「小百合」臥城。
「露じも」泡鳴。
八月「落栢集」藤村。
九月「片袖第一集」鐵幹、有明。
十月「ゆく春」泣菫。
十一月「ハイネの詩」柴舟譯。
十二月「片袖第二集」白星、秋曉、夜雨、春風。
「みをつくし」敏譯。
「詩聖ダンテ」(傳)敏譯。
雜誌「明星」の詩人を中心として高襟的戀愛詩流行す。世、星菫詩人と稱す。

三十五年

一月「草わかば」有明。
二月「野茨集」臥城。
「つゆ草」みづほのや。
三月「片袖第三集」
十月「透谷全集」(詩文集)透谷。
「新體詩歌作法」直文。
「萩の家遺稿」美妙。
十一月「半月集」半月。
「うもれ木」鐵幹。
十二月「玉匣兩浦島」(詩劇)鷗外

三十六年

二月「日本國歌」白星。
四月「春雪集」月郊。
五月「獨絃哀歌」有明。
八月「社會主義詩集」花外。
九月「長曾我部信親」(詩劇)鷗外
「新韻集」臥城。
十月、新詩社を脱したる林外、泡鳴、御風等、新に東京紅文社を組織し、十一月、雜誌「白百合」を發刊し、ロマンチック運動を始む。
當時の詩壇は敍事詩に始まり、情熱派の薄田泣菫クラシック趣味に冷え行くと同時に、蒲原有明從來のクラシック態度より轉じてシムボリック傾向に進み、岩野泡鳴は何時かロマンチシズムに感化されたる傾向を示す。(泡鳴記錄)

三十七年

一「七つ星」白星。
二月「花外詩集」花外。
五月「萩の家遺稿」直文。
「毒草」鐵幹、晶子。
「藤村詩集」藤村。
「夕潮」泡鳴。
十月「新曲浦島」(詩劇)逍遙。
十一月「歸朝の記」(詩文集)米次郎。
十二月「石川啄木の名、この頃より現る。

三十八年

一月「戀衣」登美子、晶子、まさ子。
「山上湖上」みづほのや、山百合(赤彦)。
「心のあと出盧」(長篇詩)露伴。
三月「夏花少女」林外。
五月「あこがれ」啄木。
「二十五絃」泣菫。
六月「白玉姫」泣菫。
「塔影」醉茗。
「悲愁悲歌」泡鳴。
「青海波」(詞華集)醉茗。
七月「春鳥集」有明。
「夏姫」露風。
八月「耶蘇の戀」(詩劇)白星。
九月「小野のわかれ」薫。

「まひる野」うつぼ。
十月　「海堡技師」(詩)泡鳴。
「海潮音」敏譯。
十一月　「花守」夜雨。
「新曲かぐや姫」逍遙。
十二月　「劍影」醉茗。
「美文夕紅葉」天隨。
「夏雲」(英詩集)ヨネ・ノグチ。
「劍と戀との日本」ヨネ・ノグチとオーキン・ミラアとの共著。
六月、岩野泡鳴、雜誌「白百合」を脱して盛んに詩作す。
蒲原有明、上田敏等、佛蘭西象徴派の詩の移植に努む。
詩壇の情勢、俄然一變して、象徴詩、全盛の一新時期を劃す。

三十九年

一月　「ゆく雲」花外。
五月　「白羊宮」泣菫。
「玉蟲」醉茗。
「孔雀船」清白。
六月　「東海遊子吟」昨翠。
「寢覺草」月刻。
「花妻」林外。
「我が散文詩」梅溪。(散文詩の嚆矢)
「神祕的半獸主義」(論)泡鳴。
七月　「あやめ草」(詞華集)米次郎編。
「花守日記」夜雨。
「あららぎ」葉舟。
「釋迦」白星。
九月　「さゝ笛」白羊。
十月　「螢榮」醒川。
十一月　「泡鳴詩集」泡鳴。
「ゆめ見草」黨。
十二月　「豐旗雲」(詞華集)米次郎編。
敏、孤蝶等雜誌「藝苑」を創刊す。
前年有明、敏等によりて唱へられしフランス象徴派的詩風の影響各誌に現る。
雜誌「文章世界」三月創刊さる。
米次郎主唱の下に、四月、日英米三國詩人の合同成り、晩翠、泣菫、有明、林外、泡鳴、花外、白星、醉茗、月刻、敏、黨、露葉等のあやめ會組織さる。
八月、敏「音樂新報」に民謠の詞及び曲の蒐集の急務を主張す。
あやめ會に紛爭起り、林外、花外、白星等前後して脱會す。
雜誌「白百合」十一月號は、第一民謠號として發行され、詩壇に漸く民謠の精神侵入し來る。

四十年

一月　「天風魔帆」花外。
「湖畔の悲歌」胡夷。
二月　「二十八宿」夜雨。
三月　「朝花夜花」雨情。
「日本民謠全集」林外。
「うた日記」鷗外。
九月　「日本民謠全集續編」林外。
十一月　「新體詩作法」泡鳴。
十二月　醉茗、夜雨を中心として、舊文庫派の人々詩草社を結ぶ。
御風、東明、介春、露風、雨情等、早稻田詩社を起す。
雜誌「白百合」廢刊す。
六月、詩草社の機關雜誌「詩人」發刊さる。
九月、柳虹は從來の用語を斥け、現代口語の自由詩「塵溜」を發表す。之により詩壇の新氣運漸く熟し來る。
十月、黨により雜誌「新思潮」創刊。
十二月、泡鳴「新體詩史」を「新思潮」に連載しはじむ。
米次郎の有明、泡鳴等に關する英文評論

「新思潮」に發表さる。

四十一年

一月　「明治詩集」(詞華集)臥城。
　　「有明集」有明。
四月　「闇の盃盤」泡鳴。
五月　「大日蓮華」紫紅。
六月　「御風詩集」御風。
十月　「新自然主義」(評論)泡鳴。

一月、白秋、正雄、秀雄、勇、新詩社を連袂退社す。

雜誌「新思潮」二月號限り廢刊す。

口語體自由詩なる御風の「痩犬」、露風の「暗い扉」出で、泡鳴、嘉香、蓼峰等その是非を論ず。

雜誌「詩人」廢刊さる。

八月、白星、林外、花外、臥城、露葉、醉茗等都會詩社を結び、都會詩を發表す。

十一月、雜誌「明星」百號を以て廢刊さる。

四十二年

三月　「邪宗門」白秋。
九月　「廢園」露風。

一月、鷗外を中心に舊新詩社同人、寛、晶子、萬里、啄木、勇、露花により雜誌「スバル」創刊さる。杢太郎、白秋、秀雄等外部より聲援す。

五月、東明、介春、夕咲、朽葉等により自由詩社成立。月刊詩集「自然と印象」發刊さる。

十月、白秋、正雄、秀雄等により雜誌「屋上庭園」發刊さる。

四十三年

五月　「霧」醉茗。
七月　「柳の葉」寛。
九月　「路傍の花」柳虹。
十一月　「寂しき曙」露風。

雜誌「屋上庭園」風俗壞亂にて禁止さる。

三月、牧水を中心に、詩歌雜誌「創作」發刊。

荷風の主幹にて雜誌「三田文學」創刊さる。

建樹及び美妙逝く。

十月、雜誌「劇と詩」發刊さる。

四十四年

六月　「思ひ出」白秋。
　　「夜の舞踏」東明。

四月、夕暮、白日社を起し、雜誌「詩歌」を發刊す。

五月、「新思潮」廢刊さる。

白秋、雜誌「朱欒」を創刊す。

四十五年

一月　「夜雨集」夜雨。
　　「春の夢」夕咲。
四月　「平和」白星。
五月　「夜の葉」葵村。
七月　「夜」宗治。

四月、啄木逝く。

牧水、雜誌「自然」を創刊す。

「朱欒」六月號は、全紙を舉げ、白秋、露風の詩歌を輯錄し、詩集「勿忘草」として發行す。

15　敍事詩・劇詩略年表

敍事詩及び劇詩については、なほ書くべき多くがあつたが、事情上許されぬので、ここにその重要なる作品の略年表を掲げることにした。新體詩草創期の初頭より四十五年まで、明治年間の分である。

「十二の石塚」(敍事)
「孝女白菊の歌」(敍事)
「蓬萊曲」(劇詩)
「天地初發」(敍事)
「琵琶法師」(劇詩)
「魂迷月中刃」(劇詩)
半月。(單行本)十八年十月
直文。(洋學武藏雜誌)二十一年一月
透谷。(單行本)二十四年
半月。(「地下之友」)二十六年一月
藤村。(「文學界」)二十六年一月
泡鳴。(「女學雜誌」)二十七年

「霜夜の月」（叙事）
「比沼山の歌」（叙事）
「深山の美人」（叙事）
「墨染櫻」（叙事）
「馬前の夢」（叙事）
「星落秋風五丈原」（叙事）
「嘉播の親」（叙事）
「黒龍江上の悲劇」（叙事）
「玉匣兩浦島」（劇詩）
「心中お小夜新七」（叙事）
「源九郎義經」（叙事）
「日本武尊」（叙事）
「雷神の歌」（叙事）
「金剛山の歌」（叙事）
「國土創成賦」（叙事）
「佐太大神」（叙事）
「新驚曲」（叙事）
「豐太閤」（叙事）
「地獄の門姫」（叙事）
「日蓮上人」（劇詩）
「後の羽衣」（劇詩）
「長曾我部信親」（叙事）
「オルフォイス」（劇詩）

天遊。（二十八年「早稲田文學」）
巽軒。（二十九年「太陽」「帝國文學」）
雨江。（二十九年「一月「帝國文學」）
羽衣。（二十九年「一月「帝國文學」）
暁翠。（三十一年「反省雜誌」）
暁翠。（三十一年「帝國文庫」）
泡鳴。（三十二年「學窓餘談」）
暁翠。（三十三年「帝國文學」）
鷗外。（三十五年十二月「單行本」）
白星。（三十六年「片袖第三集」）
（三十六年「本文參照」）
同人（三十六年「本文參照」）
泣菫。（三十六年「明」）
泣菫。（三十六年「新小說」）
有明。（三十六年「太陽」）
有明。（三十六年「蜀紅袁愛」）
有明。（三十六年「蜀紅袁愛」）
泡鳴。（三十六年「讀賣新聞」）
泡鳴。（三十六年「百百合」）
紫紅。（三十六年「單行本」）
紫紅。（三十六年「單行本」）
紫紅。（三十六年「單行本」）
鷗外。（三十六年「單行本」）

「天馳使の歌」（叙事）
「魔出顯」（叙事）
「丸に井桁」（叙事）
「新曲浦島」（劇詩）
「鏽斧」（叙事）
「遺曲」（叙事）
「姫が曲」（叙事）
「人肉狂賣」（叙事）
「海堡拔郎」（劇詩）
「かぐや姫」（劇詩）
「脱走兵」（叙事）
「耶蘇の戀」（劇詩）
「黄金の鱗」（叙事）
「葛城の神」（叙事）
「釋迦」（叙事）
「史詩近藤重藏」（叙事）
「人魚の海」（叙事）
「平和」（劇詩）

泣菫。（三十七年十一月「新小說」）
白星。（三十七年「帝國文學」）
白星。（三十七年「新」七潮）
遊遙。（三十七年十二月「單行本」）
有明。（三十八年「太陽」）
有明。（三十八年「春鳥集」）
有明。（三十八年「春鳥集」）
泡鳴。（三十八年「太陽」）
泡鳴。（三十八年「單行本」）
遊遙。（三十八年「單行本」）
白星。（三十八年「單行本」）
泡鳴。（三十九年「太陽」）
泣菫。（三十九年「早稲田文學」）
白星。（三十九年「單行本」）
白羊。（三十九年「十一月「單行本」）
有明。（四十年「太陽」）
白星。（四十五年四月「單行本」）

二年

四月「珊瑚集」荷風譯。
五月「三人の處女」莫烏。

16 大正詩書及詩史略年表

「啄木遺稿」啄木。
「東京景物詩」白秋。
「祈禱」藻風。
九月「白き手の獵人」露風。
十一月「獨歩詩集」獨歩。
十二月「どんたく」夢二。
「露風詩集」露風。
六月雜誌「朱欒」廢刊す。

三年

一月「夏より秋へ」晶子。
四月「獄中哀歌」介春。
「太陽の子」幸次郎。
「西灘より」佐藤清。
五月「かなたの空」柳虹。
六月「世界の一人」省吾。
九月「眞珠抄」白秋。
十月「俚謠集」文部省文藝委員編。
「道程」光太郎。
十一月「りらの花」寛。
十二月「白金の獨樂」白秋。
「果樹園」健。
「戀心」東明。
「透谷全集」透谷。
二月、露風、柳虹、嘉香、三良、允、健、八十

倖相集り、未來社より年刊詩集「未來」第一輯を出版す。

この頃より詩に民主的精神の必要なることを高潮しその論議各誌に現る。

四年

一月　「浮彫」　藻風。

二月　「透谷全集」藤村、秀木、天知、秋骨編。

三月　「戀のしやれからべ」　泡鳴。

「マンダラ」マンダラ詩社。

四月　「末日頌」　碎花。

「明治詩歌選」新潮社編。

「鬱金草」　藻風編。

五月　「最初の一人」　宗治。

六月　「幻の田園」　露風。

七月　「鴉と雨」　寛。

八月　「沙羅の木」　鷗外。

九月　「日本詩歌論」　米次郎。

十月　「良心」　露風。

十一月　「聖三稜玻璃」　葬鳥。

十二月　「小夜曲」　夢二。

柳澤健、軈近の詩壇を論ず」を「文章世界」に發表す。

十二月二十日、平木白星四十歳を以て逝く。

五年

一月　「正義の兜」　惣之助。

「農民の言葉」　正夫。

「天葉詩集」　省吾。

二月　「民主主義の方へ」　碎花譯。

三月　「舞ごろも」　品子。

五月　「雪と花火」　白秋。

七月　「一人と全體」　宗治。

九月　「感情」

犀星、朔太郎等によつて、六月、雜誌

發刊さる。

敏、京都に於いて逝く、年四十。

藤村、フランスより歸朝す。

耿之介、碎花、健、省吾、八十、允等によつて

十二月、雜誌「詩人」發刊さる。

六年

一月　「旅人」　芳水。

二月　「月に吹える」　朔太郎。

十月　「狂へる歌」　惣之助。

十二月　「轉身の頌」　耿之介。

「子守唄」　泣菫。

「靈魂の秋」　春月。

朔太郎、文章世界、五月號に、「露風一派の詩を追放せよ」を發表し、世の注目を惹く。

八月二日、朽葉、白楊（共に二十九歳）夫吹岬君ケ濱附近にて溺死す。

十一月、詩話會成る。

七年

一月　「愛の詩集」　犀星。

三月　「ふるさと」　芳水。

四月　「昨日の花」　大學譯。

五月　「自分は見た」　元麿。

七月　「ダンテ神曲」　敏譯。

九月　「啄木選集」（詩歌集）　啄木。

「抒情小曲集」　犀星。

十月　「月郊詩集」　月郊。

「感傷の春」　春月。

「勝利」　柳虹。

「ぬかるみの街道」　宗治。

十一月、「風は草木にさゝやいた」　葬鳥。

「詩文研究」　允。

十二月　「海港」　柳澤、熊田、北村合著。

三重吉「赤い鳥」を發刊し、童謠の創始につとめ、白秋、八十の童謠、世間の注視を惹く。

八年

一月　「月光とピエロ」　大學。

二月　「ハイネ詩集」　春月譯。

三月　「地の子」　碎花。

四月　「日本詩集」　詩話會。

「泰西名詩名譯集」春月譯。
「默禱」峰人。
「草茂る」俊郎。
五月「流れの秋」史光。
「日本象徵詩集」未來社編。
「第二愛の詩集」犀星。
「草の葉」(第一卷)碎花譯。
「ゲエテ詩集」春月譯。
五月「蛙」鷗外。
「ホイットマン詩集」省吾譯。
「曙光」晩翠。
「愛と音樂」佐藤清。
六月「大地の愛」省吾。
「都會と田園」雨情。
「はつ戀」柳虹。
「砂金」八十。
七月「啄木全集(詩歌集)」啄木。
九月「白秋小唄集」白秋。
十月「晩翠詩集」晩翠。
「こけもゝ」秀夫。
「トンボの眼玉」(童謡集)白秋。
「聖水盤」順子。
十二月「童謡」節三編。
「春月小曲集」春月。

四月、詩話會同人により年刊詩集「日本詩集」第一卷出づ。泡鳴以下四十二家の詩を收む。

九年

一月「食後の唄」李太郎。
「白孔雀」八十譯。
「露西亞民謡集」曙夢譯。
二月「わすれな草」白秋。
「惱める森林」不二。
「感情同人詩集」犀星編。
三月「幻の日に」省吾。
「詩聖ゲエテ」昌樹。
「雀の生活」白秋。
四月「トラウベル詩集」正夫譯。
「哀樂兒」(詩劇)正夫。
六月「展望」幸次郎。
「靜かなる眉」八十。
「天馬の道に」啄翠。
「韻律と獨語」春聲。
「香炎華」矢部季。
「槐多の歌へる」槐多。
「ハイネ全集」春月譯。
「日本現代名詩集」康文編。
「日本詩集」詩話會。
七月「詩及小品集」獨歩。
「殉情詩集」春夫。
「カアペンタア詩集」碎花譯。
「太陽の愛」元麿。
「穀粒」暮鳥。
八月「寂しき都會」犀星。
「白秋詩集」白秋。
「時の流れ」藻風。
九月「牧神詩集」牧神會編。
「憧憬の丘」省吾。
「漱石全集」(俳體詩を收む)漱石。
「水の面に書きて」大學。
「私の花環」春月譯。
「百田宗治詩集」宗治。
「現代詩集」耿之介編。
十月「生と戀」露風。
「麥」千家、佐藤共著。
「牧羊神」敏。
十一月「失はれた寶玉」大學譯。
「正午の果實」初雄。
「豐麗な花」汪洋。
「蘆間の幻影」露風。
十二月「草の葉」碎花譯。
「滿月の川」惣之助。

「現代の詩及詩人」健。

五月九日、泡鳴四十八歳を以て逝く。

十年

一月
「鸚鵡と時計」(叢書)八十。
「白秋詩集第二卷」白秋。
「見たれざる人」一政。
「樂園の途上」省吾。

二月
「別後」(集)雨情。
「不思議な影像」福原清。
「現代佛蘭西詩集」健譯。
「現代詩人選集」詩話會編・島崎藤村五十年祝賀。

三月
「彌生集」醉茗。

四月
「孤獨の愛」ゆき子。
「野天の光り」元麿。
「スフインクス」勝五郎。
「日本民謠集」春月編。

五月
「泡鳴全集」泡鳴。
「柿の巢にて」葊鳥。
「川路柳虹詩集」柳虹。
「兎の電報」(集)白秋。
「戀愛小曲集」汪洋。
「日月の上に」逸枝。
「フリイヂヤ」秀夫。

「放浪者の詩」逸枝。
「十五夜お月さん」(集)雨情。
「黑衣聖母」耿之介。
「日本詩集」詩話會。
「日本民謠名作集」雨情、史光編。
「サマン選集」大學譯。
「洗心雜話」白秋。
「小唄」敏編。
「明るい時」光太郎譯。
「日本童謠選集」八十勉編。

十一月
「愛のゆくへ」東明。
「ホキットマン詩集」武郎譯。

十二月
「新月」宗治。
「深紅の人」惣之助。
「合掌の春」健。
「世界の魂」正夫。
「曙の聲」柳虹。
「二重國籍者の詩」米次郎。
「空の羊」八十。
「貞珠島」(集)露風。
「富田碎花詩集」碎花。
「まざあ・ぐうず」白秋譯。

二月、藤村生誕五十年祝賀の會、詩話會によつて起され、記念詩集「現代詩人選集」發刊さる。

三月、白秋、耿之介、八十、允、藻風等、詩話會を脫し、別に新詩會を起す。
新詩會編、「現代詩集」第一輯出づ。
寛、晶子、荷風外五氏により、十一月、雜誌「明星」復活さる。
平戸廉吉「日本未來派運動第一回宣言」の第一聲を擧げ、日本最初の未來派詩人を以て立つ。

十一年

一月
「愛の歌」虎村。
「汪洋新詩集」汪洋。
「泰西社會詩人詩集」豐彥、一夫、碎花、宗治、省吾、正夫共譯。
「日本社會詩人詩集」同前編。

二月
「見知らぬ愛人」八十。
「美想曲」逸枝。
「青い翼」宗治。
「星より來れる者」犀星。

三月
「船出の歌」正夫。
「荒野の娘」惣之助。

三月
「宝生犀星詩集」犀星。
「日本詩集」詩話會編。
「柳澤健詩集」健。

四月

「日本の笛」白秋。
「林檎一つ落つ」米次郎。
「新しき欲情」朔太郎。
「新しき小徑」大學。
「華やかな散歩」惣之助。
「赤彦童謠集」赤彦。
「忘れた顔」治郎。
「空と樹木」喜八。
「沈默の血潮」米次郎。
「蠟人形」八十。
「英國神祕詩抄」耿之介譯。
「象徵詩集」露風。
「慰めの國」春月。
「萬物の世界」(童謠)蓉鳥。
「共生の旗」省吾。
「信仰の曙」露風。
「有明詩集」有明。
「高原の處女」(歌謠)正夫。
「祭の笛」(民謠集)白秋。
「田舍の花」犀星。
「豫言」柳虹。
「午前の愛撫」健。
「夜の河」元麿。
「月夜の園」大學。

五月

六月

七月

「溫室の花」柳虹。
「季節の馬車」惣之助。
「青き樹かげ」露風。
「若き鄕愁」省吾。
「時代の手」碎花。
「炎天」元麿。
「觀相の秋」白秋。
「月光微韻」白秋。
「初冬の星」白秋。
「落葉松」白秋。
「月に開く窓」高鍬侊佑。
「風車」宗治。
「步む人」柳虹。
「琉球諸島風物詩集」惣之助。
「夢の小函」(民謠集)白秋。
「螢と蓮」(民謠集)白秋。
「こんこん小山」(民謠集)白秋。
「朝立つ虹」(民謠集)白秋。
「城ケ島の雨」(民謠集)白秋。
「朱欒の港」(民謠集)白秋。
「英詩選集」
「散慕」省吾。
「古風な月」耿之介。
「眞紅の消息」須磨子。

八月

九月

十月

十一月

十二月

「土に祈る」康文。
四月、柳虹「日本詩人」に、「未來派及び立體派とその詩歌」を發表す。
白秋、耕作主幸の下に、雜誌「詩と音樂」創刊さる。

十二年

一月
「上田敏詩集」敏。
「河井酔茗詩集」酔茗。
「山上に立つ」米次郎。
「亂舞する焰」一夫。
「巡禮英詩集」米次郎。
「雪にかく」惣之助。
「春の序曲」春月。
「ダダイスト新吉の詩」辻潤編。
「我一九二二年」春夫。
「樹木」初雄。
「佛蘭西詩選」義雄。
「バーンス詩集」春月譯。
「ワイルド詩集」耿之介譯。
「最後の舞踏」米次郎。
「海の詩集」佐藤清。
「散華樂」勝五郎。
「砂上の夢」雨情。
「我が手を見よ」米次郎。

二月

三月

四月

五月

「戀の彷徨者」正夫。
「日本詩集」詩話會。
「遠きばら」大學。
「純愛詩集」春月。
「水淵集」白秋。
「ボオ全詩集」佐藤一英譯。
「夢心地」春月。
七月 「颶風の眼」惣之助。
「こがね蟲」光晴。
「蝶を夢む」朔太郎。
十一月 「災禍の上に」詩話會編。
「花咲爺さん」(童謡集) 白秋。
九月一日、帝都大震災のため、雜誌は殆んど休刊し、「詩と音樂」「詩聖」十月より廢刊す。
十一月、詩話會は、宗治、省吾、柳虹共編の下に、詩壇四十八家の震災に關する詩を集錄せし震災記念詩集「災禍の上に」を出版しその收得を以て罹災せる詩人救恤の費に充つ。

十三年

三月 「火山灰」勝五郎。
「智慧に輝く愛」春月。
「現代抒情詩選」白村譯。
四月 「神祕思想と近代的評論集」耿之助。
五月 「蛾と螢」惣之助。
「日本詩集」詩話會。
「ヨネ・ノグチ代表詩」米次郎。
「西條八十童謡全集」八十。
「高層雲の下」喜八。
「火星」啓。
「世界童謡集」八十、まさる共譯。
六月 「青い眼の人形」(新謡集) 雨情。
「日本詩集」左翼戰線詩華集。
「あしの葉」白秋。
「海の瞳」正夫。
「隣人」英治。
七月 「白秋童謡集」白秋。
「雨情民謡百篇」雨情。
八月 「光の獻詞」勝太郎。
「水を歩みて」惣之助。
「花巡禮」悟堂。
「希臘詞華抄」藻風譯。
「嘆きの孔雀」正夫。
「銅牌」雋太郎。
「眞夏の星」元麿。
「爽かな空」丈二。
九月 「現代詩の研究」省吾。
十月 「耕人の手」正夫。
「現代抒情小曲選集」八十。
「月の出」福原清。
「詩壇の散歩」耿之助。
十一月 「物思ひ」(小曲) 春月。
十二月八日、碁鳥常陸磯濱に逝く、年四十一。

十四年

一月 「世界の民衆に」汪洋。
二月 「風、光、木の葉」雋夫。
「明治大正詩選」詩話會。
「筑波の白百合」正夫。
三月 「春の扉」(小曲) 省吾。
「斑猫」須磨子。
四月 「上田敏詩集」敏。
「啄木詩集」啄木。
「はつ戀」(小曲) 柳虹。
「自然の惠み」春月。
「日本詩集」詩話會。
「詩岳に登る」允。
「季節の窓」白秋。
「死の島の美女」正夫。
「幻想詩劇」正夫。
「青春の地へ」(詩論) 省吾。
五月
六月

「日本童謡集」童謡詩人會。
「よしきり」(童謡集)暮鳥。
「小鳥と花」廣介。
七月
「白秋詩歌選」白秋。
八月
「純情小曲集」朔太郎。
八月
「ハイネ小曲集」春月譯。
九月
「月下の一群」大學譯。
十月
「一人の思想より」汪洋。
「情熱の翼」正夫。
「新しき欲情」朔太郎。
十一月
「日本現代詩選」白秋、柳虹、露風共編。
「千家元麿詩集」元麿。
十二月
「表象抒情詩」米次郎。
「動物詩集」大學譯。
「青空を見る」省吾。
「日本童謡集」(一九二五年版)出版さる。
河井酔茗生誕五十年記念の祝賀會及び講演會、築地小劇場、上野精養軒に於て行はれ、白秋、露風、柳虹共編に成るその祝賀記念出版「現代日本詩選」、河井氏に獻呈さる。

十五年

一月
「夢見草」(小曲集)正夫。
二月
「眼と眼」介春。
「砂の枕」大學。
「北風と薔薇」宗治。
「佐藤春夫詩集」春夫。
「夜の一部」不二。
「巴里小曲集」八十。
四月
「日本詩集」詩話會。
五月
「幻の麗人」(歌謡詩)正夫。
「野茨の道」省吾。
六月
「からたちの花」(童謡集)白秋。
「螢の燈臺」(童謡集)雨情。
「詩學雜考」峰人。
七月
「おさんだいしよさま」(民謡集)雨情。
「風景は動く」白秋。
「神と人」露風。
「日本童謡集」童謡詩人會編。
「戀愛詩人」米次郎。
「自然禮讃」米次郎。
「月夜の牡丹」暮鳥。
「兵隊」大鹿卓。
「夏草」元麿。
「象の子」(童謡集)白秋。
「秋に見る夢」雋夫。
「第二表象抒情詩」米次郎。
「現代民謡選集」白秋編。
十月
「お月さま」(童謡集)露風。
「三富朽葉詩集」朽葉。
「日本民謡大全」橋本繁編。
「黒い蝶」(小曲)柳虹。
「日夏耿之介定本詩集」耿之介。
十一月
「海の聖母」吉田一穂。
「三木露風詩集」露風。
「彼女」八十。
「情艶詩集」惣之助。
「水の流浪」光晴。
五月、故山村暮鳥の詩碑、水戸大洗海岸に建立さる。
七月、藤村の詩碑、信州小諸に建立さる。
十月、詩話會解散す。
十一月、白秋により雜誌「近代風景」創刊さる。

北原白秋

昭和四年四月十二日印刷
昭和四年四月十五日發行

現代日本文學全集　第三十七篇

著者代表　島崎藤村

編纂兼發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一一一番
一一一一番
二二二二番
三二一番
四番

繁榮社秀英舍印刷

現代日本詩集
現代日本漢詩集

杉浦非水裝幀

改造社版